年海總第六七二號ノ三ヲ以テ及通達候次第モ有之候處今後ハ戰艦、巡洋戰艦進水ノ場合及其ノ他子順以上ノ軍艦進水ニ際シ特ニ適當ト認ムル場合ニ限リ御臨幸又ハ皇族御差遣ヲ奏請シ其ノ他ノ場合ニ在リテハ之ヲ差控フルコトニ致度旨執奏方宮內大臣ニ及照會候處今般同大臣ヨリ本件遂奏聞候趣回答有之候條此旨心得ヘシ

●驅逐艦、潛水艦、水雷艇、掃海艇及特務艦ノ進水ノ件

昭和四年三月二十日
達第二十七號

改正　昭和八年第二四號

驅逐艦、潛水艦、水雷艇、掃海艇及特務艦ノ進水ハ鎭守府司令長官（舞鶴要港部ニ在リテハ舞鶴要港部司令官）ニ於テ軍艦進水規則ヲ斟酌シ適宜施行スベシ但シ進水命令書ハ左記ニ依ル儀ト心得ベシ

大正七年達第百號ハ之ヲ廢止ス

驅逐艦何（何號第何潛水艦、水雷艇、第何號掃海艇工作艦何、運送艦何、第何號掃等）　年　月　日工ヲ起シ今ヤ船體成ルヲ告ゲ玆ニ進水セシム

年　月　日

何鎭守府（舞鶴要港部）司令長官（司令官）爵　氏　名

昭和四年三月二十日
官房第一〇〇六號

改正　昭和八年海九五七號

（海軍大臣ヨリ各鎭守府司令長官宛）

驅逐艦、潛水艦、水雷艇、掃海艇及特務艦ノ進水ニ關スル件申進

今般達第二十七號ヲ以テ驅逐艦、潛水艦、水雷艇、掃海艇及特務艦ノ進水ニ關シ令達相成候處內國私立造船所ニ於テ製造スル驅逐艦、潛水艦、水雷艇、掃海艇及特務艦ノ進水ハ各其ノ造船所所在管區ノ鎭守府司令長官ニ於テ施行セラルル儀ト御承知相成度追テ進水命令書ハ司令長官（司令長官差支アル時ハ部下將官）之ヲ朗讀スルコトトセラレ度尙大正七年六月十三日附申進候官房第二一二四號ハ自然消滅ノ儀ト御承知相成度

【海軍】

第九款　兵器關係

●兵器格納倉庫ノ名稱

明治四十年四月一日
達第二十八號

改正　大正二年第一二七號、四年第八九號

自今兵器格納庫ノ名稱左ノ通定ム

大砲庫	主トシテ砲身、砲架等ノ大兵器ヲ納ム
砲銃要具庫	小口徑砲、小銃及大砲小銃ノ附屬品ヲ納ム
彈丸庫	炸藥ナキ彈丸及空藥莢等ヲ納ム
炸藥彈丸庫	炸藥彈、空彈、空藥莢等ヲ納ム
火工品庫	信管、雷管、號火、火筒、發光器等ヲ納ム
火藥庫	紐狀火藥、彈藥包、下瀨火藥、綿火藥、有煙火藥、魚形水雷實用頭部、導火藥綿、裝藥等ヲ納ム
水雷庫	主トシテ魚形水雷、敷設水雷繩、壓搾喞筒、發射管等ノ大兵器ヲ納ム
電機庫	發電機、探海電燈等ヲ納ム
水雷電機要具庫	各種水雷ノ附屬品及電氣器具ヲ納ム
電纜格納池	滯水法ニテ電纜ヲ格納スル貯藏池ヲ云フ
電纜格納所	乾燥法ニテ電纜ヲ格納スル穴倉ヲ云フ
計器庫	主トシテ水路用計器ヲ納ム
經線儀庫	經線儀及甲板時計ヲ納ム

●魚形水雷失踪亡失取扱規則

大正十四年九月十五日
達第百二十四號

改正　昭和四年第一二三號

魚形水雷失踪亡失取扱規則左ノ通改正ス

魚形水雷失踪亡失取扱規則

第一條　艦船其ノ他ニ於テ魚形水雷ヲ失踪セシメタルトキハ直ニ全力ヲ盡シテ之ヲ捜索スヘシ

捜索上必要ト認ムルトキハ附近ノ海軍各廳若ハ艦船ニ助力ヲ求メ又ハ所屬長官ノ認許ヲ得テ船舟人夫等ヲ傭入スルコトヲ得但シ至急ヲ要スルトキハ便宜傭入シ事後報告スヘシ

第二條　前條ニ依リ捜索ヲ爲スモ發見スルコト能ハサルカ又ハ他ニ重大ナル事故アリテ捜索ヲ繼續スルコト能ハサルトキハ捜索上參考ト爲ルヘキ事項ヲ詳記シ懸賞捜索方ヲ所在海軍區又ハ警備區ヲ管スル鎭守府司令長官又ハ要港部司令官ニ具申

【海軍】

シ同時ニ詳細ナル失踪報告書(第一號書式)ヲ所屬長官及在籍鎭守府司令長官ニ提出スヘシ所屬長官ハ意見ヲ附シ之ヲ海軍大臣ニ進達スヘシ

第三條　鎭守府司令長官又ハ要港部司令官前條ノ具申ヲ受ケタルトキハ配付豫算ノ範圍內ニ於テ左記ニ依リ懸賞搜索ヲ爲スヘシ

廣告ノ日ヨリ一箇月以內　金壹百圓以內
同　二箇月以內　金七拾五圓以內
同　三箇月以內　金五拾圓以內
同　三箇月以後　金參拾圓以內

廣告ノ日以前ニ發見又ハ拾得シタル者ニ對シテハ金壹百圓以內ノ報酬ヲ與フルコトヲ得

第四條　艦船外國ノ領海又ハ其ノ附近海面ニ於テ懸賞搜索ヲ行フノ要アルトキハ臨機ノ處置ヲ爲シ直ニ之ヲ在籍鎭守府司令長官ニ報告シ當該司令長官ハ之ヲ海軍大臣ニ屆出ツヘシ

第五條　懸賞搜索廣告ノ日ヨリ三箇月ヲ經過スルモ魚形水雷發見又ハ拾得ノ屆出テナキトキハ懸賞ヲ爲シタル鎭守府司令長官又ハ要港部司令官ハ其ノ他ニ通達シ當該艦船其ノ他ハ之ヲ亡失ト看做シ兵器經理規程第二十八條ニ依リ處理スヘシ

第六條　艦船其ノ他ニ於テ魚形水雷ノ失踪報告後之ヲ發見又ハ拾得シタルトキハ其ノ旨所屬長官、在籍鎭守府司令長官及懸賞ヲ爲シタル鎭守府司令長官又ハ要港部司令官ニ報告シ所屬長官ハ之ヲ海軍大臣ニ進達スヘシ但シ魚形水雷ノ亡失處分後之ヲ發見又ハ拾得シタルトキハ其ノ旨最寄鎭守府司令長官又ハ舞鶴要港部司令官ニ報告シ當該司令長官又ハ司令官ハ受人手續ヲ爲サシムルト同時ニ之ヲ海軍大臣ニ報告スヘシ

書式第一號（用紙美濃紙判罫紙）

何々機密第　號
昭和　年　月　日
某艦船、部隊、學校長　氏　名㊞

司令長官氏名宛

〔海軍〕

（供用廳名）　魚形水雷失踪報告

品名	種類	數量	番號	記事
何々魚雷				年　月某軍需部
何々頭部				
何々縦舵機				

一、發射年月日時刻及場所
二、發射機ノ種類及番號
三、發射ノ種類
四、當時ノ氣象海上ノ狀況
五、主ナル測定諸元
六、發射時ヨリ失踪迄ノ魚雷ノ狀況
七、失踪位置及水深（要スレバ附圖添付）
八、失踪後ノ處置、搜索ノ狀況
九、失踪ノ原因
一〇、意見

●海底彈丸引揚ニ關スル件

大正七年五月二十四日
軍第一六九號ノ三

（海軍省軍務局長ヨリ樞密院各要塞司令部長宛）

海底彈丸引揚ニ關スル件

本件ニ關シ別紙甲號之通吳鎭守府參謀長ノ照會ニ對シ乙號ノ通及回答候條御參考迄ニ及通牒候

（甲號）

大正七年五月十日吳鎭第五二一號（吳鎭參謀長ヨリ海軍省軍務局長宛）

海底彈丸引揚ニ關スル件

近來一般部外者ノ海軍ニ於テ射放ノ海底沈沒砲彈引揚ヲ出願スル者漸次增加シ又ハ許可ヲ受ケスシテ既ニ拾得保持セル者少カラサル趣ヲ以テ右支障ノ有無地方官署ヨリ照會シ來ルモノ有之候條此ノ際左記ノ通處分方針ヲ定メ管區內各關係廳ヘ其ノ旨通告致度候處豫メ之ニ關スル貴局ノ御意見承知致度

右照會ス

一　吳軍港境域全海面內及大分縣吳崎海軍大砲發射場附近海中ニ於テハ彈丸ヲ引揚拾得スルコトヲ得ス

〔海軍〕

二　右以外ノ地方ニ於ケル引揚彈丸中軍機ニ渉ルモノ又ハ危險ノ虞アルモノアルヘキヲ以テ引揚ノ上ハ必ス吳鎭守府ニ屆出テ檢査ヲ受ケタル上處分スルヲ要ス

右檢査ノ方法ハ本府拾得品檢査處理規程ニ據ル

三　軍機上必要ト認メ又ハ危險ノ虞アル彈丸ハ無償ニテ之ヲ提供セシムルコトアルヘシ

四　第二號ニ依リ檢査ノ上第三號ニ該當セサル彈丸ハ拾得者便宜處分差支ナシ

（乙號）

大正七年五月二十三日軍第一六九號ノ二（海軍省軍務局長ヨリ吳鎭守府參謀長宛）

海底彈丸引揚ニ關スル件

本件ニ關シ吳鎭第五二一號照會ノ趣了承右ハ御來意ノ通處置セラレ差支ナキ意見ニ有之候

右回答ス

第十款　航空關係

●航空法

大正十年四月九日　法律第五十四號

（總理、海軍、大藏、陸軍、內務、遞信大臣副署）

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル航空法ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

航空法

第一章　總則

第一條　本法ニ於テ航空機トハ人ノ搭乘シ得ル氣球、風、航空船及飛行機ヲ謂フ

本法ニ於テ航空トハ陸上又ハ水上ノ滑走ヲ、離陸又ハ著陸トハ離水又ハ著水ヲ包含ス

第二條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ノ所有スル航空機ハ之ヲ日本航空機トス

一　日本國又ハ日本ノ公共團體

二　日本臣民

三　日本法令ニ依リ設立シタル會社ニシテ合名會社ニ在リテハ社員ノ全員、合資會社及株式合資會社ニ在リテハ無限責任社員ノ全員、株式會社ニ在リテハ取締役ノ全員カ日本臣民タルモノ

四　前號ニ揭クル法人以外ノ法人ニシテ日本法令ニ依リ設立シ其ノ代表者ノ全員カ日本臣民タルモノ

第三條　本法ハ本章及第四十一條乃至第四十三條ノ規定ヲ除クノ外軍用航空機ニ之ヲ適用セス

國ノ使用ニ供スル航空機ニ付テハ第二十一條、第二十八條乃至第三十條、第三十二條、第三十四條及第四十條ノ規定ニ關シ勅令ヲ以テ別段ノ規定ヲ爲スコトヲ得

第四條　航空ニ關シ條約又ハ之ニ準スヘキモノニ別段ノ規定アルトキハ其ノ規定ニ從フ

第二章　航空機ノ檢査及登錄

第五條　航空機ヲ製造スル者ハ其ノ設計、材料、部分品、技功及製品ニ付行政官廳ノ檢査ヲ受クヘシ

堪航證明書ナキ航空機ノ所有者ハ其ノ航空機ニ付行政官廳ノ檢査ヲ受クヘシ

前二項ノ檢査ニ合格シタル航空機ニ對シテハ堪航證明書ヲ交付ス

第一項及第二項ノ規定ハ命令ノ定ムル所ニ依リ行政官廳ノ許

可ヲ受ケタル航空機ニ之ヲ適用セス

第六條　堪航證明書ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ其ノ效力ヲ失フ

一　堪航證明書ニ記載シタル有效期間ヲ經過シタルトキ

二　第十四條第一項ノ規定ニ依リ航空機ノ使用ノ禁止ヲ命シタルトキ

前項第一號ノ有效期間ハ前條ノ檢査ニ合格シタル日ヨリ起算シ六月以內ニ於テ行政官廳之ヲ定ム有效期間ハ第十一條ノ檢査ノ結果ニ依リ檢査ノ日ヨリ起算シ六月以內ニ於テ行政官廳之ヲ延長スルコトヲ得

第七條　第五條ノ檢査ニ合格シタル航空機ノ所有者ハ行政官廳ニ其ノ航空機ノ登錄ヲ申請スルコトヲ得

航空機ノ登錄事項ハ航空機ノ所有者ノ氏名名稱、登錄記號其ノ他命令ヲ以テ定ムル事項トス

登錄シタル事項ニ變更アリタルトキハ航空機ノ所有者ハ其ノ日ヨリ起算シ十四日以內ニ行政官廳ニ變更ノ登錄ヲ申請スヘシ

登錄シタル航空機ニ對シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ航空機ノ所有者ノ氏名名稱、登錄記號其ノ他ノ登錄事項ヲ記載シタル登錄證明書ヲ交付ス

第八條　航空機カ左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ其ノ際ノ航空機ノ所有者ハ其ノ日ヨリ起算シ十四日以內ニ行政官廳ニ堪航證明書ヲ返付スヘシ

一　滅失又ハ破壞シタルトキ

二　解撤セラレタルトキ

三　其ノ堪航證明書カ其ノ效力ヲ失ヒタルトキ

登錄シタル航空機カ左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ其ノ際ノ航空機ノ所有者ハ其ノ日ヨリ起算シ十四日以內ニ行政官廳ニ登錄證明書ヲ返付スヘシ

一　滅失又ハ破壞シタルトキ

二　解撤セラレタルトキ

三　日本國籍ヲ喪失シタルトキ

四　其ノ堪航證明書カ其ノ效力ヲ失ヒタルトキ

前項第一號乃至第三號ノ場合ニ於テハ同時ニ抹消登錄ヲ申請スヘシ

前項ノ場合ニ於テ抹消登錄ノ申請ナキトキ又ハ第二項第四號ノ場合ニ於テハ行政官廳ハ職權ヲ以テ抹消ノ登錄ヲ爲スコトヲ得

第九條　登錄シタル航空機ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ國籍記號、登錄記號竝所有者ノ氏名名稱及住所ヲ表示スヘシ

第十條　航空機ハ前條ノ規定ニ依ル表示ヲ爲シ且堪航證明書及登錄證明書ヲ備附クルニ非サレハ之ヲ航空ノ用ニ供スルコトヲ得ス

第十一條　行政官廳ハ定期又ハ臨時ニ航空機ノ檢査ヲ爲スコトヲ得

第十二條　第五條第一項第二項及第十條ノ規定ハ航空機ノ試驗ノ爲飛行場又ハ命令ヲ以テ定ムル場所ニ於テ航空スル航空機ニ關シテハ之ヲ適用セス

第十三條　第五條、第七條、第八條及第十一條ニ規定スルモノノ外航空機ノ檢査又ハ登錄ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條　行政官廳ハ第十一條ノ檢査ノ結果ニ基キ其ノ他航空機ノ現狀ニ因リ必要アルトキハ航空機ノ使用ノ制限、停止又ハ禁止ヲ命スルコトヲ得

行政官廳ハ前項ノ規定ニ依リ制限ヲ命シタルトキハ堪航證明書ニ制限事項ヲ附記シ停止ヲ命シタルトキハ停止中堪航證明書ヲ領置ス

第三章　乘員

第十五條　航空機ノ乘員ニ非サレハ航空機ニ搭乘シテ其ノ運航ニ從事スルコトヲ得ス

乘員ハ技倆證明書及航空免狀ヲ有スルコトヲ要ス

第十六條　技倆證明書ハ命令ノ定ムル所ニ依リ行政官廳ノ行フ考査ニ合格シタル者ニ之ヲ交付ス技倆證明書ヲ有スル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ航空免狀ノ交付ヲ受クルコトヲ得

第十七條　乘員ハ技倆證明書及航空免狀ヲ携帶スルニ非サレハ運航ニ從事スルコトヲ得ス

第十八條　行政官廳ハ乘員ニ對シ定期又ハ臨時ニ檢査ヲ爲スコトヲ得

第十九條　第十五條第一項ノ規定ハ飛行場又ハ命令ヲ以テ定ムル場所ニ於テ航空機ニ搭乘シテ運航練習ヲ爲ス者及運航練習ノ爲乘員ト同乘シ共同シテ運航ニ從事スル者ニ之ヲ適用セス

第二十條　行政官廳ハ乘員引續キ六月以上運航ニ從事セサルトキ、第十八條ノ檢査ノ結果ニ基キ必要アルトキ又ハ保安上必要アルトキハ就業ノ制限、停止又ハ禁止ヲ命スルコトヲ得

行政官廳ハ前項ノ規定ニ依リ制限ヲ命シタルトキハ航空免狀ニ制限事項ヲ附記シ停止ヲ命シタルトキハ停止中航空免狀ヲ領置ス

第一項ノ規定ニ依リ禁止ヲ命セラレタル乘員ハ其ノ日ヨリ起算シ十四日以內ニ行政官廳ニ航空免狀ヲ返付スヘシ

第四章　飛行場及其ノ經營者

第二十一條　飛行場ヲ設置セムトスル者、其ノ區域ヲ變更セムトスル者又ハ公共ノ用ニ供スル飛行場ヲ廢止セムトスル者ハ行政官廳ノ許可ヲ受クヘシ公共ノ用ニ供スル飛行場ヲ公共ノ用ニ供セサル飛行場ニ變更シ又ハ公共ノ用ニ供セサル飛行場ヲ公共ノ用ニ供スル飛行場ニ變更セムトスル者亦同シ

第二十二條　公共ノ用ニ供スル飛行場ノ經營者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ航空ニ必要ナル設備ヲ爲スヘシ

第二十三條　公共ノ用ニ供スル飛行場ノ經營者ハ行政官廳ノ許可ヲ受クルニ非サレハ其ノ飛行場ヲ他ノ目的ニ使用シ又ハ使用セシムルコトヲ得ス

第二十四條　行政官廳ハ飛行場ノ境界ヨリ外方五百「メートル」ノ區域內ニ於テ航空ノ障礙ト爲ルヘキモノアルトキハ飛行場ノ經營者ニ對シ必要ナル航空標識ノ設置ヲ命スルコトヲ得

飛行場ノ經營者ハ前項ノ航空標識ノ設置又ハ維持ノ爲必要アルトキハ行政官廳ノ許可ヲ受ケ日出後日沒前ニ限リ他人ノ土地ニ立入リ若ハ障礙ト爲ルヘキ物件ヲ除去シ又ハ必要ナル土地若ハ物件ヲ使用スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ經營者ハ豫メ其ノ土地又ハ物件ノ占有者ニ其ノ旨通知スヘシ

飛行場ノ經營者ハ第一項ノ航空標識ノ維持ノ爲緊急ノ必要アルトキハ前項ノ規定ニ拘ラス他人ノ土地ニ立入リ若ハ障礙ト爲ルヘキ物件ヲ除去シ又ハ必要ナル土地若ハ物件ヲ使用スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ經營者ハ遲滯ナク其ノ旨行政官廳ニ屆出テ且其ノ土地又ハ物件ノ占有者ニ通知スヘシ

第二十五條　前條ノ規定ニ依ル立入、除去又ハ使用ニ因リ生シタル損害ハ飛行場ノ經營者之ヲ補償スヘシ

前項ノ規定ニ依ル補償ノ金額ニ關シ協議調ハサルトキハ行政官廳ノ決定ヲ求ムルコトヲ得

〔海軍〕

前項ノ決定ニ不服アル者ハ其ノ決定ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ起算シ三月以內ニ通常裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二十六條　第二十四條第二項第三項及前條ノ規定ハ許可又ハ屆出ニ關スル規定ヲ除クノ外軍用ニ供スル飛行場ノ境界ヨリ外方五百「メートル」ノ區域內ニ於テ航空ノ障礙ト爲ルヘキモノアルトキ必要ナル航空標識ヲ設置又ハ維持スル場合ニ之ヲ準用ス

第二十七條　公共ノ用ニ供スル飛行場ノ經營者ハ他人ノ運航スル航空船又ハ飛行機ニ對シ其ノ飛行場ニ於テ著陸又ハ離陸スルコトヲ拒ムコトヲ得ス但シ行政官廳ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ經營者其ノ飛行場ノ使用ニ對シ使用料ヲ請求セムトスルトキハ豫メ其ノ額ヲ定メ行政官廳ノ認可ヲ受クヘシ

第二十八條　公共ノ用ニ供セサル飛行場ノ經營者ハ行政官廳ノ許可ヲ受クルニ非サレハ他人ノ運航スル他人ニ屬スル航空機ヲシテ其ノ飛行場ニ於テ著陸又ハ離陸セシムルコトヲ得ス

第五章　航空及運送

第二十九條　航空船及飛行機ハ陸上ニ在リテハ飛行場ニ非サル場所、水上ニ在リテハ命令ヲ以テ禁止スル場所ニ於テ離陸又ハ著陸スルコトヲ得ス但シ故障若ハ避難ノ爲其ノ他已ムコトヲ得サル事由アルトキ又ハ行政官廳ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第三十條　故ナク皇居、禁苑、離宮、行在所若ハ神宮ノ上空ニ於テ又ハ皇陵ノ上空千「メートル」以下ニ於テ航空機ノ運航ヲ爲スコトヲ得ス

前項ニ揭クル場所ノ外航空ニ關スル制限又ハ禁止ヲ必要トスル場所ニ關シテハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十一條　戰時又ハ事變ニ際シ必要アルトキハ行政官廳ハ航空機ノ航空ヲ禁止スルコトヲ得

第三十二條　日本航空機ニ非サル航空機ハ行政官廳ノ許可ヲ受クルニ非サレハ之ヲ航空ノ用ニ供スルコトヲ得ス

第三十三條　日本國外ヨリ發航シテ日本國內ニ至リ若ハ日本國內ヨリ發航シテ日本國外ニ至ル航空機又ハ日本國外ヨリ發航シ著陸スルコトナクシテ日本國ヲ通過シ日本國外ニ至ル航空機ハ行政官廳ノ指定スル航空路ニ由リ航空スヘシ

第三十四條　日本國外ヨリ發航シテ日本國內ニ至リ又ハ日本國

〔海軍〕

內ヨリ發航シテ日本國外ニ至ル航空機ハ行政官廳ノ許可ヲ受ケタル場合ヲ除クノ外行政官廳ノ指定スル飛行場ニ於テ著陸又ハ離陸スヘシ

第三十五條　日本航空機ニ非サル航空機ニ依リ有償ニテ日本各地ノ間ニ於テ旅客又ハ貨物ノ運送ヲ爲スコトヲ得ス但シ行政官廳ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第三十六條　行政官廳ノ許可ヲ受クルニ非サレハ日本航空機ニ依リ運送業ヲ營ムコトヲ得ス

第六章　雜則

第三十七條　航空標識ノ用地又ハ公共ノ用ニ供スル飛行場ノ用地トスル爲必要ナル土地及水ノ使用ニ關スル權利其ノ他土地ニ關スル所有權以外ノ權利ハ之ヲ收用又ハ使用スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依ル收用又ハ使用ニ關シテハ土地收用法ヲ適用ス

第三十八條　公共ノ用ニ供スル飛行場ノ用地ニ付テハ納稅義務者ノ申請ニ因リ其ノ地租ヲ免除ス但シ一時ノ使用ニ供スルモノ又ハ有料借地ノモノニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第三十九條　關稅法中船舶、船長、船用品及海路運送竝之ニ關スル犯則事件ノ調查、處分及處罰ニ付テノ規定ハ航空機、航空機ノ長、航空機ノ機用品及航空機ニ依ル外國貨物ノ運送竝之ニ關スル犯則事件ノ調查、處分及處罰ニ付之ヲ準用ス但シ關稅法中開港トアルハ第三十四條ノ飛行場トス

第四十條　第三十三條ノ航空機カ故障又ハ避難ノ爲其ノ他已ムコトヲ得サル事由ニ因リ第三十四條ニ規定スル著陸ノ場所以外ニ著陸シタルトキハ稅關官吏其ノ地ニ在ル場合ニ於テハ稅關官吏ニ、稅關官吏其ノ地ニ在ラサル場合ニ於テハ警察官吏ニ遲滯ナク屆出ツヘシ

前項ニ規定スル航空機ハ行政官廳ノ許可ヲ受クルニ非サレハ離陸スルコトヲ得ス

第四十一條　日本國外ヨリ發航シテ日本國內ニ至ル航空機ニ關シテハ傳染病豫防ノ爲檢疫ヲ施行ス

前項ノ檢疫ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第四十二條　前條ノ規定ハ內地、朝鮮、臺灣相互間ニ付之ヲ準用ス

前項ノ內地ニハ樺太ヲ包含ス

〔海軍〕

第四十三條　航空機ノ救難及之ニ關スル處罰ニ付テハ水難救護法ヲ準用ス

第四十四條　左ノ事項ニ關シ必要ナル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

一　航空機ニ備附クヘキ日誌其ノ他ノ帳簿書類及附屬品其ノ他ノ物件ニ關スル事項

二　保安上又ハ軍事上ノ必要ノ爲航空機ニ搭載スルコトヲ制限又ハ禁止スル火藥類、寫眞機其ノ他ノ物件ニ關スル事項

三　航空機ニ關スル燈火及信號ニ關スル事項

四　航空ニ關スル保安上必要ナル制限及航空機ト航空機又ハ船舶トノ衝突豫防ニ關スル事項

五　航空標識及其ノ設置ニ關スル事項

六　飛行場ノ設備ニ關スル事項

第四十五條　當該官吏ハ其ノ職權ノ執行ニ必要ナリト認ムルトキハ航空機ノ離陸差止又ハ著陸ヲ命スルコトヲ得

第四十六條　當該官吏ハ其ノ職權ノ執行ニ必要ナリト認ムルトキハ航空機、飛行場又ハ格納庫ニ臨檢シ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ之ニ備付ヲ要スル帳簿書類及物件ニ關シ檢查ヲ爲スコトヲ得

第四十七條　朝鮮及臺灣ニ於テハ第三十七條第二項、第三十八條及第四十三條ノ規定ニ關シ命令ヲ以テ特別ノ規定ヲ設クルコトヲ得

〔海軍〕

第七章　罰則

第四十八條　航空標識ヲ損壞シタル者又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ之ヲ無效タラシメタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十九條　詐僞ノ信號ヲ爲シ又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ航空ノ危險ヲ生セシメタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

第五十條　現ニ航空ノ用ニ供スル航空機ヲ墜落、顚覆若ハ覆沒セシメ又ハ破壞シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス

前條ノ罪ヲ犯シ因テ現ニ航空ノ用ニ供スル航空機ノ墜落、顚覆、覆沒又ハ破壞ヲ致シタル者亦前項ノ例ニ同シ

第五十一條　前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス

第五十二條　過失ニ因リ航空ノ危險ヲ生セシメ又ハ現ニ航空ノ

用ニ供スル航空機ノ墜落、顚覆、燬沒又ハ破壞ヲ致シタル者ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス

其ノ業務ニ從事スル者前項ノ罪ヲ犯シタルトキハ三年以下ノ禁錮又ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十三條　詐術ヲ用キ第五條若ハ第十一條ノ檢査ヲ受ケ又ハ不實ノ事項ヲ登錄セシメタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十四條　第四十九條、第五十條第一項及前條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第五十五條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ三年以下ノ懲役又ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス

一　第五條又ハ第十一條ノ檢査ニ合格セサル航空機ヲ航空ノ用ニ供シタル者又ハ第三十二條ノ規定ニ違反シタル者

二　第十四條第一項ノ規定ニ依リ行政官廳ノ爲シタル命令ニ違反シタル者

三　第九條ノ規定ニ違反シテ國籍記號若ハ登錄記號ヲ表示セサル航空機ヲ航空ノ用ニ供シタル者又ハ虛僞ノ國籍記號若ハ登錄記號ヲ表示シタル航空機ヲ航空ノ用ニ供シタル者

第五十六條　第十五條第一項ノ規定ニ違反シタル者又ハ第二十條第一項ノ規定ニ依リ爲シタル行政官廳ノ命令ニ違反シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十七條　第三十條第一項ノ規定ニ違反シタル者ハ七年以下ノ懲役ニ處ス

第三十條第二項ノ規定ニ依ル制限若ハ禁止ニ違反シタル者、第三十一條ノ規定ニ依ル禁止ニ違反シタル者又ハ第三十三條ノ規定ニ違反シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十八條　第二十九條ノ規定ニ違反シタル者又ハ第四十五條ノ規定ニ依ル當該官吏ノ命令ニ違反シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十九條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ一年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

一　第二十四條第一項ノ規定ニ依ル行政官廳ノ命令ニ違反シタル者

二　故ナク當該官吏ノ臨檢若ハ檢査ヲ拒ミ、妨ケ若ハ忌避シ又ハ尋問ニ對シ答辯ヲ爲サス若ハ虛僞ノ陳述ヲ爲シタル者

第六十條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

一　第九條ノ規定ニ違反シテ航空機所有者ノ氏名名稱若ハ住所ヲ表示セサル航空機ヲ航空ノ用ニ供シタル者又ハ虛僞ノ氏名名稱若ハ住所ヲ表示シタル航空機ヲ航空ノ用ニ供シタル者

二　第十條ノ規定ニ違反シテ堪航證明書又ハ登錄證明書ヲ備附ケサル航空機ヲ航空ノ用ニ供シタル者

三　第十七條ノ規定ニ違反シタル者

第六十一條　第二十一條、第二十二條、第二十七條第一項、第二十八條、第三十四條乃至第三十六條又ハ第四十條第二項ノ規定ニ違反シタル者ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス

第六十二條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

一　第二十三條ノ規定ニ違反シタル者

二　第二十七條第二項ノ規定ニ依ル認可ヲ受ケスシテ使用料ノ請求ヲ爲シタル者

第六十三條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ二百圓以下ノ過料ニ處ス

一　第五條第一項又ハ第二項ノ規定ニ違反シタル者

二　第七條第三項又ハ第八條第三項ノ規定ニ依ル登錄ノ申請ヲ怠リタル者

三　第八條第一項又ハ第二項ノ規定ニ依ル堪航證明書又ハ登錄證明書ノ返付ヲ怠リタル者

四　第二十條第三項ノ規定ニ依ル航空免狀ノ返付ヲ怠リタル者

五　第四十條第一項ノ規定ニ依ル屆出ヲ怠リタル者

前項ニ規定スル過料ハ法人ニ在リテハ理事、取締役其ノ他ノ法人ノ業務ヲ執行スル役員ニ之ヲ適用ス

第六十四條　非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ前條ノ過料ニ付之ヲ準用ス

附　則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

（昭和二年勅令第百四號ヲ以テ同年六月一日ヨリ施行）

●海軍航空機標識及其ノ表示方

大正十一年一月二十一日
海軍省告示第一號

改正　大正一三年第六號

海軍航空機標識及其ノ表示方左ノ通定ム

一　海軍航空機ノ標識ハ日章トス

二　各種航空機ニ標識表示ノ要領左ノ如シ

イ　飛行機　上翼上面、下翼下面（下翼著シク小ナルモノニ在リテハ上翼下面）ノ兩外端及胴體（胴體ナキモノニ在リテハ座框）ノ兩側面ニ附ス第一圖ニ示スカ如シ

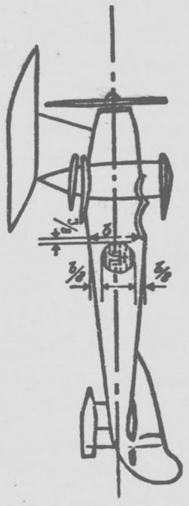
ロ　航空船　上部縱緖ノ兩側面、左右橫緖ノ上下面ニ附ス第二圖ニ示スカ如シ

ハ　繫留氣球　球體中央部兩側面ニ附ス第三圖ニ示スカ如シ

ニ　自由氣球　球體中央部兩側面ニ附ス第四圖ニ示スカ如シ

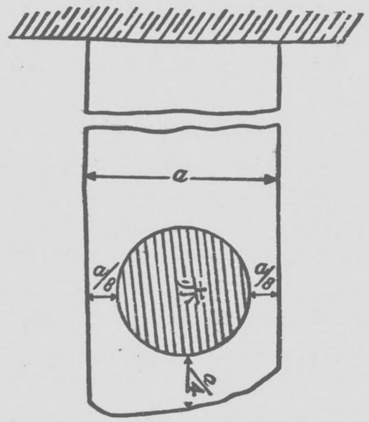
第一圖　飛行機ニ標識表示ノ要領

其ノ一　下翼下面

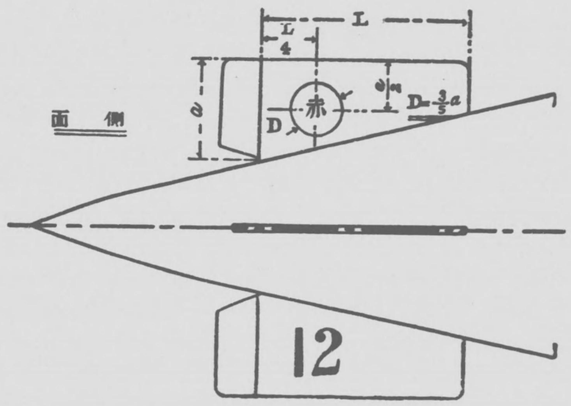


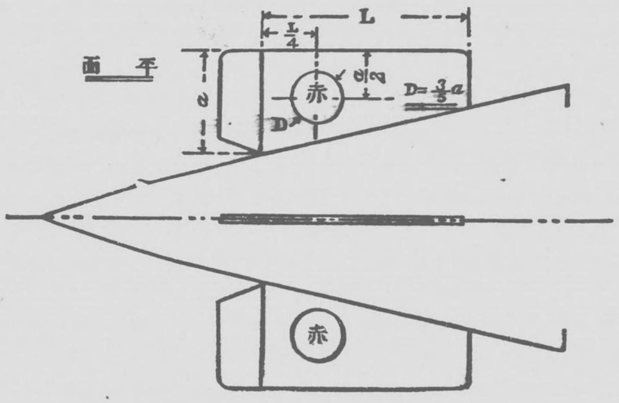
其ノ二　胴體側面

胴體



第二圖　航空船ニ標識表示ノ要領





●航空機ノ種別

大正十一年一月二十一日
達第十號

航空機ノ種別左ノ通定ム

一　飛行機
　イ　水上飛行機
　　機力ニ依リ昇騰航空シ得ルモノ
　ロ　艦上飛行機
　　浮舟ヲ有シ水上ニ於テ發著シ得ルモノ
　　車輪及應急著水裝置ヲ有シ艦上若ハ陸上ニ於テ發著シ又水上ニモ發著シ得ルモノ
　ハ　飛行艇
　　艇形ノ浮泛部ヲ有シ水上ニ於テ發著シ得ルモノ
　ニ　陸上飛行機
　　車輪ヲ有シ陸上ニ於テ發著シ得ルモノ
二　航空船
　イ　硬式
　　瓦斯浮力ニ依リ昇騰シ機械力ニ依リ航空シ得ルモノ
　ロ　半硬式
　　氣囊ノ下底部ノミニ骨組ヲ有スルモノ
　ハ　軟式
　　氣囊ニ骨組ヲ使用セサルモノ
三　氣球
　イ　繫留氣球
　　索ヲ以テ艦船又ハ陸上ニ繫留スルモノ
　ロ　自由氣球
　　風力ニ依リ航空シ得ルモノ

附　則

大正二年達第百二十四號ヲ廢止ス

〔海軍〕

●航空機番號附與法及表示方

大正十一年一月二十一日
達第十一號

改正　大正一三年第一二八號、一五年第六九號、昭和二年第四〇號、第六七號、第一〇二號、三年第二六號、五年第六三號、六年第七九號、七年第四〇號、八年第三〇號、第一三一號、第一五六號、九年第二〇號

航空機番號附與法及其ノ表示方左ノ通定ム

一　航空機ニハ左ノ要領ニ據リ製造番號及呼稱番號ヲ附與ス

イ　飛行機

(一)　製造番號

飛行機々體、發動機、推進器ヲ製造シタル時ハ其ノ製造所（海軍工作廠又ハ部外工作所ヲ謂フ）ニ於テ型式毎ニ製造所名ノ略字ヲ冠シ製造順序ニ一連ノ番號ヲ附與スルモノトス

飛行機々體及發動機ノ部分品竝其ノ附屬品ニハ製造所ニ於テ所要ニ依リ適宜之ヲ附與スルモノトス

外國ヨリ購入ノモノニ在リテハ其ノ固有ノ番號ヲ襲用ス

(二)　呼稱番號

艦船部隊ニ供用ノ飛行機ハ左ノ區分ニ依ル

艦船部隊及官衙	番號ニ冠スル區別字	番號				
		偵察機	戰鬪機	攻撃機	練習機	
航空母艦鳳翔	ロ	二〇〇未滿	二〇〇以上三〇〇未滿	三〇〇以上四〇〇未滿	四〇〇以上	
同　赤城	ハ					
同　加賀	ニ					
同　龍驤	ホ					
横須賀航空隊	ヨ					
霞ケ浦航空隊	カ					
館山航空隊	タ					

〔海軍〕

呉航空隊	タ
佐伯航空隊	サヘ
佐世保航空隊	サ
大村航空隊	オ
大湊航空隊	オミ
航空廠	コ
鎭守府	鎭守府略名漢字（横鎭、呉鎭等）
航空母艦ニアラサル艦船	艦籍名片假名清水艦ヘ艦名（等級別片假名、番號アラビヤ數字）

機種ニ關係ナク一ヨリ始メ一連番號ヲ附ス

偵察機、戰鬪機、攻撃機ヲ通シ上記機種順序ニ一ヨリ始メ一連番號ヲ附ス

番號ハ本表ノ範圍内ニ於テ廳長適宜之ヲ定メ其ノ都度製造番號ト對照セルモノヲ報告スルモノトス航空母艦ニアラサル艦船ニ在リテ右表ニ據ルコト能ハサルモノハ海軍航空本部長ノ定ムル所ニ據ル

ロ　飛行船

(一)　製造番號

飛行機ニ準ス

(二)　呼稱番號

飛行船ハ竣工ノ順序ニ一連ノ番號ヲ附與シ第何飛行船ト呼稱シ其ノ都度之ヲ公示ス

ハ　繫留氣球、自由氣球

(一)　製造番號

飛行機ニ準ス

(二)　呼稱番號

艦船部隊ニ供用ノ繫留氣球、自由氣球ニ在リテハ製造番號ヨリ製造所名ノ略字ヲ省キタルモノトス

〔海軍〕

二　航空機ニ番號ヲ表示スルニハ製造番號ハ別紙樣式ニ據リ航空機々體、發動機及推進器ニ附シ呼稱番號ハ航空機々體ニ附スルモノトス

航空機々體ニ番號ヲ附記スルニハ黑字ヲ以テス航空機々體ノ地色黑字ヲ表ハスニ明瞭ナラサルモノニ在リテハ其ノ部分ヲ白塗（輪廓ヲ角形トス）スルモノトス

各種航空機ノ番號表示方ハ左ノ要領ニ據ルヘシ

イ　飛行機

(一)　製造番號

機體ニ在リテハ胴體左側後部ニ附ス

發動機ニ在リテハ曲肱室ノ一側面ニ附ス

推進器ニ在リテハ轂部ノ一側面ニ附ス

(二)　呼稱番號

上翼上面下翼下面竝ニ胴體及縱舵（縱緒ヲ含ム）ノ兩側面（縱舵二個以上ノモノニ在リテハ兩外側面）ニ附ス第一圖ニ示スカ如シ

ロ　飛行船

(一)　製造番號

船體ニ在リテハ船尾部見易キ適宜ノ位置ニ附ス

發動機竝推進器ニ在リテハ飛行機ニ準ス

(二)　呼稱番號

下部縱緒ノ兩面ニ附ス第二圖ニ示スカ如シ

ハ　繫留氣球

(一)　製造番號

球體尾部見易キ適宜ノ位置ニ附ス

(二)　呼稱番號

標識ノ下部ニ附ス第三圖ニ示スカ如シ

ニ　自由氣球

(一)　製造番號

球體見易キ適宜ノ位置ニ附ス

(二)　呼稱番號

標識ノ下部ニ附ス第四圖ニ示スカ如シ

（別紙）

航空機ニ附スル製造番號樣式

型式	
製造番號	
製造年月日	
所屬	

（備考）

一　型式欄ニハ所定ノ名稱（發動機ニ在リテハ公稱馬力ヲ併記ス）ヲ記入スルモノトス例ヘハ「横廠式水上偵察機」又ハ「ヒ式300」ノ如シ

二　製造番號欄ニハ製造所名ノ略字ヲ冠シ「アラビヤ」數字ヲ以テ番號ヲ記入スルモノトス例ヘハ「佐兵第75號」又ハ「三菱第50號」ノ如シ

三　製造年月日欄ニハ單ニ「アラビヤ」數字ヲ連記スルモノトス例ヘハ「10—10—1」ノ如シ

四　所屬欄ハ航空機機體ニ附スルモノノミニ設ケ現在ノ所屬隊（艦名ヲ記スルモノトス例ヘバ「霞ヶ浦海軍航空隊」又ハ「軍艦　赤城」ノ如シ

五　發動機ニハ本樣式ニ據ル金屬製標札ヲ附著スルモノトス

六　本樣式ノ輪廓ノ寸法標準左ノ如シ

航空機別	長邊（糎）	短邊（糎）
飛行機々體	三〇	二五
飛行船々體 氣球	三〇	二五
發動機	六	四

七　推進器ニハ本樣式ノ輪廓及見出ノ文字ヲ省略シ型式（機體、發動機ノ型式）ノ略字、製造番號及製造年月日ノ刻印ヲ施スモノトス例ヘハ左ノ如シ

横水偵　（註）「横水偵」ハ横廠式水上偵察機ノ略

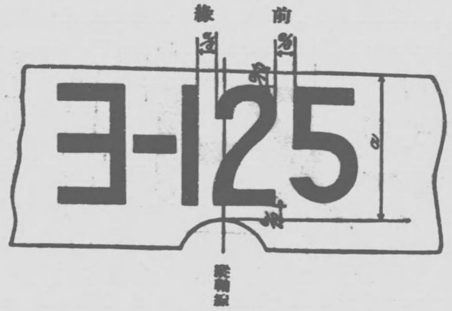
ヒ式 200

佐兵 125

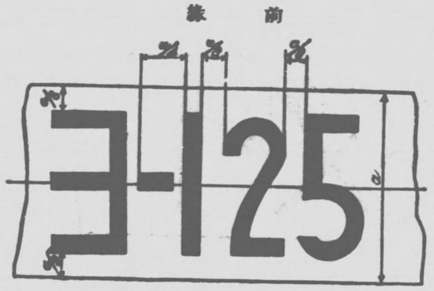
10—10—1

第一圖　飛行機ニ呼稱番號表示ノ要領

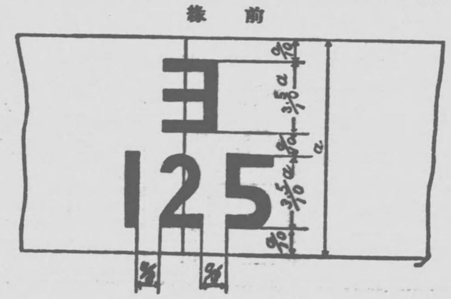
其ノ一　上翼上面



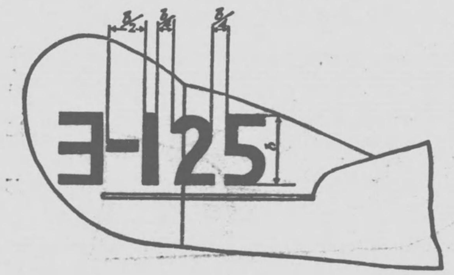
其ノ二　下翼下面
圖ハ一翼ヲ示ス



其ノ三　下翼下面
下翼著シク短キカ又ハ裝著物等ノ爲横記スルニ充分ノ面積ナキモノノ例

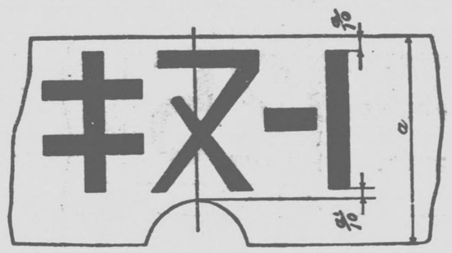


其ノ四　尾部

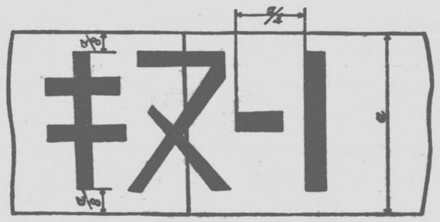


第一圖　飛行機ニ呼稱番號表示ノ要領

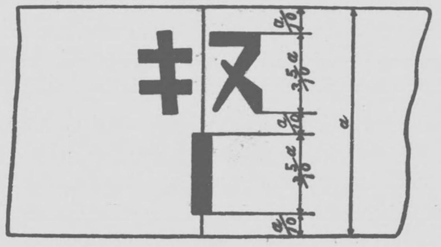
其ノ一　上翼上面



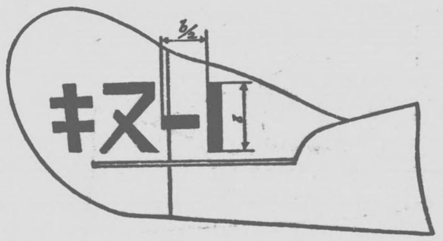
其ノ二　下翼下面
圖ハ一翼ヲ示ス



其ノ三　下翼下面
下翼著シク短キカ又ハ裝著物等ノ爲橫記スルニ充分ノ面積ナキモノノ例

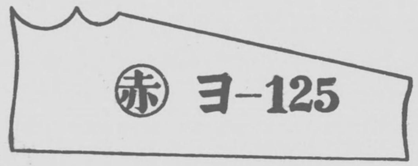


其ノ四　尾部

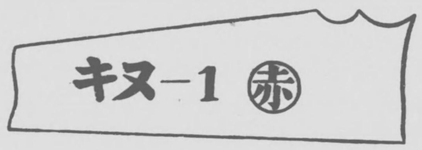


第一圖　飛行機ニ呼稱番號表示ノ要領

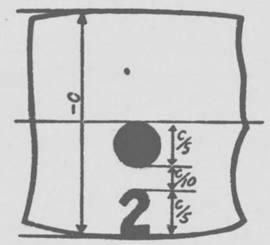
其ノ一　胴體側面



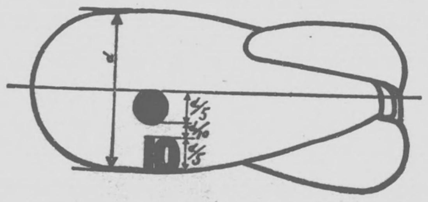
其ノ二　胴體側面



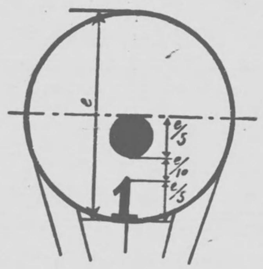
第二圖　飛行船ニ呼稱番號表示ノ要領



第三圖　繫留氣球ニ呼稱番號表示ノ要領



第四圖　自由氣球呼稱番號表示ノ要領



（備考）　右ノ各圖例ハ航空機ニ呼稱番號表示ノ一般標準ヲ示シタルモノニシテ其ノ位置寸法ハ構造形狀ニ依リ適宜變更スルコトヲ得ルモノトス

●飛行機保安塗粧法

昭和八年六月五日
達第六十二號

改正　昭和一〇年第六〇號

飛行機保安塗粧法左ノ通定ム

飛行機保安塗粧法

一、車輪式飛行機ニ保安塗粧ヲ爲ス但シ迷彩ヲ施スモノヲ除ク

二、保安塗粧要領左ノ如シ

垂直安定板、方向舵、尾翼及昇降舵ノ兩面ヲ赤色ニ塗粧ス

第十一款　機關　雜

●宮原水管式汽罐採用ノ件

明治三十六年三月十九日
達第三十九號

自今海軍機關總監工學博士宮原二郎ノ考案ニ係ル水管式汽罐ヲ採用シ宮原水管式汽罐ト稱ス

●海軍ニ於テ使用スル火床ノ棧寸法ヲ定ム

明治四十二年六月五日
達第七十九號

自今吾海軍ニ於テ使用スル火床ノ棧寸法ヲ別表ノ通リ定ム

（別表省略）

●艦艇罐水使用區分

大正六年十二月四日
官房第三七〇九號

艦艇罐水使用區分左ノ通定ム

艦艇罐水使用區分表

艦艇名			役務	備考
			在	
			行動中	碇泊中
大正五年以後竣工ノ艦艇			行動中	碇泊中
軍艦	扶桑、摂津、河内、金剛、比叡、榛名、霧島、平戸、矢矧、筑摩		蒸溜水	良質ノ眞水又ハ蒸溜水
駆逐艦	浦風、海風、山風		蒸溜水	良質ノ眞水又ハ蒸溜水
右以外ノ艦艇	蒸溜水		蒸溜水	良質ノ眞水又ハ蒸溜水
	良質ノ眞水又ハ蒸溜水		蒸溜水	良質ノ眞水又ハ蒸溜水

大正四年官房第五八七號ハ之ヲ廢止ス

第十七類　航空關係

●艦煙標制定使用ノ件

大正五年十二月十六日
達第百八十三號

艦煙標ヲ制定シ左記ニ據リ煤煙濃淡調査用トシテ大正六年一月一日ヨリ使用セシム

艦煙標(甲)ハ軍艦、同(乙)ハ驅逐艦及水雷艇用トス

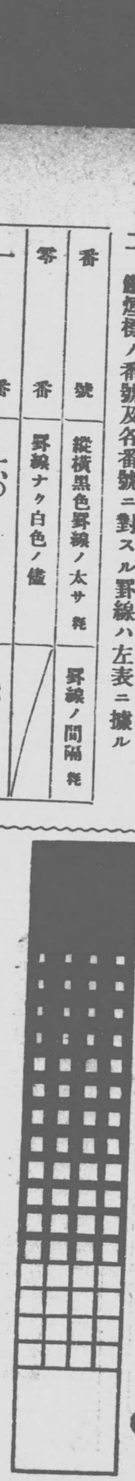
艦煙標(甲)

一　艦煙標ノ大サ及數

六百粍平方ノモノ六枚

二　艦煙標ノ番號及各番號ニ對スル罫線ハ左表ニ據ル

番號	縦横黒色罫線ノ太サ	罫線ノ間隔
零番	罫線ナク白色ノ儘	
一番	一、〇	九、〇
二番	二、三	七、七
三番	三、七	六、三
四番	五、五	四、五
五番	全面黒色	



三　艦煙標ヲ一連ニ聯結スルニハ零番ヲ最下方トシ順次ニ上方ニ至ルモノトス

艦煙標(乙)

一　艦煙標ノ大サ及數

四百粍平方ノモノ六枚

二　艦煙標ノ番號、各番號ニ對スル罫線及之カ連結法ハ總テ甲ニ同シ

〔海軍〕

第十二款　諸試驗

●電氣計器檢定取扱方

昭和四年十一月二十日
達第百三十二號

改正　昭和八年第五五號

電氣計器檢定ニ關スル取扱方左ノ通改正ス

一、各工廠、技術研究所、各工作部ハ電氣單位測定用トシテ常ニ正確ナル基本器ヲ備ヘ置クベシ

二、艦船部隊其ノ他各部ハ工廠、技術研究所又ハ工作部ニ請求シテ左記ニ依リ電氣計器ノ目盛修正ヲ行フベシ

イ、携帶用電壓計及電流計　　毎年一回

ロ、基準トナルベキ主配電盤用電壓計　　毎年一回

ハ、基準トナルベキ主配電盤用電流計　　二年毎ニ一回

三、艦船部隊其ノ他各部ハ必要ノ都度電氣計器ヲ前號基準電氣計器ト照合シ指度不正ノモノアルトキハ之ガ修理ヲ工廠、技術研究所又ハ工作部ニ請求スベシ

●陸上罐定期水壓試驗竝鑽通試驗規則

〔海軍〕

大正十五年十月十一日
達第九十九號

改正　大正一五年第一二五號

陸上罐定期水壓試驗竝鑽通試驗規則左ノ通改正ス

陸上罐定期水壓試驗竝鑽通試驗規則

第一條　陸上罐トハ海軍各廳附屬陸上備付罐ヲ云フ

第二條　定期水壓試驗ハ新造後圓罐ハ四箇年、水管罐ハ三箇年ヲ經過シタルトキ之ヲ施行シ爾後二箇年乃至二箇年六箇月ノ間隔ニ於テ之ヲ施行スヘシ

修理又ハ改造ニ際シ水壓試驗ヲ施行シタルトキハ前項ノ間隔ハ其ノ時ヨリ起算スルモノトス

第三條　鑽通試驗ハ罐ニ衰弱ノ兆候ヲ呈シ試驗ヲ必要ト認メタルトキ始メテ之ヲ施行シ爾後同類罐ニ對シ約二箇年ノ間隔ニ於テ試驗ヲ行フヘシ

修理ノ際特ニ鑽ノ鑽採檢査ヲ行ヒタルトキハ前項ノ間隔ハ其ノ時ヨリ起算スルモノトス

第四條　前二條ノ時期ニ達シタルトキ又ハ臨時試驗ノ必要ヲ認メタルトキハ當該廳長ハ直ニ部下機關科士官又ハ造機科士官

（技師）ヲシテ之ヲ施行セシムヘシ

第五條　定期水壓試驗ノ壓力及伸縮計測法ハ艦船造修試驗檢查規則ノ規定ニ準據ス

第六條　鑽通試驗ハ同類繰ノ最モ衰弱セルヲ認メタルモノニ就キ其ノ衰弱ノ狀態ヲ判定スルニ必要ナル箇所ヲ鑽採ノ上檢查スルモノトス

第七條　水管繰ニ在リテハ鑽通試驗ノ外最モ衰弱セルヲ認メタル繰管ニ就キ切開檢查ヲ施行スヘシ

第八條　定期水壓試驗ノ時期カ鑽通試驗ノ必要時期ト互ニ遠隔セサルニ於テハ兩試驗ヲ相關聯セシムルモノトシ鑽通試驗ノ結果繰ニ著シキ衰弱ヲ現示シタルトキハ水壓試驗ヲ行フニ當リ過壓ノ爲繰ニ損害ヲ與ヘサル樣壓力ノ適用ニ注意スルヲ要ス

第九條　定期水壓試驗竝鑽通試驗ノ成績ハ別表ニ依リ調製シ所屬長官ニ提出スヘシ

第十條　機關科士官又ハ造機科士官（技師）ヲ置カレサル各廳ニ在リテハ當該廳長ハ前諸條ノ試驗ヲ適宜他ノ廳ニ委託スルコトヲ得

第十一條　前條ノ規定ニ依リ委託ヲ受ケタル廳長ハ部下機關科士官又ハ造機科士官（技師）ヲシテ本試驗ヲ施行セシムヘシ又必要ト認ムルトキハ右試驗ニ當リ部下ノ他ノ職員ヲシテ助力セシムルコトヲ得

第十二條　本則ニ依リ水壓試驗ヲ施行シタルトキハ其ノ都度壓力ヲ證明スル爲艦船造修試驗檢查規則ニ準據シ眞鍮製ノ票章ニ登記シタル上繰體適宜ノ場所ニ附著スヘシ

所及其ノ數ヲ記入スヘシ

水管繰ニ在リテハ各式ニ依リ蒸汽寄、蒸汽室、水室、給水寄、管寄、降路管、蒸發管及收熱管等ニ區畫シテ橫線ヲ引キ各管取付部等ノ漏洩箇所ニハ縱、橫ニ燃室ハ縱、橫、奥行トニ小別シテ橫線ヲ引キ原形ニ對スル加壓及除壓後ノ伸（十符）縮（一符）ノ差ヲ數字ニテ記入スヘシ

局部名稱ノ欄ニハ圓繰ニ在リテハ爐筒（爐筒ハ第一、第二、ト左ヨリ數フ）燃室（燃室ハ左、右、中央）胴板、管板等ニ區劃シ更ニ爐筒ハ直徑ヲ

表　績成驗試壓水

行施日月年	見所官行施驗試	所個洩漏及縮伸	

若クハ試驗施行官
機關長（機關官）

長

廠、團、部、隊　備付罐定期

罐ノ要目	試驗ニ依リ計器ニ顯レタル		
	部局名稱 / 罐ノ呼稱		
製式			
製造年月日			
製造所			
計畫最大使用壓力			
前回水壓試驗最大使用壓力			
本試驗ニ於ケル最大使用壓力			
本試驗ノ結果決定使用壓力			
前回水壓試驗施行年月日			
最近大修理施行年月日			
製造後使用日數			
前回水壓試驗施行後使用日數			
新製以降水壓試驗ノ回數			

本表ニハ別ニ鑚通局所略圖ヲ附シ鑚通位置ヲ朱點ニテ示スヘシ

本表ハ一罐ニ一枚ヲ要ス

試驗成績表　年　月　日施行

試驗施行官所見	罐内沈澱附著物ノ狀況	切開水管ノ狀況

長

若ハ試驗施行官

機關長(機關官)

廳、團、部、隊備付鑵鑽通																
鑵ノ要目						鑽通成績										
製式	製造年月日	製造所	計畫最大使用壓力	試驗前最大使用壓力	本試驗ノ結果決定使用壓力	項目		胴板	鏡板	管筒	爐板	燃室	鑵管	蒸汽室	蒸汽寄	
						厚サ若クハ重量（吋、听）	製造當時									
							最近試驗最薄部									
							現在最薄部									
前回鑽通試驗施行年月日	製造後使用日數	前回鑽通試驗施行後使用日數	最近大修理施行年月日	鑽通試驗ノ回數	將來使用ニ耐フヘキ鑵定年數	項目		水室	給水寄	管寄	降路管	控管	主控條	燃室上部控條	螺込控條	
						厚サ若クハ重量（吋、听）	製造當時									
							最近試驗最薄部									
							現在最薄部									

〔海軍〕

●起重機試驗檢査及取扱規則

大正九年五月二十一日
達第九十六號

起重機試驗檢査及取扱規則別紙ノ通定ム

起重機試驗檢査及取扱規則

第一章 總則

第一條 本則ハ動力ニ依リ運轉スル各起重機及附屬具ノ試驗檢査及取扱ニ關スルコトヲ規定ス

第二條 試驗檢査ハ毎年一回定期檢査期日ヲ定メ廳長ノ指定シタル者之ヲ施行シ別紙樣式ニ依リ其ノ成績ヲ海軍技術本部長ニ報告スヘシ

臨時檢査ノ必要ヲ認メタルトキ亦前項ニ準ス

第三條 檢査ノ結果使用能力ノ低減ヲ要スル時ハ其ノ理由ヲ成績表ニ記載シ置クヘシ

第四條 起重機ニハ見易キ箇所ニ最大使用能力及最近檢査年月日ヲ記載シ置クヘシ

第二章 試驗檢査

第五條 起重機ハ試驗檢査前各機構部ノ開放檢査及分解手入ヲ行ヒ磨滅及破損ノ箇所ハ之ヲ修理スヘシ

第六條 規定最大使用荷重ノ一、一倍ノ負荷ヲ以テ十分間以上左ノ試驗ヲ施行スヘシ

一 機桁部ニ於ケル最大彎曲量及荷重ヲ去リタル後ノ永久變形量ノ計測

二 昇降、旋回及縱横行運動ニ關スル機構各部ノ動作

第七條 最大使用荷重ヲ以テ全速運轉セシメタル後左ノ檢査ヲ爲スヘシ

一 主動部及附屬具ノ開放檢査

二 軌道ノ屈曲凹凸ノ有無

三 軌道及架構ノ主要ト認ムヘキ部ノ螺子及鋲鋲檢査

第八條 起重機用鋼索、鐵鎖、鐵架及鐵鉤等ハ左ノ試驗ヲ爲スヘシ

一 起重機ノ最大使用荷重ノ爲受クル荷重ノ二倍ニ相當スル緊張力試驗ヲ行ヒ永久變形ナキモノタルヘシ

二 鋼索類ハ磨滅毀損ノ程度ニ應シ之カ引換ヲ爲スヘシ

三 鐵鎖、鐵鉤及鐵架ハ檢査後又ハ相當使用回數ヲ重ヌル毎ニ確實ナル燒鈍ヲ行ヒ且防銹等ニ對スル適當ナル方法ヲ講

〔海軍〕

スルヲ要ス

第九條　起重機附屬汽罐ノ試驗檢査ニ關シテハ陸上定期水壓試驗及定期續通試驗規則ニ依ルヘシ

第三章　取扱及保存

第十條　取扱ニ關シテハ左ノ諸項ヲ嚴守スヘシ

一　規定最大使用荷重ノ八割以内ヲ懸吊スルヲ原則トス若シ最大使用荷重ニ近キ重量物ヲ懸吊スル場合ニハ使用前必ス機體ノ起動、反轉、制動裝置等ノ諸部ハ勿論其ノ他ノ關聯裝置ニ至ル迄損傷、弛緩等ノ有無ヲ精細ニ調査スルヲ要ス

二　起動停止ハ極メテ徐々ニ之ヲ行ヒ圓滑ヲ旨トシ懸吊物ノ動搖、急激ナル弛張ヲ與フルヲ避クヘシ

三　懸吊物ノ縛著及平衡ヲ安全ニシ脱落又ハ弛緩等ノ危險ヲ防止スヘシ又懸吊中他物ト接觸又ハ衝突セシメサルコトニ注意スヘシ

四　運行、横行、捲揚及旋回等ノ諸運動ハ可成同時ニ之ヲ行フヲ避クヘシ又重量物又ハ容積大ナル物品ヲ取扱フ場合ニハ常ニ速度ヲ規定ノ二分ノ一以下ニ保ツヘシ

尙物品運搬中故障ヲ發見シタルトキハ直ニ運轉ヲ停止シテ適當ノ方法ヲ講スヘシ

五　隣接セル二柱間ニ計畫臺數以上ノ起重機ヲ使用スルハ可成之ヲ避クヘシ已ムヲ得サル場合ニハ其ノ總重量及荷重ノ和ハ計畫臺數ノ最大使用荷重及重量ノ總和ヲ超過スヘカラス

六　同時ニ多數ノ重量物ヲ懸吊スルハ可成之ヲ避クヘシ已ムヲ得ス同時ニ多數ノ重量物ヲ懸吊スル場合ニ在リテハ重量物ノ離脱スル如キコトナキ樣確實ナル方法ヲ講スルヲ要ス

第十一條　保存手入ニ關シテハ左ノ諸項ヲ遵守スヘシ

一　主動部及附屬具ハ常ニ充分ナル保存手入ヲ勵行シ常ニ完全ナル狀態ニ在ラシムヘシ

二　磨擦部其ノ他要部ノ注油裝置ヲ確實ニシ常ニ必要ナル豫備品ヲ備ヘ破損磨滅ノ際ハ直ニ之カ引換ヲ行フニ便ナラシムヘシ

三　主動部及諸裝置ノ内發銹シ易キ部分ニ完全ナル防銹法ヲ講シ置クヘシ

四　鋼索類ハ常ニ適當ナル防銹劑ヲ完全ニ塗抹シ置クヘシ

五　諸電路又ハ水壓管等ハ漏電、漏水等ノ惧ナキ樣周到ナル手入保護ヲ爲スヘシ

部　廠

（大正九年達第九十六號別表）

記事	延伸率 …揚ニ對スル試驗荷… %	距 / 位置	スパン	使用最大荷重 主	使用最大荷重 補	公稱番號	製造年月日	製造所	型式
		距 位置							
		距 位置							
		距 位置							
		距 位置							
		距 位置							

備考、1.　各起重機ニ於ケル起重機其成績ヲ調製
臺ヲ各機所要ノ位置ニ置
垂トス。但シ軌道梁ノ歪關シ將來ノ參
2.　鋼索類ノ延伸率ハ長サ一

起重機檢查成績表

年　月　日　　海軍　廠　部

型式	製造所	製造年月日	公稱番號	使用最大荷重 主	使用最大荷重 補	スパン	彎曲量		試驗荷重（瓲）	速度（毎分米） 公稱	速度（毎分米） 實測	電動機 種類	電動機 電壓 公稱	電動機 電壓 實測	電動機 電流 公稱	電動機 電流 實測	電動機 回轉數 公稱	電動機 回轉數 實測	電動機 馬力 公稱	電動機 馬力 實測	鋼索類ノ法拉條數	延伸率ヲ試驗荷重ニ對スル%	記事
							距離 / 位置					主捲揚											
							瓲 瓲 瓲 瓲 瓲					補捲揚											
												縱行											
												橫行											
												旋回											
							距離 / 位置					主捲揚											
												補捲揚											
												縱行											
												橫行											
												旋回											
							距離 / 位置					主捲揚											
												補捲揚											
												縱行											
												橫行											
												旋回											
							距離 / 位置					主捲揚											
												補捲揚											
												縱行											
												橫行											
												旋回											
							距離 / 位置					主捲揚											
												補捲揚											
												縱行											
												橫行											
												旋回											

備考。1. 各起重機ニ於ケル起重機「ガーター」ノ歪ニ對スル寸法計測ハ無荷重ノ吊揚塞ヲ各機所要ノ位置ニ置キタルトキヲ以テ基點トナシ(＋)ヲ上昇(－)ヲ下垂トス。但シ軌道梁ノ歪ハ起重機最大力量ノミニ對シ計測スルモノトス。

2. 鋼索類ノ延伸率ハ長サ一米ニ對シテ計測スルモノトス。

3. 電動機以外ノ動力ヲ使用スル起重機ニ對シテハ適宜本表ニ準シ其成績ヲ調製スヘシ。

4. 記事欄ニハ修理ノ程度鉄鎖鐵釣等撓鈍ノ時期等起重機ノ使用ニ關シ將來ノ參考トナルヘキ事項ヲ摘記スヘシ。

●艦船部隊潜水器試験検査及保存手入規則

昭和二年十二月十四日
達第百四十三號

改正　昭和七年第九六號

艦船部隊潜水器試験検査及保存手入規則左ノ通定ム

艦船部隊潜水器試験検査及保存手入規則

第一章　總則

第一條　本則ハ艦船部隊備付潜水器及附属具ノ試験検査及保存手入ニ關スルコトヲ規定ス

第二條　所轄長ハ毎年六月及十二月ニ於テ部下ノ士官又ハ特務士官ヲシテ潜水器及附属具ノ試験検査ヲ施行セシメ別紙様式ニ依リ其ノ成績(二通)ヲ所管海軍軍需部長(舞鶴要港部軍需部長)ニ通報シ各軍需部長ハ其ノ一通ヲ取纏メ海軍省軍需局長ニ送付スベシ

第三條　試験検査ノ結果使用能力ノ低減ヲ要スルトキハ其ノ理由ヲ成績表ニ記載スベシ

第二章　試験検査

第四條　試験検査ハ左ノ要領ニ依リ之ヲ施行スベシ

第十七類　諸試験

一　空氣喞筒ハ各機構部ノ開放検査及分解手入ヲ行ヒタル後送氣試驗ヲ施行スルモノトス但シ本試驗ニ先チ喞筒壓力計ハ本條第八號ニ依リ嚴密ナル檢査ヲ行フコトヲ要ス

二　送氣試驗ハ「ゴム」空氣管ヲ一條接續シ之ヲ試驗用氣蓄器ニ導キ各部漏洩ナキヲ確メタル後回轉ヲ始メ毎平方糎七瓩(計畫最大使用壓力本標準以下ノモノハ其ノ最大壓力)迄空氣壓力ヲ上昇シツツ壓力毎平方糎一瓩毎ニ其ノ上昇ニ要シタル喞筒總回轉數ヲ記錄ス但シ本試驗中喞筒ハ停止セザルモノトス

試驗用氣蓄器ハ耐壓ガ毎平方糎一〇瓩以上ノモノトシ其ノ容積ヲ豫メ計測シ置クヲ要ス別ニ喞筒壓力計ト照合ノ爲壓力計ヲ附スベシ

三　喞筒能力ハ損失空氣量ノ多寡ニ依リ判定ス

損失空氣量(L)ハ百分比ヲ以テ表ハシ算定式左ノ如シ

$$L=\left\{1-\frac{P\times C}{R\times V}\right\}\times 100$$

但シ

P ハ所要空氣壓力(瓩/平方糎)(大氣壓ヲ零トス)

Cハ試驗用氣蓄器及「ゴム」空氣管容積(立方米)
Rハ所要壓力迄上昇セシムルニ要セシ喞筒總回轉數
Vハ喞筒一回轉ノ行程容積(立方米)

四　喞筒能力ハ前號ニ依リ算出セル損失空氣量二割五分以下ノモノナルコトヲ要ス若シ不良ノ場合ハ更ニ各部ノ檢査手入ヲ行ヒタル後本試驗ヲ繰返スモノトス

五　「ゴム」空氣管ハ接手及取付部ノ良否「ゴム」質ノ狀態等ヲ綿密ニ檢査シタル後壓力毎平方糎七瓩ヲ以テ氣密試驗ヲ施行スルモノトス

六　「ゴム」服ハ內外面ノ檢査ヲ行ヒタル後之ニ兜ヲ裝著シ袖口ヲ密閉シテ徐々ニ加壓シ毎平方糎〇・二瓩ニ達セシメ各部異狀ナキコトヲ確メタル後五分間ヲ持續セシムベシ

七　兜ハ戻止弁、排氣弁、面硝子及電路等ノ狀態ヲ綿密ニ檢査手入シタル後「ゴム」服ニ裝著シタル上氣密竝ニ通話試驗ヲ施行スルモノトス

八　喞筒壓力計ノ試驗ハ壓力計ヲ取外シ壓力試驗器ニテ之ヲ行ヒ其ノ成績ヲ空氣喞筒ニ標記スルモノトス

第三章　保存手入

第五條　保存手入ニ關シテハ特ニ左ノ諸號ニ留意スベシ

一　潛水器附屬具ハ常ニ充分ナル保存手入ヲ勵行スルヲ要ス
空氣喞筒ハ毎週一回必ズ回轉ヲナスモノトス

二　試驗檢査ノ結果空氣喞筒ノ能力七割五分以下ニ低下セル場合ハ適宜修理又ハ引換ノ請求ヲナスベシ

三　潛水器格納所ノ通風ニ注意シ室內溫度上昇ノ防止ニ努ムベシ空氣管其ノ他ノ「ゴム」部ハ高溫ニ對シ變質毀損ヲ生ジ易キヲ以テ保存上特ニ考慮ヲ要ス

四　「ゴム」空氣管ノ格納ニ當リ其ノ捲キ方ハ環徑ヲ成ルベク大ナラシムルコトニ注意スベシ長期ニ亙リ使用セザル場合ハ時々其ノ捲換ヲ行フベシ

五　「ゴム」空氣管竝ニ其ノ他ノ「ゴム」部ニ油類附著シタルトキハ必ズ石鹼水等ヲ以テ良ク之ヲ洗滌シ清淨ナラシムルヲ要ス

六　「ゴム」服ノ使用後ハ必ズ清水ニテ內外面ヲ洗滌ノ上日陰ニ吊シ充分乾燥セシメタル後成ルベク折疊スルコトナク格納スルヲ要ス使用セザルトキト雖毎月一回取出シ各部ノ檢査ヲ要ス

（樣式）

潛水器試驗檢査成績表　　年　月　日施行

兜			管氣空ゴム			ゴム服			筒喞氣					
檢査ノ成績	製造所	試驗壓力	檢査ノ成績	製造所	試驗壓力	檢査ノ成績	製造所	試驗壓力	檢査ノ成績	回轉ニ要スル人員	損失空氣量(百分比)	喞筒總回轉數	壓力上昇ニ要スル	空氣壓力 瓩/平方糎
	受込年月日	製造年月日		受込年月日	製造年月日		受込年月日	製造年月日						1
														2
														3
														4
														5
														6
														7

（名隊部船艦）

空				
計畫最大使用壓力			受込年月日	
喞筒番號			製造年月日	
制式			製造所	
所見				事記
臨檢官				
所轄長			臨檢官	

●潛水用氣蓄器試驗檢査及保存手入規則

昭和五年二月二十七日
達第十七號

潛水用氣蓄器試驗檢査及保存手入規則左ノ通定ム

潛水用氣蓄器試驗檢査及保存手入規則

第一章　總則

第一條　本則ハ潛水用氣蓄器及同附屬具ノ試驗檢査及保存手入ニ關スルコトヲ規定ス

第二條　艦船部隊備付潛水用氣蓄器ノ試驗檢査ハ所轄長ノ要求ニ依リ所管海軍軍需部長（舞鶴要港部軍需部長ヲ含ム以下之ニ同ジ）海軍工作廳ニ依託シテ之ヲ施行スルヲ例トス

第三條　所轄長ハ試驗檢査期日約一箇月前迄ニ試驗檢査豫定期日、希望工作廳其ノ他必要事項ヲ記載シタル請求書二通ヲ所管海軍軍需部長ニ提出スベシ

第四條　試驗檢査ヲ行ヒタル海軍工作廳長ハ別紙樣式ニ依リ成績表三通ヲ調製シ一通ヲ所轄長ニ二通ヲ依託海軍軍需部長ニ移牒スルモノトス

海軍軍需部長ハ其ノ一通ヲ保管シ他ノ一通ハ所見ヲ附シ之ヲ海軍省軍需局長ニ送付スベシ

第五條　第二條及第四條ノ規定ハ海軍軍需部（舞鶴要港部軍需部ヲ含ム）在庫潛水用氣蓄器ノ試驗檢査ニ之ヲ準用ス

第六條　試驗檢査ノ結果使用壓力ニ變更ヲ要スルトキハ其ノ理由ヲ成績表ニ記載スベシ

〔海軍〕

第二章　試驗檢査

第七條　試驗檢査ノ實施ハ次表ノ要領ニ據ルベシ

項目＼品名	潛水用氣蓄器	減壓裝置	壓力計
試驗檢査期日	魚形水雷氣室ヲ轉用セルモノニ在リテハ轉用ノ際使用壓力ヲ定メ之ヲ第一回トシ爾後約二箇年毎	一、引拔鋼管ヲ以テ製作セル氣室ニ在リテハ潛水用氣蓄器ニ準ズ 二、鎔接氣室ニ在リテハ新造後約一箇年毎	氣蓄器試驗時ヲ含ミ約六箇月毎
試驗檢査要領	一、使用壓力ノ一、五倍ノ水壓力ヲ以テ約五分間繼續 二、水壓試驗後氣蓄器內部ハ檢査掃除ノ上當分ノ間亞麻仁油ヲ塗布シ完全ナル乾燥狀態ニ在ラシム 三、試驗壓力、使用壓力及試驗年月日ヲ刻記セル眞鍮板ヲ適宜ノ場所ニ取付クベシ	同上	壓力試驗器ト比較試驗ヲ爲ス

第三章　保存手入

第八條　保存手入ニ關シテハ特ニ左ノ諸號ニ留意スベシ

一　本潛水用氣蓄器空氣系統諸弁ハ常ニ充分ナル保存手入ヲ勵行シ毎月一回及使用前作動ヲ檢スベシ減壓弁及安全弁ニ就テハ特ニ注意ヲ要ス

二　試驗檢査ノ結果潛水用氣蓄器ノ使用壓力 平方糎/四瓩 以下ニ低下シ又ハ減壓裝置ノ使用能力規格ヨリ低下セル場合ニハ修理又ハ引換手續ヲ爲スベシ

三　潛水用氣蓄器ノ格納位置ハ溫度ノ上昇少キ場所ヲ選ブベシ

四　減壓裝置ノ格納位置ハ減壓弁ノ「ゴム」ニ變質ヲ起サザル場所ナルヲ要ス

五　潛水用氣蓄器內ノ壓搾空氣ハ一箇月以上經過セルモノハ之ヲ使用スベカラズ

〔海軍〕

（別紙）

（試驗機關名）		海水用氣密試驗成績表	年　月　日施行
試驗工作廠			
檢查官所見			
氣密試驗番號	海水用氣密試驗從事者		
燒鈑年月日	氣密試驗從事者		
氣密試驗鋲			
使用壓力			
試驗壓力			
試驗作業	計算書		
	設計書		
	力學上安全		
檢查ノ成績			
官所意見			

●「シリコル」法移動水素瓦斯發生機取扱規則

昭和三年十一月二十三日
達第百七十一號

「シリコル」法移動水素瓦斯發生機取扱規則左ノ通定ム

「シリコル」法移動水素瓦斯發生機取扱規則

第一條　水素瓦斯發生準備ニ當リテハ左ノ事項ニ注意スベシ

一　硅素鐵ハ苛性曹達溶液トノ接觸面ヲ大ナラシメ化學反應ヲ確實迅速ナラシムル爲豫メ微細ナル粉末ト爲スヲ要ス其ノ程度ハ略四〇「メツシュ」篩ヲ通過スルヲ適當トス

二　苛性曹達ハ「ボーメ」五〇度ノ稀釋液ヲ使用スベシ

三　一回仕込材料ノ割合ヲ左ノ標準トス

硅素鐵五〇瓩、液體苛性曹達「ボーメ」五〇度ノモノ二〇〇乃至二一〇瓩「グリース」二乃至三瓩、水二〇〇立（海水ニテモ可ナリ）

四　初回發生ヲ開始スルニ當リテハ液體苛性曹達ヲ攝氏温度七〇度（最低温度）乃至一〇〇度ニ暖ムルカ或ハ發生槽ニ熱湯ヲ注ギテ豫熱スルヲ要ス

五　硅素鐵漏斗注液弁、危急用瓦斯放出瞞其ノ他弁瞞類竝攪拌關係裝置ノ作動ヲ檢スベシ

六　自動安全吹出管ニ滿水スベシ

七　發生槽附屬寒暖計及水柱壓力計ハ完備シアルヲ要ス

八　苛性曹達取扱ニ從事スルモノハ必ズ護謨被服ヲ裝著シ尚附近ニ必要ニ應ジ皮膚其ノ他衣服ヲ洗濯シ得ラルル如ク清水（海水ヲ準備シ置クベシ

九　發生瓦斯蓄積用補助氣囊ニ至ル護謨布管ノ中間ニ必ズ分離器ヲ裝備スベシ

十　發生作業ハ屋外ノ適當ノ場所ヲ選ビテ行フベシ

十一　發生瓦斯中ニハ砒化水素或ハ燐化水素等有害且危險ノ瓦斯ヲ極微量ニ混ズルコトアルヲ以テ發生瓦斯洗滌用水ハ豐富ニ供給スルヲ要スルヲ以テ之ガ準備ニ遺憾ナキヲ期スベシ

洗滌用水ハ海水ヲ使用スルモ差支ナシ

第二條　瓦斯發生ニ當リテハ左ノ諸項ニ留意スルヲ要ス

一　苛性曹達液ヲ發生槽ニ一時ニ注入スル量ハ一回ノ仕入量ノ二分ノ一以下タルベシ

二　硅素鐵ハ豫メ水一容積ニ對シ四分ノ三容積ノ混合液ト爲

シ發生槽ニ苛性曹達ヲ注入セル後小量宛徐々ニ注加シツツ絶エズ發生槽内ヲ攪拌スベシ

攪拌器ノ回轉ハ毎分約六十回轉ヲ適當トシ瓦斯發生中ハ連續廻轉シ決シテ中止スベカラズ

三　硅素鐵液ヲ間歇的ニ多量注入スルトキハ急激ナル反應ヲ生起シ沸溢ヲ伴フヲ以テ前記一回ノ仕込材料ヲ約五十分乃至一時間ニ注入シ終ル如キ割合ニテ小量宛發生槽内ニ注入スベシ

四　發生瓦斯ハ發生槽及護謨布管内ノ空氣ガ十分排除セラレタルヲ確メタル後補助氣囊ニ接續スルモノトス

五　曹達槽内ノ苛性曹達ヲ使用シ壺シタルトキハ更ニ之ヲ補充シ置キ發生槽内ノ化學反應熱ニ依リテ暖メ置クモノトス

瓦斯發生中苛性曹達ヲ發生槽ニ補充セシ場合ハ瓦斯發生壓力ヲ約水柱一〇〇粍以下ニ降下セシメタル後行フヲ要ス

六　水タンク」中ノ水ハ水面計ノ二分ノ一以下ニ降下セシムベカラズ

七　給水御筒故障ヲ生ジタルトキハ應急給水ノ方法ヲ講ズベシ若シ應急給水ノ遑ナキ場合ニハ速ニ瓦斯發生ヲ中止シ補

助氣囊トノ接續ヲ斷ツベシ此ノ時氣囊内ノ瓦斯ヲ放散セシメザル樣護謨布管ハ縛著スルヲ要ス次ニ瓦斯發生ヲ再始セントスル場合ハ第一條第四號ニ依リテ之ヲ行フモノトス

八　屢々發生瓦斯ノ純度ヲ檢測シ九五%以下ト爲リタルトキハ發生作業ヲ一時中止シ其ノ原因ヲ探究スベシ

九　殘渣ハ有機物ニ對シ尙化學的腐蝕性ヲ有スルヲ以テ之ガ取扱ハ特ニ注意スルヲ要ス

十　瓦斯發生中ハ絶エズ發生槽内溫度及發生瓦斯壓力ニ注意シ之ヲ適當ニ判斷シテ常ニ作動良好ナル狀態ヲ保持スル如ク苛性曹達、硅素鐵及「グリース」ノ注入ヲ調節スベシ若シ仕込材料ノ調節ヲ誤リ瓦斯發生急激ナルトキハ瓦斯ニ多量ノ水蒸氣ヲ含有シ且苛性曹達ヲモ伴フノ虞アルノミナラズ動モスレバ沸溢ヲ惹起スルノ因ト爲ルモノナリ

而シテ發生中ノ適當ナル壓力及溫度ハ左ノ標準ニ依ルベシ

發生瓦斯壓力　水柱一五〇―二〇〇粍

發生槽溫度　攝氏一一〇―一二五度（最高限度一三五度）

十一　硅素鐵注入量ハ漏斗内硅素鐵液液面ノ高低及發生槽内ノ瓦斯壓力ニ左右セラルルモノニシテ假令同一弁開度ヲ保ツモ其ノ量ニ大ナル變化アルヲ注意スベシ發生槽内壓力低キ場合ハ過量ニ注入セラレ易キヲ以テ特ニ注意スルヲ要ス

十二　初回瓦斯發生開始時ハ發生槽溫度低キ爲ニ瓦斯發生量ノ少ナキモ溫度上昇セバ發生量ハ激增シ沸溢シ易キ狀態ト爲ルヲ以テ最初ノ間ハ硅素鐵注入量ヲ減ジ置キ溫度適度ニ上昇スルヲ俟チテ漸次注入ヲ常態ト爲スベシ

十三　溫度過昇シテ瓦斯發生急激ナルトキハ發生槽内ニ震動又ハ音響ヲ生ズ此ノ場合ハ直ニ硅素鐵ノ注入ヲ一時中止シ發生槽内ニ注水スルカ又ハ發生槽危急瓦斯放出嘴ヲ啓開シ自働安全吹出管ヨリノ吹出ヲ未然ニ防止スルコトニ努ムルヲ要ス

十四　槽内壓力過昇セバ速ニ沸溢檢査用嘴ヲ啓開シ沸溢ノ有無ヲ檢スベシ

十五　瓦斯發生中自働安全吹出管ヨリ急激ナル吹出アリタル場合ハ直ニ硅素鐵ノ注入ヲ中止スベシ其ノ勢力稍々減ジタル後再ビ吹出管ニ充水シ發生ヲ續行スベシ此ノ際往々瓦斯ノ瓦斯壓力ニ左右セラルルモノニシテ假令同一弁開度ヲ保ツモ其ノ量ニ大ナル變化アルヲ注意スベシ發生槽内壓力低キ場合ハ過量ニ注入セラレ易キヲ以テ特ニ注意スルヲ要ス

十二　初回瓦斯發生開始時ハ發生槽溫度低キ爲ニ瓦斯發生量ノ少ナキモ溫度上昇セバ發生量ハ激增シ沸溢シ易キ狀態ト爲ルヲ以テ最初ノ間ハ硅素鐵注入量ヲ減ジ置キ溫度適度ニ上昇スルヲ俟チテ漸次注入ヲ常態ト爲スベシ

十三　溫度過昇シテ瓦斯發生急激ナルトキハ發生槽内ニ震動又ハ音響ヲ生ズ此ノ場合ハ直ニ硅素鐵ノ注入ヲ一時中止シ發生槽内ニ注水スルカ又ハ發生槽危急瓦斯放出嘴ヲ啓開シ自働安全吹出管ヨリノ吹出ヲ未然ニ防止スルコトニ努ムルヲ要ス

十四　槽内壓力過昇セバ速ニ沸溢檢査用嘴ヲ啓開シ沸溢ノ有無ヲ檢スベシ

十五　瓦斯發生中自働安全吹出管ヨリ急激ナル吹出アリタル場合ハ直ニ硅素鐵ノ注入ヲ中止スベシ其ノ勢力稍々減ジタル後再ビ吹出管ニ充水シ發生ヲ續行スベシ此ノ際往々瓦斯

濾板ノ孔閉塞スルコトアルヲ以テ特ニ注意スベシ

〔海軍〕

十六　硅素鐵注入ノ割合ニ比シ瓦斯發生量少ナキハ異狀ノ前兆ニシテ多クノ場合急激ナル瓦斯發生ト壓力過昇トヲ惹起スルモノナレバ作業中ハ常ニ硅素鐵注入量ト瓦斯發生量トノ關係ニ注意ヲ怠ルベカラズ

十七　發生作業中漏氣ニ關シテハ充分ノ注意ヲ要ス如何ニ氣密ニ保持セント努ムルモ尙多少ノ瓦斯漏洩ハ免カレザルヲ以テ作業場附近一帶ハ特ニ火氣ヲ嚴禁スベシ

十八　發生槽内ニ多量冷水ヲ注入スルトキハ槽内溫度下降シ混合液ハ冷凝シテ攪拌器ヲ固著セシムルノ虞アリ故ニ瓦斯發生中ハ特別ノ場合ノ外注水嘴ハ啓開スベカラズ

十九　低溫ナル苛性曹達液ニ硅素鐵液ヲ注入スルコトハ急激ナル化學作用ヲ伴ヒ極メテ危險ナリ

二十　洗滌水出口溫度ハ攝氏八〇度ニ保持スルヲ適當トス

第三條　發生作業終了後ノ處置ニ關シテハ大要左ノ諸項ニ依ルモノトス

一　補助氣囊ノ接合部ヲ氣密ニ縛著シタル護謨布管ヲ離脫スベシ

〔海軍〕

二　發生槽下部排出嘴ヲ啓開シ殘渣ヲ排出シ終リタル後發生槽潛孔蓋ヲ開放スルモノトス

三　瓦斯洗滌槽ハ發生終熄後尚五分間以上清水ヲ送入シテ內部ヲ洗滌スベシ

四　各部共清水洗滌ハ整理保存上極メテ必要ナル條件ナリ充分ニ洗滌作業終了セバ洗滌槽上下潛孔蓋ヲ開放シ骸炭ヲ除去シ各部ハ常ニ乾燥狀態ニ保持スベシ

五　必要上發生槽內ニ入ラントスルトキハ豫メ完全ニ槽ノ內部ヲ換氣シ冷却充分ナルヲ確ムベシ作業セムトスル場合ハ二人ヲ一組トシ適宜交代一名ハ常ニ槽外ニ在リテ監視スベシ

第四條　整理保存ニ關シテハ左ノ事項ニ留意スルヲ要ス

一　各槽ハ屢々之ヲ檢査シ漏洩腐蝕ノ狀況ナキヤヲ確メ必要ニ應ジ氣壓試驗ヲ行フベシ

各槽氣壓試驗壓力標準ヲ〇・四瓩毎平方糎トス

二　弁嘴、給水管攪拌諸裝置ハ屢々檢査手入ノ上作動ヲ確認スベシ特ニ攪拌關聯裝置及硅素鐵注液弁ノ作動ノ確否ハ瓦斯發生ニ至大ノ關係ヲ有スルモノナレバ之ガ檢査手入ハ嚴密確實ニ行フベシ

三　發生機各部ハ常ニ乾燥狀態ニ保持シ露天ニ置ク場合ニハ帆布覆ヲナシ證クベシ

四　硅素鐵ハ通風良ク乾燥シタル箇所ニ格納シ決シテ苛性曹達ト接近シ置クベカラズ硅素鐵ヨリ發スル毒瓦斯及爆發性瓦斯ニ對シテハ充分ナル注意ヲ拂フヲ要ス

●水素瓦斯容器試驗檢査及取扱規程

昭和五年十一月二十一日
達第百四十九號

改正　昭和六年第二四號

水素瓦斯容器試驗檢査及取扱規程左ノ通改正ス

水素瓦斯容器試驗檢査及取扱規程

第一條　本規程ハ海軍ニ於ケル航空船及氣球用水素瓦斯容器ノ試驗檢査及取扱ニ關スル事項ヲ規定ス

第二條　本規程ニ定メザル事項ニ關シテハ大正十二年內務省令第十二號壓縮瓦斯及液化瓦斯取締法施行令ニ依ルモノトス

第三條　水素瓦斯容器ノ試驗檢査ヲ分チテ左ノ三種トス

一　領收檢査
二　定期檢査
三　臨時檢査

第四條　領收檢査ハ新ニ製作又ハ購入ノ容器檢收ノ際、定期檢査ハ毎三箇年ニ一回、臨時檢査ハ容器ノ外部ニ損傷アルヲ發見シタルトキ及容器ノ衰朽ヲ認メタルトキ之ヲ行フモノトス

第五條　水素瓦斯容器定期檢査ノ時期ニ達シタルトキ又ハ臨時檢査ノ必要ヲ認メタルトキハ所轄長ハ最寄海軍軍需部長ニ之ガ檢査ヲ請求スベシ

第十七類　諸試驗

第六條　第三條ニ規定セル諸檢査ハ海軍軍需部長本規程ニ依リ之ヲ行フモノトス但シ領收檢査中容器材料ノ試驗ヲ要スル場合ハ所管鎭守府ノ海軍工作廠ニ之ヲ委託スルモノトス

第七條　容器ノ容量ハ四一立、正負一立、其ノ最大使用壓力ハ攝氏三五度ニ於テ毎平方糎ニツキ一五五瓩（一五〇氣壓）トス

第八條　水素瓦斯ヲ充塡セル容器ノ貯藏及取扱ニ付テハ左ノ諸號ヲ遵守スルヲ要ス

一　水素瓦斯充塡ノ初期ニ當リ其ノ壓力毎平方糎ニツキ五乃至一〇瓩ニ達シタルトキハ容器內ノ洗滌及空氣放出ノ目的ヲ以テ一旦瓦斯ヲ放出セシメ微少ノ殘壓ニ至リタルトキ再充塡作業ヲ行フコト

二　容器內ニ濕氣ヲ滯留セシムルトキハ內部ノ腐蝕ヲ增進セシムルヲ以テ之ガ排除ニ付周到ノ注意ヲ爲スコト

三　容器ハ一箇所ニ三〇〇個以上ヲ堆積セザルコト

四　容器ノ格納ニ當リテハ電氣的ニ成ルベク完全ニ地絡セシムルコト

五　容器集團ノ相互間隔ハ五〇米ヲ以テ基準トス但シ同一格納庫內ニ防焰隔壁ヲ設ケ二個所以上ニ集團格納ノ場合ハ此ノ限ニ在ラズ

六　容器ハ別個ニ建テラレタル格納庫ニ貯藏スルヲ例トス

第十三款　發明改良

●艦船機關兵器發明及改良ニ關スル取扱手續

明治三十一年四月二十六日
達第七十二號

改正　大正四年勅令第一四四號

艦船機關兵器發明及改良ニ關スル取扱手續左ノ通定ム

艦船機關兵器發明及改良ニ關スル取扱手續

一　海軍部内ニ於テ艦船機關兵器及其屬具ニ關スル發明ヲ爲シ又ハ改良ノ意匠ヲ起シタル者ハ說明書（圖面或ハ雛形アルモノハ之ヲ添ヘ）ヲ添ヘ所管長官ヲ經テ海軍技術本部長ニ申出ヘシ

一　海軍技術本部長前項ノ申出ヲ受ケタルトキハ精密ニ之カ調査ヲ爲シ有益ノモノト認ムルトキハ軍務局長ニ協議シ便宜其ノ實驗等ヲ爲シ審議ノ上海軍大臣ニ報告スヘシ

但試驗品ヲ製造スル場合ニ於テ其發明人又ハ意匠者ヲ立會ハシムルコトヲ得

●部内諸員職工艦船兵器其他製造ニ關シ發明ヲ爲シタル場合特許出願方

大正十一年六月二十八日
官房第二四三四號

部内諸員竝職工新ニ艦船、兵器其ノ他ノ軍用物及其ノ製造ニ關シ發明ヲ爲シタル場合ニ於テ特許ヲ受ケムトスルトキハ左ノ諸項ニ據ル儀ト心得ヘシ

一　勤務ニ關シ爲シタル發明ニ特許ヲ受ケムトスル者ハ出願前海軍大臣ノ認許ヲ受クヘシ若シ其ノ發明カ發明者ノ任務ニ屬スル場合ニハ海軍大臣ハ發明者又ハ其ノ繼承人ヨリ特許ヲ受クル權利ヲ讓渡セシムルコトアルヘシ

二　前項ノ認許ヲ受ケムトスル者ハ願書ニ發明ノ性質及目的ノ要領、發明ノ詳細ナル說明其ノ他必要ナル事項ヲ記載シタル書類及必要ナル圖面ヲ添付シ順序ヲ經テ海軍大臣ニ差出スヘシ

三　所轄長若ハ之ニ準スル者前項ノ願書ヲ受領シタルトキハ其ノ發明ヲ爲スニ至リタル經過及其ノ發明ノ效用ニ付意見ヲ附シ海軍大臣ニ進達スヘシ

前諸項ノ規定ハ部內諸員竝職工新ニ艦船、兵器其ノ他ノ軍用物ニ關スル實用新案ノ登錄ヲ受ケムトスル場合ニモ之ヲ準用ス

明治四十五年官房第一〇九三號ハ之ヲ廢止ス

【海軍】

第十四款　銃砲火藥取締

●銃砲火藥類取締法　明治四十三年四月十三日法律第五十三號

改正：大正六年第二號、一一年第二號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル銃砲火藥類取締法改正法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム（總理、陸軍、海軍、內務、司法大臣副署）

銃砲火藥類取締法

第一條　銃砲ノ製造又ハ火藥類ノ製造、變形若ハ修理ハ其ノ營業者又ハ行政官廳ノ許可若ハ委託ヲ受ケタル者ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス但シ理化學上ノ實驗、鳥獸ノ捕獲及驅除、射的練習等ノ用ニ供スル火藥類ニ付命令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設ケタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第二條　火藥、爆藥ノ製造ハ帝國臣民又ハ帝國臣民ノミヲ社員若ハ株主トスル會社ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス但シ行政官廳ノ委託ヲ受ケタル場合、行政官廳ノ許可ヲ受ケ新規發明ニ係ル火藥、爆藥ヲ一定ノ期間試驗ノ爲製造スル場合又ハ前條但書ノ規定ニ該當スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

【海軍】

第三條　銃砲、火藥類ノ製造又ハ販賣ノ業ヲ營マムトスル者ハ行政官廳ノ許可ヲ受クヘシ但シ製造業者カ其ノ製造シ又ハ加工シタル銃砲、火藥類ノ卸賣ヲ爲ス場合ハ此ノ限ニ在ラス

相續ニ依リ前項ノ營業ヲ繼續スル場合ハ許可ヲ受ケタルモノト看做ス

銃砲ノ修繕又ハ改造ノ業ヲ營ム者ハ銃砲製造業者ト看做シ火藥類ノ變形又ハ修理ノ業ヲ營ム者ハ火藥類製造業者ト看做ス

第四條　行政官廳ハ銃砲販賣業者及火藥類販賣業者ノ道府縣ニ於ケル定員ヲ設クルコトヲ得

製造業者及行政官廳ノ許可ヲ受ケ其ノ委託額以上ノ同種類ノ火藥類ヲ製造スル者ニシテ其ノ製造シ又ハ加工シタル銃砲、火藥類ノ販賣業ヲ兼ヌルモノハ前項ノ定員ニ算入セス

第五條　銃砲、火藥類ノ製造、變形、修理又ハ販賣ニ關シ許可ヲ受ケタル者行政官廳ニ於テ指定シタル期間內ニ其ノ事業ヲ開始セス若ハ事業開始後一年以上其ノ事業ヲ休止シタルトキ又ハ法令ニ違反シタルトキ又ハ安寧秩序ヲ害スルノ虞アリト認ムルトキハ行政官廳ハ其ノ許可ヲ取消シ又ハ其ノ事業ヲ停止

若ハ制限スルコトヲ得

第六條　軍用銃砲、火藥類ノ讓渡又ハ讓受ハ法令ニ特別ノ規定アル場合ヲ除クノ外其ノ製造若ハ販賣ノ業ヲ營ム者又ハ特ニ行政官廳ノ許可ヲ受ケタル者ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第七條　銃砲、火藥類ハ之ヲ行商シ又ハ市場若ハ露店其ノ他屋外ニ於テ之ヲ販賣スルコトヲ得ス

第八條　銃砲、火藥類ノ輸出ハ其ノ製造若ハ販賣ノ業ヲ營ム者又ハ特ニ行政官廳ノ許可ヲ受ケタル者ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第九條　銃砲、火藥類ノ輸入ハ行政官廳ノ委託ヲ受ケタル者若ハ其ノ販賣ノ業ヲ營ム者又ハ特ニ行政官廳ノ許可ヲ受ケタル者ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第十條　行政官廳ハ何時ニテモ當該官吏ヲシテ銃砲、火藥類ノ製造所、貯藏所其ノ他銃砲、火藥類ヲ收藏スルノ疑アル場所ニ臨檢シ又ハ銃砲、火藥類及之ヲ收藏スルノ疑アル物件若ハ營業上ノ帳簿其ノ他書類ヲ檢査セシムルコトヲ得

行政官廳ハ危害豫防ノ爲銃砲、火藥類ノ製造所若ハ火藥類ノ貯藏所ノ改築若ハ修繕ヲ命シ又ハ火藥類ニ關シ若ハ其ノ貯

藏、運搬其ノ他ノ取扱ニ關シ取締上必要ナル處分ヲ爲スコトヲ得

第十一條　行政官廳ハ保安上、軍事上又ハ外交上必要アリト認ムル場合ニ於テ銃砲、火藥類ノ輸出若ハ輸入ヲ禁止シ又ハ制限スルコトヲ得

第十二條　行政官廳ハ安寧秩序ヲ保持スル爲必要アリト認ムルトキハ銃砲、火藥類ノ授受、運搬、携帶ヲ禁止シ又ハ制限スルコトヲ得

第十三條　前二條ノ場合ニ於テ行政官廳ハ銃砲、火藥類ノ假領置ヲ爲スコトヲ得

第十四條　左ノ事項ニ關シ必要ナル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

一　本法ノ適用ヲ受クヘキ銃砲、火藥類ノ範圍及新規發明ニ係ル火藥類ヲ一定ノ期間試驗ノ爲製造スル場合ヲ除クノ外行政官廳ノ許可ヲ受ケ又ハ營業トシテ製造、變形又ハ修理シ得ル普通火藥類ノ範圍

二　銃砲、火藥類ノ取引、授受、使用、運搬、貯藏其ノ他ノ取扱

三　銃砲、火藥類ノ取扱人及火藥類ノ作業主任者ニ關スル事項

四　銃砲、火藥類製造所及火藥貯藏所ニ關スル事項

五　火藥類ヲ要スル工事又ハ工事ニ關スル事項

第十五條　本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ全部又ハ一部ハ命令ノ定ムル所ニ依リ銃砲、火藥類ニ非サル他ノ戎器又ハ爆發質物品ニ關シ之ヲ準用スルコトヲ得

本法ノ一部ヲ適用スルノ必要ナシト認ムル銃砲、火藥類ニ關シテハ命令ヲ以テ特別ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第十六條　第一條、第八條若ハ第九條ノ規定ニ違反シ、許可ヲ受ケスシテ第三條ノ營業ヲ爲シ又ハ第五條若ハ第十一條ノ規定ニ依ル命令ニ違反シタル者ハ二年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第八條若ハ第九條ノ規定ニ違反シ又ハ第十一條ノ規定ニ依ル命令ニ違反シタル場合ニ於テハ未遂罪ヲ罰ス

第十七條　第十二條ノ規定ニ依ル命令ニ違反シタル者ハ一年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十八條　第十條第二項ノ規定ニ依ル命令ニ違反シ又ハ第十條第一項若ハ第十三條ノ規定ニ依ル當該官吏ノ職務ノ執行ヲ拒ミ若ハ之ヲ妨ケタル者又ハ其ノ執行ニ際シ當該官吏ノ尋問ニ對シ答辯ヲ爲サス若ハ虚僞ノ陳述ヲ爲シタル者ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條　第六條又ハ第七條ノ規定ニ違反シタル者ハ三百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第二十條　營業者又ハ行政官廳ノ許可ヲ受ケ銃砲、火藥類ニ關スル事業ヲ行フ者未成年者又ハ禁治産者ナルトキハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ之ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第二十一條　營業者又ハ行政官廳ノ許可ヲ受ケ銃砲、火藥類ニ關スル事業ヲ行フ者ハ其ノ代理人、戸主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ營業又ハ事業ニ關シ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ違反シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

第二十二條　前二條ノ場合ニ於テハ罰金、科料又ハ沒收以外ノ刑ニ處スルコトヲ得ス

第二十三條　明治三十三年法律第五十二號ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依ル犯罪ニ之ヲ準用ス

附　則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

（明治四十四年三月勅令第十五號ヲ以テ同年五月一日ヨリ施行）

刑法施行法第二十五條第一項中第一號ヲ削リ以下各號順次繰上ク

爆發物取締罰則ハ本法ノ爲其ノ效力ヲ妨ケラルルコトナシ

●銃砲火藥類取締法施行規則

明治四十四年三月十一日
勅令第十六號

改正　大正六年第一八四號、一二年第一七六號

枢密顧問ノ諮詢ヲ經テ銃砲火藥類取締法施行規則ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム（總理、陸軍、海軍、內務、遞信、司法大臣副署）

銃砲火藥類取締法施行規則

第一條　銃砲火藥類取締法ニ於テ銃砲ト稱スルハ軍用銃砲及非軍用銃砲ヲ謂フ

軍用銃砲トハ陸軍大臣又ハ海軍大臣ニ於テ軍用銃砲トシテ指定シタル銃砲及千米突以上ノ距離ニ有效ニ彈著スヘキ裝置ヲ有シ陸軍又ハ海軍ノ用ニ供シ得ヘキ銃砲ヲ謂ヒ非軍用銃砲トハ其ノ他ノ銃砲ヲ謂フ

第二條　銃砲火藥類取締法ニ於テ火藥類ト稱スルハ左ニ揭クル火藥、爆藥及火工品ヲ謂フ

一　火藥　硝酸鹽類ヲ主トスル有煙火藥、硝化纖維素ヲ主トスル無煙火藥又ハ硝化纖維素トナイトログリセリンノ結合物ヲ主トスル無煙火藥ノ類

二　爆藥　雷酸煙（雷汞ノ類）起爆ノ用途ニ供スル窒化物（窒化鉛其ノ他ノ起爆劑、ナイトログリセリン及之ヲ主トスル爆發藥各種ダイナマイトノ類、硝酸鹽、鹽素酸鹽若ハ過鹽素酸鹽ヲ主トスル爆發藥又ハ爆發ノ用途ニ供スル棉火藥、芳香系列ノ硝化物（ナイトロベンジン、ナイトロナフサリン、ナイトロトリユオール、ピクリン酸及テトラナイトロメチールアニリンノ類）及之ヲ主トスル混和物ノ類

三　火工品　實包、空包、藥筒、藥包、彈藥筒、火藥若ハ爆藥ヲ裝填シタル彈丸若ハ水雷、雷管、信管、爆管、門管、緩燃導火線（一尺ノ燃燒時間十秒以上ヲ要スルモノ）、速燃導火線又ハ煙火其ノ他火藥若ハ爆藥ヲ使用シタル火工品但シ玩具用普通火工品ヲ除ク

雷管又ハ信管ヲ裝置シタル導火線ハ雷管又ハ信管ト看做ス

第二條ノ二　新規發明ニ係ル火藥類ヲ一定ノ期間試驗ノ爲製造スル場合ヲ除クノ外行政官廳ノ許可ヲ受ケ又ハ營業トシテ製造、變形又ハ修理シ得ル普通火藥類ハ左ニ揭クルモノニ限ル

一　火藥　硝酸鹽類ヲ主トスル有煙火藥又ハ硝化纖維素ヲ主トスル無煙火藥、

二　爆藥　雷酸鹽（雷汞、ナイトログリセリン及之ヲ主トスルノ類）

爆發藥　各種ダイナマイトノ類　硝酸アンモニア若ハ過塩素酸塩ヲ主トスル爆發藥、爆發ノ用途ニ供スル棉火藥、芳香系列ノ硝化物　ナイトロベンジン、ナイトロナフサリン、ナイトロトリユオール、ピクリン酸及テトラナイトロメチールアニリンノ類ヲ主トスル混和物又ハ煙火原料用爆藥

三　火工品全部

第二條ノ三　左ニ揭クル場合ニ於テハ行政官廳ノ許可ハ之ヲ受クルコトヲ要セス

一　理化學上ノ實驗トシテ小量ノ火藥類ヲ製造、變形又ハ修理スル場合

二　乙種狩獵免狀ノ下付ヲ受ケタル者又ハ學術研究若ハ有害鳥獸驅除ノ爲銃器ヲ使用シテ鳥獸ヲ捕獲スルノ許可ヲ受ケタル者其ノ所要ノ銃用實包一日百箇以內ヲ製造スル場合

三　有害鳥獸威嚇ノ爲銃用空包發射ノ許可ヲ受ケタル者其ノ所要ノ銃用空包一日百箇以內ヲ製造スル場合

四　射的ノ練習又ハ競技ノ爲成年者タル練習者、競技者又ハ射的場ノ職員カ射的場內ニ於テ練習者又ハ競技者一人ニ付其ノ所要ノ非軍用銃用實包又ハ狹窄射擊用銃用實包一日三十箇以內ヲ製造スル場合

五　學校ノ發火演習ニ際シ其ノ職員カ校內ニ於テ學生又ハ生徒一人ニ付其ノ所要ノ銃用空包三十箇以內ヲ製造スル場合

六　學校ノ運動會又ハ競技會ニ際シ其ノ職員カ校內ニ於テ其ノ所要ノ信號用ノ銃用空包二百箇以內ヲ製造スル場合

第三條　銃砲火藥類取締法又ハ本令ニ於テ軍用火藥類ト稱スルハ專ラ陸軍又ハ海軍ノ用ニ供スル火藥類ヲ謂ヒ普通火藥類ト稱スルハ其ノ他ノ用ニ供スル火藥類ヲ謂フ

第四條　銃砲ノ製造又ハ火藥類ノ製造、變形若ハ修理ニ付行政官廳ノ委託ヲ受ケタル者ハ事業開始前製造スヘキ銃砲又ハ製造若ハ變形修理スヘキ火藥類ノ種類、數量、委託ノ年月日、委託ノ條件及委託官廳名ヲ其ノ官廳ノ證明書ヲ添付シテ作業地廳府縣長官ニ屆出ツヘシ

第五條　軍用銃砲又ハ火藥若ハ爆藥（煙火原料用火藥又ハ爆藥ヲ除ク）ノ製造ノ許可ハ作業地廳府縣長官ヲ經由シ陸軍ノ用ニ供スル銃砲火藥類ニ付テハ內務大臣及陸軍大臣ニ、海軍ノ用ニ供スル銃砲火藥類ニ付テハ內務大臣及海軍大臣ニ、其ノ他ノ火藥類ニ付テハ內務大臣ニ之ヲ申請スヘシ

第六條　非軍用銃砲ノ製造、煙火原料用火藥若ハ爆藥ノ製造、

〔海軍〕

火藥若ハ爆藥ノ變形修理又ハ火工品ノ製造若ハ變形修理ノ許可ハ作業地廳府縣長官ニ、銃砲火藥類ノ販賣營業ノ許可ハ營業地廳府縣長官ニ之ヲ申請スヘシ

第七條　行政官廳ノ許可ヲ受ケ又ハ營業トシテ銃砲火藥類ヲ製造又ハ變形修理スル者ハ其ノ事業ニ要スル設備ニ付許可ヲ爲シタル行政官廳又ハ其ノ委任ヲ受ケタル廳府縣長官ノ檢查ヲ受クルニ非サレハ之ヲ使用スルコトヲ得ス其ノ變更ニ付亦同シ

第八條　銃砲火藥類ノ製造又ハ變形修理ヲ委託スル場合ニ於テハ委託行政官廳ハ本令又ハ本令ニ基キテ發スル命令ニ定ムルモノノ外取締上必要ナル設備又ハ事項ヲ命スルコトヲ得

前項ノ設備ニ付テハ前條ノ規定ヲ準用ス

第九條　前二條ノ規定ハ危害豫防ニ關スル警察官ノ職權ヲ行使スルコトヲ妨ケス

第十條　第七條又ハ第八條ノ規定ニ依リ檢查ヲ受ケタル設備又ハ許可ノ條件トシテ若ハ第八條ノ規定ニ依リ命令セラレタル事項ヲ變更セムトスル者ハ許可又ハ委託ヲ爲シタル行政官廳ノ許可ヲ受クヘシ

前項ノ許可申請ハ第五條ノ主務大臣ニ之ヲ爲ス場合ニ於テハ作業地廳府縣長官ヲ經由スヘシ

第十一條　銃砲火藥類取締法第三條ノ規定ニ依リ火藥類販賣業者ニ與フル許可ヲ分チテ甲乙ノ二種トス

甲種ノ許可ヲ受ケタル火藥類販賣業者ハ火藥類ニ關スル各種ノ商行爲ヲ爲スコトヲ得

乙種ノ許可ヲ受ケタル火藥類販賣業者ハ火藥類ヲ輸入シ之レヲ官廳又ハ火藥類販賣業者ニ賣渡スノ外火藥類ニ關スル他ノ商行爲ヲ爲スコトヲ得ス

第十二條　銃砲販賣業者及前條ノ火藥類販賣業者ノ道府縣ニ於ケル定員ハ內務大臣之ヲ定ム

第十三條　火藥類販賣業者ハ火藥庫ヲ備フルコトヲ要ス

第十四條　火藥類販賣業者ノ火藥類取扱ハ火藥類取扱免狀ヲ有スル者之ニ任スルコトヲ要ス一年間二千貫以上ノ火藥又ハ千貫以上ノ爆藥消費スル者ニ付亦同シ

前項ノ規定ハ火藥及爆藥ヲ共ニ消費スル場合ニ於テハ爆藥一貫ヲ火藥二貫ト看做シ合算シタル數量ニ付之ヲ適用シ消費ノ場所二箇以上アル場合ニ於テハ各消費場所ニ付之ヲ適用ス

第十五條　火藥類取扱免狀ニ關スル規定ハ內務大臣之ヲ定ム

第十五條ノ二　火藥類ノ製造又ハ變形修理ヲ爲ス作業所ニハ火藥類ノ作業主任者ヲ置クコトヲ要ス火藥類ノ作業主任者ノ資格ニ關スル規定ハ內務大臣之ヲ定ム

第十六條　火藥類讓渡ノ許可ハ所轄廳府縣長官ニ之ヲ申請スヘシ但シ火藥類讓受ノ許可ハ消費地廳府縣長官ニ之ヲ申請スヘシ

消費地定マラス若ハ二箇所以上ニ亙リ又ハ銃砲火藥類取締法施行區域外ニ係ル場合ハ所轄廳府縣長官ニ之ヲ申請スヘシ

第十七條　左ノ各號ノ火藥類ノ讓渡及讓受ニ付テハ內務大臣ノ定メタル場合ニ限リ前條ノ區分ニ依リ警察官署ニ之ヲ申請スルコトヲ得

一　火藥　三貫以內
二　爆藥　一貫三百匁以內
三　工業用雷管　二千箇以內
四　信管　千箇以內
五　爆管　千箇以內
六　門管　千箇以內
七　導火線　五百間以內

第十八條　軍用銃砲又ハ左ノ各號ノ火藥類ノ讓渡及讓受ノ許可ハ所轄警察官署ニ之ヲ申請スヘシ

一　火藥　一貫三百匁以內
二　銃用實包　千箇以內
三　銃用空包　千箇以內
四　銃用實包又ハ銃用空包ニ要スル雷管又ハ雷管附藥莢　二千箇以內

第十九條　前條ノ許可ハ二月間其ノ效力ヲ有ス

前三條ノ許可ハ許可ヲ爲シタル行政官廳取締上必要ト認ムルトキハ何時ニテモ之ヲ取消スコトヲ得

前三條ノ規定ニ依ル讓受ノ許可ハ讓受ヲ要スル事由ノ消滅ニ依リ其ノ效力ヲ失フ

第二十條　軍用銃砲又ハ火藥類ノ讓渡ハ公賣又ハ競賣法若ハ民事訴訟法ニ依ル競賣ノ場合ニ於テハ許可ヲ要セサルモノトス

第二十一條　鑛業法ニ依リ鑛物ノ試掘若ハ採掘ヲ爲ス者又ハ內務大臣ノ定ムル所ニ依リ工事若ハ工業ノ爲火藥類消費ノ許可ヲ受ケタル者カ其ノ消費スル火藥類ヲ讓受クル場合ニ於テハ〔海軍〕

第十七條各號ノ火藥類ニ限リ、狩獵免許ヲ受ケタル者カ其ノ消費スル火藥類ヲ讓受クル場合ニ於テハ第十八條各號ノ火藥類ニ限リ行政官廳ノ許可ヲ要セサルモノトス

第二十二條　火藥類ハ左ニ揭クル者カ其ノ火藥類ヲ所持スル場合ノ外之ヲ所持スルコトヲ得ス

一　火藥類販賣業者
二　火藥類製造業者又ハ委託若ハ許可ヲ受ケ火藥類ノ製造若ハ變形修理ヲ爲ス者
三　第十六條及第十七條ノ規定ニ依リ火藥類讓受ノ許可ヲ受ケタル者
四　前條ノ規定ニ依リ許可ヲ受ケスシテ火藥類ヲ讓受ケタル者
五　第二十三條ノ規定ニ依リ火藥類ノ輸入又ハ輸出ノ許可ヲ受ケタル者
六　運送業者
七　相續又ハ遺贈ニ因リ火藥類ノ所有權ヲ取得シタル者
八　法人ノ合併ニ因リ火藥類ノ所有權ヲ取得シタル者
九　前各號ニ揭クル者ノ家族又ハ從業者

火藥類ヲ所持スル者廢業、許可ノ取消其ノ他ノ事由ニ因リ前項各號ニ該當セサルニ至リタルトキハ所轄警察官署ノ認可ヲ受ケ讓渡其ノ他必要ナル處分ヲ爲スヘシ

前二項ノ規定ハ第十八條各號ノ火藥類ニ之ヲ適用セス

第二十三條　銃砲火藥類取締法第八條ノ許可ハ輸出港、同法第九條ノ許可ハ輸入港ヲ管轄スル廳府縣長官ニ之ヲ申請スヘシ

前項ノ許可ハ軍用銃砲及軍用火藥類ニ付テハ輸出港又ハ輸入港ヲ管轄スル廳府縣長官ヲ經由シ陸軍ノ用ニ供スルモノニ付テハ內務大臣及陸軍大臣ニ、海軍ノ用ニ供スルモノニ付テハ內務大臣及海軍大臣ニ之ヲ申請スヘシ

第二十四條　前條ノ許可ハ一年間其ノ效力ヲ有ス但シ許可ヲ爲シタル行政官廳取締上必要ト認ムルトキハ何時ニテモ之ヲ取消スコトヲ得

第二十五條　輸入又ハ讓受ノ許可ヲ受ケタル火藥類ハ其ノ許可ヲ爲シタル行政官廳、第二十一條ノ規定ニ依リ許可ヲ受ケシテ讓受ケタル火藥類ハ所轄警察官署ノ許可ヲ受クルニ非サレハ之ヲ他ノ用途ニ充ツルコトヲ得ス

第二十六條　銃砲火藥類取締法第十一條ノ規定ニ依ル銃砲火藥類ノ輸出若ハ輸入ノ禁止又ハ制限ハ內務大臣之ヲ行フ但シ陸軍ノ用ニ供スルモノニ付テハ內務大臣及陸軍大臣、海軍ノ用ニ供スルモノニ付テハ內務大臣及海軍大臣之ヲ行フ

第二十七條　火藥類ハ第十八條各號ノ一ニ該當スルモノ及左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ヲ除クノ外火藥庫又ハ倉庫以外ノ場所ニ之ヲ貯藏スルコトヲ得ス

一　土工其ノ他一時ノ事業ニ要スル火藥類ヲ其ノ事業中假貯藏所ニ貯藏スル場合

火藥類ノ種類 ＼ 貯藏所ノ種類	火藥庫	倉庫	假貯藏所
火藥	一萬貫	十二萬貫	五千貫
爆藥	五千貫	三萬貫	二千五百貫
銃用實包	二千萬箇	三萬箇	千萬箇
銃用空包	二千萬箇	三萬箇	千萬箇
銃用雷管	五千萬箇	十萬箇	五百萬箇
工業用雷管	三百萬箇	一萬箇	三十萬箇
信管、爆管、門管	無制限	三萬箇	無制限

〔海軍〕

二　一月以內ニ完了スヘキ土工其ノ他ノ事業ニ要スル火藥類ニシテ第十七條各號ノ一ニ該當スルモノヲ其ノ事業中十日以內ヲ限リ所轄警察官署ノ許可ヲ受ケ其ノ指定シタル安全ノ場所ニ貯藏スル場合

三　火藥ヲ裝填セサル雷管附藥莢ヲ安全ナル場所ニ貯藏スル場合

第二十八條　火藥類貯藏所ニ貯藏スル火藥類ハ左ノ數量ヲ超過スルコトヲ得ス

前項ニ揭ケサル火工品ハ其ノ原料タル火藥又ハ爆藥ノ數量ニ依リ前項ノ規定ヲ適用ス但シ雷管附藥莢及導火線ハ此ノ限ニ在ラス

第二十九條　內務大臣ハ安全ナル位置ニ於テ特別ノ設備ヲ爲シタル火藥庫ニ付危險ノ虞ナシト認ムル程度ニ於テ前條ノ數量ヲ超過スル火藥類ノ貯藏ヲ許可スルコトヲ得

第三十條　火藥類ノ製造又ハ變形修理ヲ爲ス作業所ニ存置シ得ヘキ火藥類ノ數量ハ其ノ設備ニ應シ製造若ハ變形修理ヲ委託若ハ許可シ又ハ其ノ營業ヲ許可シタル行政官廳之ヲ指定ス

第三十一條　火藥類ハ內務大臣ノ定ムル區別ニ依リ各別棟ノ火藥類貯藏所ニ之ヲ貯藏スヘシ但シ倉庫ニ在リテハ不燃質物ヲ以テ造リタル隔壁ニ依リ遮斷スル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス

第三十二條　火藥貯藏所ノ新設ハ所在地廳府縣長官ノ許可ヲ受クヘシ其ノ增築、改築、修繕又ハ模樣替ノ工事ヲ爲ストキ亦同シ

工事ヲ竣リタル火藥貯藏所ハ警察官ノ檢查ヲ受クルニ非サレハ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第三十三條　第二十八條ノ規定ニ依リ火藥類貯藏所ニ貯藏スルコトヲ得ヘキ最大數量ノ火藥類ノ貯藏ニ付テハ倉庫ヲ除クノ外其ノ外壁ヨリ左ノ距離ヲ保有スヘシ

〔海軍〕

一　宮城、離宮、御用邸又ハ神宮ヘ二十町以上

二　皇陵、社寺、學校、公園、電氣瓦斯若ハ石油ノ工場、電力若ハ火力ヲ使用スル工場、發火質物件ヲ蓄積スル場所、鐵道、軌道、汽船ノ常航路若ハ繫留所又ハ市街地ヘ四町以上

三　宅地、國道、縣道、電線、瓦斯ノ傳導管、火ヲ取扱フ場所、蓄積シタル燃燒物其ノ他內務大臣ノ指定シタル箇所ヘ五十間以上

前項ノ距離ハ貯藏數量ノ增減ニ從ヒ貯藏數量ノ平方根ニ比例シテ之ヲ增減ス但シ各距離ノ五分ノ一ヲ下ルコトヲ得ス

倉庫ハ其ノ外壁ノ周圍ニ一間以上ノ空地ヲ保有スヘシ但シ貯藏數量ヲ減少シ特ニ廳府縣長官ノ許可ヲ受ケタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

廳府縣長官ハ必要ト認ムルトキハ假貯藏所ニ付第一項及第二項ノ規定ニ依ル距離以上ニ於テ特ニ其ノ距離ヲ指定スルコト

ヲ得

火藥類貯藏所相互ノ距離ニ付テハ本條ノ規定ヲ適用セス

第三十四條　內務大臣ハ天然又ハ人造ノ掩體ノ狀態其ノ他土地又ハ設備ノ狀況ニ依リ危險ノ虞ナシト認ムル程度ニ於テ前條ニ定ムル距離ノ減少ヲ許可スルコトヲ得

第三十五條　第二十九條及前條ノ許可ハ狀況ノ變更ニ依リ何時ニテモ之ヲ取消スコトヲ得

第三十六條　第二十八條ノ規定ニ依リ倉庫ニ貯藏スルコトヲ得ヘキ數量ヲ超過スル火藥類ハ所轄警察官署ノ許可ヲ受クルニ非サレハ同時ニ之ヲ運搬スルコトヲ得ス

第三十七條　火藥類ハ他ノ物件ト混包シ又ハ變裝若ハ假裝シテ之ヲ所持、運搬又ハ託送スルコトヲ得ス

前項ノ物件ヲ發見シタル者ハ直ニ警察官ニ之ヲ屆出ツヘシ

第三十八條　地盤又ハ物件ヲ破碎スルノ目的ヲ以テ火藥又ハ爆藥ヲ使用セムトスル者ハ使用地警察官署ノ許可ヲ受クヘシ但シ內務大臣カ特ニ定メタル場合又ハ鑛業法ニ依ル鑛物ノ試掘若ハ採掘ニ關シテハ此ノ限ニ在ラス

第三十九條　拳銃短銃又ハ仕込銃ハ職務又ハ銃砲ニ關スル營業

ノ爲ニスル場合ヲ除クノ外所轄警察官署ノ許可ヲ受クルニ非サレハ之ヲ授受、運搬又ハ携帶スルコトヲ得ス

前項ノ規定ハ仕込刀劍其ノ他變裝シタル戎器ニ之ヲ準用ス

第四十條　拳銃、短銃又ハ仕込銃ハ業務又ハ修學ノ爲ニスル場合ヲ除クノ外未成年者之ヲ所持シ又ハ未成年者ヲシテ之ヲ所持セシムルコトヲ得ス

前項ノ規定ハ仕込刀劍其ノ他ノ戎器ニ之ヲ準用ス

第四十一條　火藥類ノ運搬、所持其ノ他ノ取扱ハ未成年者之ヲ爲シ又ハ未成年者、白痴者若ハ瘋癲者ヲシテ之ヲ爲サシムルコトヲ得ス但シ第十八條各號ノ火藥類ニ付テハ十五歲以上ノ者ニ限リ之ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サシムルコトヲ得

第四十二條　營業者ハ許可ヲ受ケサル者ニ銃砲火藥類又ハ第三十九條ノ戎器ヲ讓渡スコトヲ得ス但シ讓受ニ付許可ヲ要セサル場合及銃砲火藥類取締法施行區域外ニ居住スル者ニシテ當該行政官廳ニ依リ移入ノ許可ヲ受ケタルモノニ對シ銃砲火藥類ヲ移出讓渡スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第四十三條　試驗ノ結果不良品ト認定セラレタル火藥類ハ內務大臣ノ定ムル所ニ依リ其ノ所持者ニ於テ直ニ必要ナル處置ヲ

〔海軍〕

爲スヘシ

第四十四條　第十一條乃至第十五條、第二十二條、第二十七條、第二十九條及第三十一條乃至第三十六條ノ規定ハ緩燃導火線ニ之ヲ適用セス

銃砲火藥類取締法第六條、第八條及第九條竝本令第十一條乃至第十五條、第二十二條、第二十七條乃至第二十九條及第三十一條乃至第三十六條ノ規定ハ煙火及遞信大臣カ船舶備付用ノ爲特ニ指定シタル煙火類似ノ火工品ニ之ヲ適用セス

緩燃導火線及煙火ニ付必要ナル規定ハ廳府縣長官之ヲ定ム

第二項ノ船舶備付用火工品ニ付必要ナル規定ハ遞信大臣之ヲ定ム

第四十五條　第七條、第八條第二項、第十條第一項、第十二條、第十四條、第十五條ノ二第一項、第二十二條、第二十五條、第二十七條、第二十八條、第三十一條、第三十二條、第三十六條、第三十七條第一項、第三十八條、第四十二條及第四十三條ノ規定ニ違反シタル者、第三十三條ノ規定ニ違反シ又ハ本令ニ依ル許可若ハ指定ノ範圍ヲ超エテ火藥類ヲ貯藏シタル者竝本令ニ基キテ發スル內務大臣ノ命令ノ規定ニ適合セサル

火藥類貯藏所ニ火藥類ヲ貯藏シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十六條　第三十九條乃至第四十一條ノ規定ニ違反シタル者ハ三月以下ノ懲役若ハ五十圓以下ノ罰金又ハ拘留若ハ科料ニ處ス

第四十七條　第四條又ハ第三十七條第二項ノ規定ニ違反シタル者ハ五十圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第四十八條　銃砲火藥類取締法第十條乃至第十三條及第十六條乃至第十八條ノ規定ハ銃砲火藥類ニ非サル他ノ戎器及爆發質物品ニ之ヲ準用ス

第四十九條　公賣又ハ競賣法若ハ民事訴訟法ニ依ル競賣ヲ爲ス者ハ銃砲火藥類取締法及本令ノ適用ニ付テハ之ヲ讓渡人ト看做ス

第五十條　左ノ事項ハ內務大臣之ヲ定ム但シ鐵道ニ依ル輸送ニ關スル事項ハ鐵道大臣、郵便及船舶ニ依ル輸送及船舶ニ於ケル常用火藥類ノ貯藏ニ關スル事項ハ遞信大臣之ヲ定ム

一　火藥類ノ貯藏、收納、荷造其ノ他ノ取扱ノ方法及制限

二　第四十三條ノ規定ニ依ル火藥類試驗及不良品處置方法

〔海軍〕

三　火藥類運搬ノ方法及制限
四　火藥類作業所及火藥類貯藏所ノ設備
五　火藥類作業所及火藥類貯藏所ニ於テ遵守スヘキ事項

第五十一條　前條ノ規定ニ依ル命令ハ鑛業法第七十一條ノ規定ニ依リ農商務大臣ノ發スル命令ノ效力ヲ妨クルコトナシ

附　則

本令ハ明治四十四年五月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第十三條及第十四條ノ規定ハ仍二年間之ヲ適用セス

本令施行前火藥商又ハ甲種火藥商ノ許可ヲ受ケタル者ハ甲種火藥類販賣業者、輸入及卸賣ノ營業ニ限リ許可ヲ受ケタル者又ハ乙種火藥商ノ許可ヲ受ケタル者ハ乙種火藥類販賣業者トシテ各其ノ許可ヲ受ケタルモノト看做ス

本令施行ノ際本令又ハ本令ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ適合セサル火藥類貯藏所ハ所在地廳府縣長官ノ指定シタル期間ニ於テ之ヲ改造スヘシ

●銃砲火藥類取締法第四條ニ據ル軍用銃砲ノ種類

明治三十二年八月五日
陸軍省
海軍省告示

銃砲火藥類取締法第四條ニ據リ軍用銃砲ノ種類ヲ左ノ通定ム

軍用銃砲トハ口徑五糎米突以上ニシテ腔綫ヲ施シ且ツ千米突以上ノ距離ニ達スヘキ照尺ノ裝置アル銃砲ヲ謂フ但シ特ニ獵用若クハ射的用ノ爲メ製作シタルモノ及軍用銃砲ト雖トモ陸海軍官衙ニ於テ廢品ノ處分ヲ爲シタルモノハ此限リニアラス

●火藥類取扱及火藥類作業主任者資格證明書交付規程

昭和九年二月十日
海軍省告示第一號

大正七年二月海軍省告示第一號銃砲火藥類取締法施行細則第四條及第六條ノ二ニ依ル甲種火藥類取扱及乙種丙種火藥類作業主任者資格證明書交付規程左ノ通改正ス

火藥類取扱及火藥類作業主任者資格證明書交付規程

第一條　海軍ニ於テ火藥類ノ取扱ニ從事セル者ニシテ左ノ規定ニ依ル火藥類取扱免狀下付ニ要スル資格證明書ノ下付ヲ受ケントスル者ハ履歷書ニ具シ所屬ノ如何ヲ問ハズ海軍艦政本部長ニ出願スヘシ

明治四十四年內務省令第二號銃砲火藥類取締法施行細則第六條ノ二乙種第二號

大正十三年朝鮮總督府訓令第二十七號銃砲火藥類取締ニ關シ軍工廠長、海軍航空廠長、舞鶴要港部工作部長、海軍技術研究所長又ハ海軍火藥廠長（前記ノ廳ニ屬セザル者ニ在リテハ最寄前記廳長）ニ出願スヘシ

明治四十四年內務省令第二號銃砲火藥類取締法施行細則第四條甲種第三號

大正十三年朝鮮總督府令第四十六號銃砲火藥類取締令施行規則第四十八條甲種第二號

大正二年臺灣總督府令第七號臺灣銃砲火藥類取締規則施行規則第十七條甲種第三號

大正十三年關東廳令第四號銃砲火藥類取締規則第二十七條甲種第三號

第二條　海軍ニ於ケル火藥類製造所ニ於テ三年以上火藥類製造ノ實務ニ從事セル者ニシテ左ノ規定ニ依ル火藥類作業主任者免狀下付ニ要スル資格證明書ノ下付ヲ受ケントスル者ハ履歷ヲ具シ所屬ノ如何ヲ問ハズ海軍艦政本部長ニ出願スヘシ

六條ノ二乙種第二號

スル取扱手續第七條第二號
大正二年臺灣總督府令第七號臺灣銃砲火藥類取締規則施行規則第十七條ノ二乙種第二號
大正十三年關東廳令第四號銃砲火藥類取締規則第二十六條乙種第二號

第三條　海軍ニ於テ火工兵器ノ製造ニ從事セル者ニシテ左ノ規定ニ依ル火藥類作業主任者免狀下付ニ要スル資格證明書ノ下付ヲ受ケントスル者ハ履歷ヲ具シ其ノ所屬ニ從ヒ海軍艦政本部長、海軍工廠長、海軍航空廠長、舞鶴要港部工作部長、海軍技術研究所長又ハ海軍火藥廠長（前記ノ廳ニ屬セザル者ニ在リテハ最寄前記廳長）ニ出願スベシ

明治四十四年內務省令第二號銃砲火藥類取締法施行細則第六條ノ二丙種第二號
大正十三年朝鮮總督府訓令第二十七號銃砲火藥類取締ニ關スル取締手續第七條第六號
大正二年臺灣總督府令第七號臺灣銃砲火藥類取締規則施行規則第十七條ノ二丙種第二號
大正十三年關東廳令第四號銃砲火藥類取締規則第二十六條

丙種第二號

第四條　海軍艦政本部長、海軍工廠長、海軍航空廠長、舞鶴要港部工作部長、海軍技術研究所長又ハ海軍火藥廠長前三條ノ規定ニ依ル願書ヲ受理シタルトキハ出願者ノ履歷ヲ審査シ火藥類ノ取扱又ハ當該火藥類ノ製造ニ充分ナル技能ヲ有スル者ト認ムルトキハ證明書（當該規定ノ條項ニ依リ付與スル旨ヲ特記ス）ヲ交付スベシ但シ必要アリト認ムルトキハ適宜ノ試驗ヲ行フベシ

第五條　海軍工廠長、海軍航空廠長、舞鶴要港部工作部長、海軍技術研究所長又ハ海軍火藥廠長ハ前條ニ依ル證明書交付前豫メ交付ニ關シ海軍艦政本部長ニ協議スベシ

【海軍】

●火藥類鐵道運送規程

大正四年十月八日
閣令第一號

改正　大正一二年鐵道省令第一號、昭和五年第二號、七年第一號

火藥類鐵道運送規程左ノ通改正ス

火藥類鐵道運送規程

第一條　鐵道ニ依リ火藥類ヲ運送スル場合ハ本規程ニ依ル

本規程ニ於テ火藥類トハ銃砲火藥類取締ニ關スル法令ニ規定スルモノヲ謂フ

第二條　火藥類ノ荷送人ハ少ク共三十六時間前ニ發送停車場ニ託送ヲ申込ミ其ノ承諾ヲ求ムヘシ

第三條　火藥類ノ荷送人カ銃砲火藥類取締ニ關スル法令ノ規定ニ依リ當該官廳ノ運搬許可證ヲ受クヘキ場合ニ於テハ鐵道係員ハ其ノ許可證ヲ檢閱スヘシ

第四條　火藥類ハ銃砲火藥類取締ニ關スル法令ノ規定ニ依リ容器ニ收納スヘシ但シ軍衙ノ託送ニ係ルモノハ當該軍衙所定ノ容器ニ收納スルコトヲ得

火藥類ハ其ノ容器又ハ包裝ノ外部見易キ所ニ火藥、爆藥若ハ火工品ト朱記シ又ハ朱記シタル標札ヲ附シ且轉輾セシムヘカラサルモノニ在リテハ其ノ旨ヲ明記スヘシ

第五條　火藥類ノ受授ハ貨物掛又ハ驛長ノ外之ヲ爲スコトヲ得ス

火藥類搬入ノ日時、場所及方法ニ關シテハ前項ノ係員ノ指示ニ從フヘシ其ノ搬出ノ日時及方法ニ付亦同シ

第六條　一車以上ノ火藥類ノ運送ヲ引受ケタルトキハ鐵道ハ荷送人ニ對シ附添人ヲ要求スルコトヲ得

附添人ハ火藥類積載ノ貨車ニ乘込ムコトヲ得ス

附添人ノ乘車賃ハ三等旅客運賃ノ定額ヲ超過スルコトヲ得ス

第七條　火藥類ハ木製有蓋貨車ヲ以テ運送スヘシ但シ貨車ノ內部ニ鐵釘、鐵具等ノ突起シタルモノアルトキハ木板、革、布又ハ莚ノ類ヲ以テ之ヲ覆フヘシ

第八條　銃砲火藥類取締ニ關スル法令ノ規定ニ依リ各別棟ノ火藥類貯藏所ニ貯藏スヘキ火藥類ハ之ヲ同一車中ニ積載スルコトヲ得ス但シ火藥類ヲ裝填セサル雷管附又ハ爆管附藥莢ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第九條　火藥類積載ノ重量ハ貨車積載定量ノ三分ノ二ヲ超過スルコトヲ得ス

第十條　火藥類ハ之ヲ他ノ貨物ト同一車中ニ混載スルコトヲ得

【海軍】

ス但シ銃用實包、銃用空包、火藥類ヲ裝塡セサル雷管附若ハ爆管附藥莢、雷管、信管、爆管、門管、緩燃導火線、電氣導火線、導爆線、濕藥（箇内ノ火藥又ハ爆藥ヲ爆發ノ危險ナキニ至ル迄十分濕潤ノ上箇ヲ密閉シ該箇ノ上ニ濕藥ト明記シタルモノ）、芳香系列ノ硝化物若ハ之ヲ主トスル混和物ニシテ起爆劑ヲ附セサルモノ、硝酸アンモン若ハ過鹽素酸アンモンヲ主トスル爆藥中ニトログリセリン又ハニトロセルロースヲ含有セサルモノニシテ起爆劑ヲ附セサルモノ、硝酸アンモンヲ主トスル爆藥中ニトログリセリン又ハニトロセルロースヲ含有スルモ其ノ含有總量百分ノ四以下ニシテ起爆劑ヲ附セサルモノ、煙火、信號焰管、發雷信號、星火ヲ發スル榴彈（十二箇以下ヲ木製容器ニ收納シ摩擦、動搖又ハ衝突ヲ豫防シ得ル樣各箇ノ間ニ麻屑、紙屑ノ類ヲ塡充シタルモノ）、火箭（六箇以下ヲ木製容器ニ收納シ摩擦、動搖又ハ衝突ヲ豫防シ得ル樣各箇ノ間ニ麻屑、紙屑ノ類ヲ塡充シタルモノ）又ハ三十瓲以下ノ爆藥若ハ六瓲以下ノ爆藥（起爆劑ヲ除ク）ニシテ左ノ條件ヲ具備スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

一　容器又ハ包裝ヲ安全堅牢ナラシメ且其ノ外部見易キ所ニ品名ヲ明記シタルトキ

二　他ノ貨車カ容易ニ燃燒シ又ハ爆發ノ誘因トナルヘキ虞ナキモノナルトキ

三　火藥類及混載貨物ノ重量ヲ合シテ貨車積載定量ノ三分ノ二ヲ超過セサルトキ

第十一條　前條ノ規定ニ依リ火藥類ヲ他ノ貨物ト混載シタルトキハ他ノ貨物ト相當間隔ヲ保タシメ又ハ墜落ノ虞ナキ箇所ニ於テ他ノ貨物ノ上積ト爲スヘシ

第十二條　火藥類ハ摩擦、動搖、衝突又ハ轉轢セサル樣緊密ニ積載スヘシ

第十三條　火藥類ノ積卸等ヲ爲ストキハ手鉤類ヲ用ヰ若ハ投下スルコトヲ得ス又衝動ヲ豫防シ得ル樣革、麻布若ハ毛布ノ類ヲ以テ其ノ經過スヘキ場所ヲ覆ヒタルトキノ外之ヲ轉轢スルコトヲ得ス

火藥類ノ積卸ヲ爲ス場所又ハ火藥類積載ノ貨車內ニ於テハ完全燈以外ノ燈火ヲ使用シ燐寸其ノ他發火シ易キ物品ヲ携帶シ又ハ喫煙スルコトヲ得ス

火藥類ヲ取扱フ者ハ鐵釘等ヲ附シタル靴類ヲ穿ツコトヲ得ス

火藥類ノ積卸ヲ爲スニ當リテハ仕業ノ前後其ノ場所及車內ヲ淸掃スヘシ

第十四條　火藥類ノ積卸ハ第十條但書ニ揭ケタル火藥類ヲ除クノ外旅客乘降場ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得ス但シ旅客ヲ搭載シタル客車カ場內ニ在ラサルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十五條　火藥類ハ銃砲火藥類取締法施行規則第十八條各號ノ規定ニ該當スルモノヲ除クノ外日出前及日沒後ニ於テ受授、積卸、荷造又ハ荷解ヲ爲スコトヲ得ス

第十六條　火藥類積載貨車ノ兩側面ニハ見易キ位置ニ白地ニ火藥ト朱記シタル標札ヲ附スヘシ

第十七條　火藥類積載貨車ノ前後ニハ各二輛以上ノ空車ヲ聯結スヘシ但シ不燃質物ヲ積載シタル無蓋貨車又ハ發火ノ虞ナク且燃燒シ易カラサル貨物ヲ積載シタル有蓋貨車ヲ以テ空車ニ代フルコトヲ得

前項ノ適用ニ付テハ「ボギー」車一輛ハ之ヲ二輛ト看做ス

第一項ノ規定ハ第十條但書ノ火藥類ノ積載貨車ニ之ヲ適用セス

第十八條　火藥類積載ノ貨車ハ七輛以下ニ限リ他貨物積載ノ貨車ト同一列車ニ之ヲ聯結スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ前條第二項ノ規定ヲ準用ス

第十九條　火藥類積載ノ貨車ハ旅客列車又ハ混合列車ニ之ヲ聯結スルコトヲ得ス但シ鐵道ノ自用ニ供スル信號用雷管及第十條但書ニ揭ケタル火藥類ノ積載貨車竝之ト他ノ貨物トヲ混載シタル貨車ハ此ノ限ニ在ラス

第二十條　火藥類積載ノ貨車ニ在リテハ制動機ヲ使用スルコトヲ得ス但シ車側制動機ハ此ノ限ニ在ラス

第二十一條　火藥類ハ成ルヘク到達停車場迄直通スル列車ヲ以テ運送スヘシ且已ムコトヲ得サル場合ヲ除クノ外運送中之ヲ他ノ貨車ニ積替フルコトヲ得ス

第二十二條　火藥類ヲ運送スル列車停車スルトキハ特ニ車輛ノ點檢ヲ嚴ニシ危險アリト認ムルトキハ卽時ニ該車輛ヲ解放シテ危險防止ノ處置ヲ爲スヘシ

列車運轉中車軸發熱ノ徵候ヲ發見シタルトキハ其ノ進行ヲ停メテ之ヲ冷却シ又ハ危險ナキ程度ニ於テ徐行シ次ノ停車場ニ到リ前項ノ處置ヲ爲スヘシ

第二十三條　火藥類ヲ運送スル列車二時間以上停車ヲ要スルトキハ成ルヘク隔離シタル線路ニ火藥類ヲ積載シタル貨車ヲ移シ危險防止ノ處置ヲ爲スヘシ此ノ場合ニ於テハ所轄警察官署

又ハ警察官吏ニ之ヲ屆出ツヘシ前條ノ規定ニ依リ車輛ヲ解放シタル場合亦同シ

第二十四條　火藥類積載ノ貨車到達停車場ニ著シタルトキハ直ニ之ヲ荷受人ニ通知スヘシ

荷受人前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ遲滯ナク火藥類ヲ停車場外ニ搬出スヘシ

荷受人カ火藥類積載ノ貨車到著後二時間內ニ火藥類ヲ搬出セサルトキハ鐵道ハ所轄警察官署又ハ警察官吏ニ之ヲ屆出ツヘシ

第二十五條　旅客ハ火藥類ヲ携帶シテ乘車スルコトヲ得ス但シ少量ノ銃用火藥類及緩燃導火線ヲ携帶スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

附　則

本令ハ大正四年十月十日ヨリ之ヲ施行ス

●危險物船舶運送及貯藏規則

昭和九年二月五日
遞信省令第十四號

危險物船舶運送及貯藏規則左ノ通定ム

危險物船舶運送及貯藏規則

第一條　船舶ニ依ル危險物ノ運送又ハ船舶ノ常用危險物ノ貯藏ニ關シテハ本令ノ定ムル所ニ依ル但シ船舶ノ全部ヲ以テ軍事輸送ノ用ニ供スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

船舶ノ常用危險物ノ範圍ニ付テハ開港港則施行規則第十八條ノ規定ヲ準用ス

第二條　本令ニ於テ危險物トハ別表第一號表ニ定ムルモノヲ謂ヒ火藥類トハ同表第一號乃至第八號ニ揭グルモノヲ謂フ

第三條　火藥類ヲ貨車積ノ儘鐵道連絡ノ爲船舶ニ積ミ運送ヲ爲ス場合ニハ第二十一條及之ニ基ク第二十七條ノ罰則ノ規定ヲ除クノ外本令ヲ適用セズ火藥類鐵道運送規程ニ依ル

第四條　危險物ノ荷送人ハ危險物ノ容器及包裝ニ關シテハ別表第二號表ニ定ムル所ニ依ルベシ但シ陸海軍ノ託送ニ係ルモノハ其ノ定ムル所ニ依ルコトヲ得

船長ハ危險物ノ積付ノ方法及場所ニ關シテハ別表第二號表ニ定ムル所ニ依ルベシ

第五條　危險物ノ荷送人ハ危險物ノ容器又ハ包裝ノ外部見易キ所ニ品名（火藥類ニ在リテハ火藥、爆藥、火工品及普通火工品ノ別）ヲ朱記シ又ハ朱記シタル標札ヲ附シ且取扱上ノ注意事項ヲ表示スベシ

第六條　火藥類ハ其ノ容器、包裝及內容ノ表示ニ關シ前二條ノ規定ニ依リタルモノニ非ザレバ之ヲ船積スルコトヲ得ズ

火藥類ノ荷送人ガ銃砲火藥類取締法施行細則ノ規定ニ依リ當該官廳ノ運搬許可證ヲ受クベキ場合ニ於テハ船長ガ其ノ許可證ヲ檢閱シタル後ニ非ザレバ之ヲ船積スルコトヲ得ズ

第七條　危險物ヲ外國ニ於テ船積シ又ハ外國ニ於テ船積シタル危險物ヲ日本ニ於テ積換フルトキハ其ノ容器、包裝及內容ノ表示ニ關シ第四條及第五條ノ規定ヲ適用セズ

第八條　火藥類（普通火工品ヲ除ク）ハ管海官廳ノ許可ヲ受ケ又ハ遞信大臣ノ認定シタル積荷ノ檢定ヲ行フ公益法人ノ檢定ヲ經タルトキニ限リ之ヲ火藥庫以外ノ場所ニ積藏スルコトヲ得

前項ノ許可ヲ受ケントスル者ハ附錄書式ノ申請書二通ヲ船積地ニ在ル管海官廳ニ提出シ當該官廳ノ指定スル所ニ從ヒ手數料ヲ納付スベシ但シ官廳又ハ公共團體ノ申請ニ係ルモノニ付テハ手數料ヲ徵收セズ

手數料ハ當該官吏ノ臨檢一回毎ニ三十圓トス

手數料ハ其ノ金額ニ相當スル收入印紙ヲ手數料納付書ニ貼附シテ之ヲ納付スベシ

手數料ハ申請者ノ都合ニ依リ其ノ申請ヲ取下ゲタルトキト雖モ當該官吏ガ船舶ニ臨檢シタル後ナルトキハ之ヲ徵收ス

第九條　管海官廳ハ前條ノ申請アリタルトキハ當該官吏ヲシテ船舶ニ臨檢セシメ申請ヲ適當ト認ムルトキハ申請書ノ一通ニ許可ノ奥書ヲ爲シ許可ヲ爲シタル年月日及官廳名ヲ記載シ官廳印ヲ押捺シ之ヲ申請者ニ還付ス

第十條　積荷ノ檢定ヲ行フ公益法人第八條第一項ノ認定ヲ受ケントスルトキハ申請書ニ左ニ揭グル事項ヲ記載シタル書面ヲ添附シテ之ヲ遞信大臣ニ提出スベシ

一　積荷ノ檢定ニ關スル規則

二　手數料及旅費ニ關スル規則

三　積荷檢定員ノ氏名及履歷

遞信大臣ノ認定ヲ受ケタル積荷ノ檢定ヲ行フ公益法人積荷檢定員ヲ選任セントスルトキ又ハ前項第一號若ハ第二號ニ揭グル規定ヲ變更セントスルトキハ遞信大臣ノ認可ヲ受クベシ

遞信大臣ハ第八條第一項ノ認定ヲ爲シタルトキ又ハ其ノ認定ヲ取消シタルトキハ之ヲ告示ス

第十一條　甲板ヲ有セザル船舶旅客ヲ搭載スルトキハ火藥類ヲ船積スルコトヲ得ズ

甲板ヲ有スル船舶ト雖モ旅客ヲ搭載スルトキハ雷酸塩（雷汞ノ類）其ノ他ノ起爆劑及爆藥ヲ裝塡シタル火工品ヲ船積スルコトヲ得ズ但シ陸海軍ノ託送ニ係ルモノハ此ノ限ニ在ラズ

第十二條　湖川港內ニ於テ火藥類ノ船積若ハ陸揚ヲ爲ス船舶又ハ火藥類ヲ積藏シ湖川港內ニ於テ航行、碇泊若ハ繫留セントスル船舶ハ船積地、陸揚地、發航地、碇泊地又ハ繫留地ヲ管轄スル警察官署ニ其ノ品名及數量竝ニ其ノ日時及場所ヲ屆出ヅベシ

前項ノ規定ハ船舶ノ常用火藥類ニ付テハ之ヲ適用セズ

第十三條　石油類ヲ積藏スル船舶ハ他ノ船舶、機關室、石炭庫、

〔海軍〕

軸路、旅客室、船員室又ハ料理室等ニ其ノ發生ガスヲ漏洩セシメザル水密隔壁其ノ他ノ設備ヲ有シ且該船舶ノ換氣管ハ二重細目金網製覆ヲ施シタルモノナルコトヲ要ス

石油類ヲ積藏シタル船舶內ノ電線ニハ電流ヲ通ズルコトヲ得ズ但シ船舶設備規程第二百六條ノ規定ニ依ル電氣設備ヲ有スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第十四條　危險物ノ積藏、船積又ハ陸揚中ノ船舶ニ於テハ危險ヲ及ボス俱アル修繕工事ヲ爲スコトヲ得ズ

第十五條　火藥類ハ旅客ノ乘船又ハ下船ト同時ニ船積又ハ陸揚ヲ爲スコトヲ得ズ

第十六條　火藥類ヲ船積、陸揚又ハ荷繰スルトキハ之ヲ投下シ又ハ激突セシムベカラズ

第十七條　銃砲火藥類取締法施行規則第十八條各號ニ揭グル以外ノ火藥類ハ所轄警察官署ノ許可ヲ得タル場合ヲ除クノ外日沒ヨリ日出迄ノ間ニ於テ之ヲ船積、陸揚又ハ荷繰スルコトヲ得ズ

第十八條　危險物ノ船積若ハ陸揚ヲ爲ス場所又ハ之ヲ積藏シタル場所ニ於テハ裸火若ハ燐寸其ノ他發火シ易キ物品ヲ携帶シ、鐵釘ヲ附シタル靴類ヲ穿チ又ハ喫煙スルコトヲ得ズ

第十九條　火藥類及石油類其ノ他可燃ガスヲ發スル危險物ヲ積藏シタル船舶ニ於テハ安全燈ヲ除クノ外懷中電燈其ノ他ノ燈火ヲ使用スルコトヲ得ズ又當該船舶ノ開閉ニ當リ金槌等ヲ使用スル場合ハ火花ヲ發セザル樣適當ナル措置ヲ講ズベシ

第二十條　危險物ノ船積又ハ陸揚作業ヲ中止又ハ完了シタルトキハ直ニ火藥庫又ハ船舶ヲ閉鎖スベシ

第二十一條　銃砲火藥類取締法施行規則第二十八條ノ規定ニ依リ倉庫ニ貯藏スルコトヲ得ベキ數量ヲ超過スル火藥類ヲ積藏スル船舶湖川港內ニ於テ航行、碇泊又ハ繫留スルトキハ晝間ハ赤旗ヲ夜間ハ紅燈一箇ヲ檣頭其ノ他見易キ場所ニ揭グベシ但シ船舶ノ常用火藥類及第二十四條ニ揭グル火藥類ノミヲ積藏スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第二十二條　船舶ニハ其ノ常用外ノ火藥類ヲ貯藏スルコトヲ得ズ但シ業務用トシテ貯藏スル場合又ハ銃砲火藥類取締法施行細則ノ規定ニ依リ繫留船若ハ倉庫船ニ貯藏スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第二十三條　旅客ハ火藥類ヲ携帶シテ乘船スルコトヲ得ズ但シ

〔海軍〕

船長ノ許可ヲ得テ少量ノ銃用火藥類及玩具用普通火工品ヲ携帶スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第二十四條　銃用實包、銃用空包、銃用雷管、爆管、信管、門管、緩燃導火線、濕藥（箱内ノ火藥又ハ爆藥ヲ爆發ノ危險ナキニ至ル迄十分濕潤ノ上箱ヲ密閉シ該箱ノ上ニ濕藥ト明記シタルモノ）、芳香系列ノ硝化物又ハ之ヲ主トスル混和物ニシテ起爆劑ヲ附セザルモノ、硝酸アンモニアヲ主トスル爆藥中ニトログリセリン又ハ硝化纖維素ヲ含有セザルモノニシテ起爆劑ヲ附セザルモノ、煙火及玩具用普通火工品ニハ第十一條及第十五條ノ規定ヲ適用セズ

第二十五條　船長ハ船舶ニ積藏シタル貨物ガ本令ニ違反シタル旨ヲ認ムルトキハ何時ト雖モ證人立會ノ上之ヲ開封シテ檢査スルコトヲ得

第二十六條　管海官廳又ハ警察官署ハ危險物ノ運送及貯藏ニ關シ必要アリト認ムルトキハ何時ニテモ當該官吏ヲシテ船舶ニ臨檢セシメ且危險豫防ノ爲必要ナル處分ヲ爲サシムルコトヲ得

第二十七條　船舶所有者又ハ船長第六條、第十一條乃至第十五條、第十七條、第二十一條又ハ第二十二條ノ規定ニ違反シタルトキハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條　第十八條又ハ第十九條ノ規定ニ違反シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條　第四條、第五條又ハ第二十三條ノ規定ニ違反シタル者ハ三月以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十條　地方長官ハ遞信大臣ノ認可ヲ受ケ船舶ニ依ル危險物ノ運送及貯藏ニ關シ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

附　則

第三十一條　本令ハ昭和九年三月一日ヨリ之ヲ施行ス

第三十二條　明治四十四年四月遞信省令第九號火藥類船舶運送及貯藏規則ハ之ヲ廢止ス

第三十三條　第三十條ニ揭グル規定ニシテ本令施行ノ際現ニ存スルモノハ同條ニ依ル遞信大臣ノ認可ヲ受ケタルモノト看做ス

附錄書式

火藥類火藥庫外積藏許可申請書

一　船種、船名

二　國籍　船籍港

三　船舶所有者名

四　船積港、發航日時及陸揚港

五　積藏火藥類ノ品目及數量

六　積藏場所及其ノ設備

七　積合セ貨物ノ品目及數量

右火藥庫外積藏許可相成度危險物船舶運送及貯藏規則第八條ニ依リ及申請候也

年　月　日

申請人　船舶所有者又ハ船長

住　所（所在地）

氏　名（名稱）

管海官廳宛

〔海軍〕

〔海軍〕

別　表

第一號表

一　雷酸塩類其ノ他ノ起爆劑（雷汞、雷銀、雷酸カドミニウム、窒化鉛、硫化窒素、ヂアゾバークロレート等白色、灰色又ハ黃色樣物質ニシテ爆藥ノ起爆劑ニ應用セラレ爆發力强大ナルモノ）

二　爆藥類ヲ裝塡シタル火工品（爆藥ヲ裝塡シ又ハ加工シタル彈丸又ハ信管類ニシテ摩擦、動搖又ハ衝擊ニ對シ危險度大ナルモノ）

三　硝酸塩混合火藥類（硝石ヲ主劑トセル粉狀、粒狀、扁平、圓柱、六稜等ノ緩性火藥類ニシテ摩擦、動搖又ハ衝擊ニ對シ危險ナルモノ）

四　硝基化合火藥類（硝酸エステル、ニトロ化合火藥類ヲ指稱ジニトログリセリン及之ヲ主トスル爆發藥及綿藥、芳香系列ノ硝化物及之ヲ主トスル混和物等ニシテ各種ダイナマイト類、トリニトロトルオール、トリニトロフェノール、テトリール等之ニ屬ス）

（綿藥又ハニトログリセリンヲ含有スルモノハ自然發火ノ危險アルヲ以テ温度及通風ニハ特ニ注意ヲ要スベキモノ）

五　塩素酸塩爆藥　（スプレンゲル氏火藥、塩斗藥等ニシテ自然發火ノ危險アルヲ以テ温度及通風ニ注意ヲ要スベキモノ）

六　過塩素酸塩爆藥　（カリソナイト、カーリツト等）

第十七類　銃砲火藥取締

七　火工品　（爆薬ヲ裝塡又ハ加工シタル火工品中比較的安全ナルモノニシテ雷管、爆管、門管、銃用實包、銃用空包等）

八　普通火工品　（緩燃導火線、發雷信號、信號炮管、星火ヲ發スル榴彈、火箭等ノ煙火類似品、打上煙火、ベンガリー煙火、線香花火等ノ玩具用普通火工品）

九　塩素酸塩類　（塩素酸カリ、塩素酸ソーダ、塩素酸バリウム等ニシテ無色結晶体ヲ成シ酸化力極メテ強ク分解スルトキハ酸素ガスヲ多量ニ放出シ衝撃又ハ摩擦ニ因リ發火シ他ノ可燃体ト混ズルトキハ其ノ程度特ニ著シキモノ）

十　過塩素酸塩類　（過塩素酸アンモン、過塩素酸カリ、過塩素酸ソーダ等ニシテ白色結晶体ヲ成シ其ノ性質塩素酸塩類ニ同ジ）

十一　ニトロ染料類　（ピクリン酸ノ如ク爆發性ヲ有スルモノ）

十二　黄燐類　（帶黄白色蠟狀物質ニシテ空氣ニ接スル時ハ黄綠色ノ焔ヲ發スル有毒物）

十三　金屬ナトリウム　（銀白色ノ軟金屬ナリ水ニ接スルトキハ反應強烈ニシテ燃燒シ苛性ソーダヲ生ズルモノ）

十四　金屬カリウム　（銀白色ノ軟金屬ナリ水ニ接スルトキハ反應強烈ニシテ燃燒シ苛性カリヲ生ズルモノ）

十五　燐化カルシウム　（黄燐、石灰、木炭ヲ原料トシテ製造シタル褐色固体ニシテ水ニ接スルトキハ燐化水素ヲ生ジ自然發火スルモノ）

十六　硫化燐　（白色又ハ黄色結晶様物質ニシテ硫黄ヲ含有スルヲ以テ自然發火スルモノ）

十七　過酸化ソーダ　（帶黄色ノ粉末ニシテ空氣中ノ濕氣ヲ吸收發熱シ有機質ノ混在ニ因リ發火スルモノ）

十八　過酸化バリウム　（白色ノ粉末ニシテ空氣中ノ濕氣ヲ吸收發熱シ有機質ノ混在ニ因リ發火スルモノ）

十九　カーバイド　（白色又ハ灰色ノ塊狀ヲ成シ濕氣ニ接スルトキハ非常ニ燃燒シ易キアセチレンガスヲ發生スルモノ）

二十　晒粉　（塩素ガスヲ消石灰中ニ吸收セシメタル白色粉末ニシテ團塊ヲ成スコトアリ塩素類ニ類似セル强烈ナル刺戟性ノ臭氣トガスヲ發散スルモノ）

二十一　マグネシウム粉末　（銀色粉末ニシテ空氣中ノ濕氣ヲ吸收シテ發熱シ自然發火スルモノ）

二十二　ニトロセルローズ及其ノ製剤　（ニトロセルローズハセルロイド、コロヂオン等ノ原料ニシテ植物纖維素ヲ濃厚硝酸、硫酸混液ニ因リ硝化セルモノヲ謂ヒ燃燒極メテ早ク摩擦又ハ日光等ニ依リ發火ス）

【海軍】

（其ノ製劑コロヂオンハニトロセルローズヲアルコール、エーテルノ混和液又ハアセトンニ溶解セル無色透明粘稠ノ液ニシテ容易ニ引火シ燃燒スルモノ）

二十三　セルロイド　（無色透明ナルモノアリ樟腦ノ香氣ヲ有シ彈力アル固体ニシテ燃燒シ易キモノ）

二十四　硝石類　（硝石、智利硝石等ニシテ白色結晶体ヲ成シ酸化力强ク容易ニ酸素ヲ放出シ發火スルモノ）

二十五　油紙油布類　（亞麻仁油等ノ乾燥性油ニ不乾燥性油及動植物油ヲ混ジ塗布シタル防水紙又ハ防水布ニシテ油類ノ自己酸化ニ因リ發火スルモノ）

二十六　酸類

發煙硫酸　（硫酸中ニ無水亞硫酸ヲ吸收セシメタルモノニシテ硫酸ニ比シ危險度高キモノ）

强硫酸　（油狀ノ液ニシテ酸化力强ク有機質、無機質ヲ酸化シ高熱ヲ生ジ自然發火スルモノ）

發煙硝酸　（硝酸中ニ次硝酸ヲ吸收セシメタルモノニシテ硝酸ニ比シ危險度高キモノ）

强硝酸　（無色又ハ黄褐色ノ液ニシテ强キ酸性ヲ有シ有機質ヲ酸化シ自然發火スルモノ）

二十七　二硫化炭素　（無色又ハ黄褐色ノ液体ニシテ揮發シ易ク不快臭アリ空氣ト混ズルトキハ爆發性ヲ有シ攝氏零下二十度ニ於テ引火スルモノ）

二十八　石油類　第一種石油、第二種石油（未製石油及其ノ蒸溜殘物又ハ變成石油ニシテアペール又ハペンスキー閉鎖發焰試驗器ヲ用ヒ七百六十ミリメートルノ氣壓ニ於テ攝氏二十一度未滿ノ溫度ニテ發焰スルモノヲ第一種石油トシ二十一度以上七十度未滿ノ溫度ニテ發焰スルモノヲ第二種石油トス）

二十九　可燃性液体類　（エーテル、メタノール、ベンゾール、トルオール、ソルベントナフサ、アルコール、アセトン、キシロール、テレビン油、アミールアルコール、ブチールアルコール、芳香系列ノ炭化水素等）

三十　壓縮ガス及液化ガス類　アセチレンガス　（カーバイドニ水ヲ作用セシメテ生ズル無色ガスニシテ爆發シ易キモノ）

油ガス　（石油類ヲ分解シテ得ラル下級炭化水素ヲ含有スルモノニシテ燈用ガスナリ）

水素ガス　（無色無臭ノ輕キガスニシテ酸素ト混合スルトキハ爆發スルモノ）

硫化水素ガス　（硫化物ニ酸ヲ作用セシメテ得ラルルモノニシテ空氣又ハ酸素ト混合シタル場合火氣ヲ近ヅクルトキハ容易ニ爆發スルモノ）

一酸化炭素ガス　（炭素ノ不完全燃燒ニ因リ生ズルモノニシテ酸素又ハ空氣ト混合シ火花ニ依リ爆發スルモノ）

石炭ガス　（石炭ヲ乾溜シテ得ラルルガスニシテ空氣中百分ノ八乃至二十三ヲ混ズルトキハ爆發性ヲ具備スルモノ）

天然ガス　（石油地帶等ニ天然ニ噴出スルガスニシテ空氣ト混ズルトキハ爆發スルモノ）

亞硫酸ガス　（無色ニシテ稍臭氣アリ燃シタル金屬類ヲガス中ニ投ズルトキハ發火スルモノ）

アンモニアガス　（特有ノ刺戟臭アルモノニシテ塩素ガス又ハ沃度ト混ズルトキハ爆發スルモノ）

塩素ガス　（刺戟臭ヲ有スル重キ黃色ガスニシテ腐蝕性大ナルモノ）

酸素ガス　（無色ニシテ化合力強キモノ）

窒素ガス　（無色ニシテ化合力弱キモノ）

炭酸ガス　（無色ニシテ僅カニ刺戟性アリ消火力大ナルモノ）

亞酸化窒素ガス　（無色無臭可燃性ニシテ水素ニ混ズルトキハ引火爆發スルモノ）

第二號表

番號	類名	品名	容器	包裝	積付ノ方法及場所
一	雷酸塩類其ノ他ノ起爆劑	雷汞 窒化鉛	雷酸塩類ハ清水ヲ滿タセルゴム蓋附硝子器ニ收納スルカ其ノ他ノ起爆劑ハ亞鉛、銅、アルミニウム、ブリキ製等ノ纏、厚紙箱、布袋、紙袋、木箱、ファイバー器等ニ收容シ內容物ノ動搖ヲ豫防シ密封ス	木製容器ニ收容シ摩擦、動搖又ハ衝撃ヲ豫防シ得ル樣適當ノ方法ヲ講ズ	火藥庫ニ積藏スルコト
二	爆発類ヲ裝塡シタル火工品	彈丸、信管	第一號ニ揭グル其ノ他ノ起爆劑ニ同ジ但シ形狀ノ巨大ナルモノニ在リテハ震撼、衝撃ヲ豫防シ得ル樣方法ヲ講ズ	木箱又ハ之ト同等以上ノ强度ヲ有スル金屬纏、ファイバー製箱ニ收容シ內容物ノ動搖ヲ豫防シ得ル樣適當ノ處置ヲ施ス	右ニ同ジ
三	硝酸塩混合火藥類	黑色有煙火藥 褐色有煙火藥	亞鉛、銅、アルミニウム、ブリキ製等ノ纏、厚紙箱、布袋、紙袋、木箱、ファイバー器等ニ收容シ內容物ノ動搖ヲ豫防シ得ル樣適當ノ處置ヲ施ス	木箱又ハ之ト同等以上ノ强度ヲ有スル金屬纏、ファイバー製箱ニ收容シ內容物ノ動搖ヲ豫防シ得ル樣適當ノ處置ヲ施ス	右ニ同ジ
四	硝基化合火藥類	綿藥	黑色有煙火藥ニ同ジ但シ水蓄セルモノハ漏水セザル樣金屬纏ニ收容ス	黑色有煙火藥ニ同ジ	右ニ同ジ
		無煙火藥	黑色有煙火藥ニ同ジ	黑色有煙火藥ニ同ジ	右ニ同ジ

		ダイナマイト類	紙包ト爲シ内箱ニ納ム但シ硝酸アンモン等吸濕性强キモノハ防水紙等ヲ以テ密容シ防濕ノ上内箱ニ收容ス	右ニ同ジ	右ニ同ジ
		ピクリン酸其ノ他芳香系列ノ硝化物	黑色有煙火藥ニ同ジ但シピクリン酸ノ如ク金屬ト化合シテ爆發性塩類ヲ合成スルモノニ在リテハ作用セザル金屬ヲ採用スルコト	右ニ同ジ	右ニ同ジ
五	塩素酸塩爆藥	スプレンゲル氏火藥ノ類	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ
六	過塩素酸塩爆藥	カーリット	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ
七	火工品	雷管、爆管、門管	内容物ノ動搖ヲ豫防シ得ル樣適當ノ處置ヲ施シ内箱ニ納ム	右ニ同ジ	右ニ同ジ 火藥類ヲ裝塡セザル雷管附又ハ爆管附藥莢ニ付テハ火藥庫ニ積藏セザルコトヲ得
八	普通火工品	綏燃導火線、煙火、煙火類似品及玩具用普通火工品	内容物ノ動搖ヲ豫防シ得ル樣適當ノ處置ヲ施シ木箱ニ納ム		
九	塩素酸塩類	塩素酸カリ 塩素酸ソーダ 塩素酸バリウム	完全ナル罐詰ト爲ス但シ塩素酸カリハ罐詰ト爲サザルコトヲ得	木樽又ハ木箱入トス	中甲板又ハ上甲板積ト爲スコト
十	過塩素酸塩類	過塩素酸カリ 過塩素酸ソーダ 過塩素酸アンモン	完全ナル罐詰ト爲ス但シ過塩素酸カリハ罐詰ト爲サザルコトヲ得	右ニ同ジ	右ニ同ジ
十一	ニトロ染料類	ピクリン酸	陶器、磁器、純錫器、純アルミニウム器、硝子器、木器等ニ收容シ完全ナル罐詰ト爲ス	右ニ同ジ	上甲板積ト爲スコト
		ヂニトロナフタリン	完全ナル罐詰ト爲ス	右ニ同ジ	成ルベク中甲板積ト爲スコト

〔海軍〕

十二	黃燐類	黃燐	正味五百瓦未滿ノ場合ハ水ヲ充タセル硝子壜ニ入レ石膏、封蠟ノ類ニテ嚴封ス	木箱ニ入レ壜ノ周圍ニ鋸屑、鉋屑、細砂、藁ノ類ヲ塡充ス	上甲板積ト爲スコト
			正味五百瓦以上ノ場合ハ水ヲ充タセル罐ニ入レ嚴封ス但シ一罐ノ正味二十五瓩ヲ超ユルコトヲ得ズ	完全ナル木箱入トス	
十三		金屬ナトリウム	石油類ヲ入レタル硝子壜又ハブリキ罐ニ入レ密封シ更ニ完全ナル罐ニ嚴封ス	完全ナル木箱入トス	右ニ同ジ
十四		金屬カリウム	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ
十五		燐化カルシウム	共口硝子壜ニ入レ石膏、封蠟ノ類ニテ密封シ更ニ之ヲブリキ罐ニ納メ其ノ間隙ニハ鋸屑、鉋屑、藁ノ類ヲ塡充シ蓋ノ合目ハ目張ヲ施ス	木箱ニ入レ鋸屑、鉋屑、藁ノ類ニテ塡充ス	中甲板其ノ他容易ニ取出シ得ベキ通風良好ナル場所ヲ選ビ且水又ハ濕氣トノ接觸ヲ防止スルコト 他ノ貨物ノ下積ト爲サザルコト
十六	硫化燐	三硫化燐 五硫化燐	完全ナル罐詰ト爲ス	木樽又ハ木箱入トス	上甲板積ト爲スコト
十七		過酸化ソーダ	正味五百瓦未滿ノ場合ハ共口硝子壜ニ入レ石膏、封蠟ノ類ニテ密封シ又ハ完全ナルブリキ罐詰トス 正味五百瓦以上五瓩未滿ノ場合ハ完全ナルブリキ罐詰トス 正味五瓩以上ノ場合ハドラム入トス	木箱ニ入レ壜ノ周圍ニ不燃性物質(白墨粉、滑石粉、石炭殼篩粉、粘土、土砂、灰ノ類)ヲ塡充シ又ハ罐ト密著セルブリキ張木箱トス	成ルベク汽機、汽罐室等熱氣アル場所ニ接近セシメザルコト
十八		過酸化バリウム	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ
十九		カーバイド	ブリキ製又ハ鐵製ノ罐ニ入レ嚴封シ繩掛ト爲ス		中甲板其ノ他容易ニ取出シ得ベキ通風良好ナル場所ヲ選ビ且水又ハ濕氣トノ接觸ヲ防止スルコト

〔海軍〕

二十		晒粉		遠距離ノ熱帶航海ニ於テハ鉛板ヲ以テ內張セル木箱又ハ陶製容器トス	他ノ貨物ノ下積ト爲サザルコト
二十一		マグネシウム粉末	正味五百瓦未滿ノ場合ハ硝子壜ニ入レ密封ス 正味五百瓦以上ノ場合ハブリキ罐ニ入レ嚴封ス	木箱ニ入レ壜ノ周圍ニ藁ノ類ヲ塡充ス 罐ト密著セル木箱入トス	日光ヲ遮蔽シタル場所ニシテ濕氣ナキ通風良好ナル場所ヲ選ブコト 船室ニ接近シテ積藏セザルコト 汽機、汽罐室等熱氣アル場所ニ接近セシメザルコト
二十二		ニトロセルローズ及其ノ製劑	樽又ハ桶ニ入レ完全ニ水漬ケシ嚴封ス又ハ適當ニ水分ヲ含マシメ之ヲパラフイン紙ニテ包裝シ木箱ニ納メ板ノ繼目ハブリキ板ニテ目張ヲ施ス		水又ハ濕氣トノ接觸ヲ防止スルコト
二十三		セルロイド（素地及フイルムニ限ル）	堅牢ナル木製容器入トス		成ルベク中甲板積ト爲スコト
二十四	硝石類	硝酸カリ	硝子壜ニ入レ嚴封ス 木箱、木樽又ハドラム入トス	木箱ニ入レ壜ノ周圍ニ鋸屑、鉋屑、藁ノ類ヲ塡充ス	他ノ貨物ノ下積ト爲サザルコト
		智利硝石	撒積ノ場合ヲ除クノ外內容品ノ露出セザル二重ノ麻袋入トス		
二十五	油紙油布類			枠箱又ハ筵包ト爲ス等內部ノ通氣ヲ阻害セザルコト	成ルベク上甲板積ト爲スコト 船艙內ニ積藏スル場合ハ容易ニ接近シ易キ冷所ニ積藏スルコト

〔海軍〕

二十六		酸類	壜詰トシ石膏、封蠟ノ類ニテ密封ス アルミニウム製又ハ不銹銅製ドラム入トス	木箱ニ入レ壜ノ周圍ニ鋸屑、鉋屑、藁ノ類ヲ塡充ス	上甲板積又ハ中甲板積ト爲スコト 他ノ積合セ貨物ナキ場合ニ於テハ下艙ニ積藏スルコトヲ得ルコト 通風良好ナル冷所ヲ選ブコト
二十七		二硫化炭素	厚サ約〇・三二（三十番）以上ノ鐵板ニテ製シタル二十五立未滿ノ容器ニ入レ嚴封ス	罐ト密著セル木箱入トス	上甲板積ト爲スコト 日光、燈火、火花等ヲ避クル爲帆布ヲ以テ覆ヒスチームパイプ、煙突等有熱物ニ接近セシメザルコト
二十八		石油類	油槽ニ積藏スル場合ヲ除クノ外ドラム又ハブリキ罐ニ入レ嚴封ス	罐ト密著セル木箱入トス 沿海區域ニ於テ小量ヲ運送スル場合ニ限リ繩掛ケ裸罐ト爲スコトヲ得	汽罐室、料理場、石炭庫、旅客室及船員室等火氣アル場所ニ接近シテ積藏セザルコト 裸罐ヲ幾層ニモ積上ゲ又ハ他ノ貨物ノ下積ト爲サザルコト 木箱入ナルト裸罐ナルトヲ問ハズ横積ト爲シ又ハ容器ヲ不平均ニ壓スルガ如キ積付ヲ爲サザルコト
二十九	可燃性液体類	可燃体類	右ニ同ジ	右ニ同ジ	右ニ同ジ
三十	壓縮ガス及液化ガス類	炭酸ガス酸素ガス等	ガス注入前耐壓力ヲ試驗シタル砲彈型鐵器（ボンブ罐）ニ入レ口ヲ螺旋廻栓ニテ密封シ其ノ上ヲ螺帽ニテ被覆ス但シ液化炭酸ガスノ容器、螺旋、廻栓ノ外部ニ突出セザル容器及五立未滿ノ容器ニ在リテハ螺帽	（イ）木枠入トス（直徑六・六糎以上ノ丸太ヲ二ツ割ト爲シタルモノ四本ヲ組合セ其ノ兩端ハ厚サ一・五糎以上ノ板片ヲ十字形ニ釘附シタルモノ若ハ枠ノ形狀ニ相當スル底板ヲ當テタルモノ又ハ帶	通風良好ナル冷所ニ積藏スルコト 日光ニ曝露セシメザルコト

〔海軍〕

	ヲ使用セザルコトヲ得
	鐵、繩ノ類ヲ以テ十分緊締シタルモノ）
	(ロ)堅牢ナル木箱入トス
	(ハ)ボンブ罐入ノ帽蓋ノ周圍ニ外徑ハ罐ノ胴丸、內徑ハ帽蓋ノ外徑、高サハ帽蓋ノ高サニ等シキ木又ハ柔軟物製ノ環狀物ヲ挿入シテ帽蓋ヲ完全ニ固定シ向之ノ徑〇・九糎以上ノ麻繩ヲ以テ作リタル網袋（目ノ太サ四・五四糎平方以下ノモノ）又ハ籐製ノ籠ニ入レ其ノ口ヲ緊縛スル

備考

一　火藥類以外ノ危險物ニ付テハ事情ニ應ジ本表ニ定ムル事項ニ適當ナル變更ヲ加フルコトヲ妨ゲズ

二　本表ニ揭グル火藥庫ニハ持運式火藥庫ヲ包含ス

三　火藥類ノ積藏ニ付テハ左ノ各號ニ依ルベシ

(イ)　艙口ヨリ容易ニ接近シ得ル場所ナルコト

(ロ)(ハ)　燃燒シ易キ貨物其ノ他爆發ノ誘因トナルベキ惧アル貨物ニ接近セシメザルコト

外板ニ接觸セル場所、震動ヲ受クル場所及旅客室、船員室、油槽、機關室、蓄電池、發電機、石炭庫、料理室其ノ他火氣又ハ熱氣アル場所ヲ避クルコト

(ニ)(ホ)　他ノ貨物ノ下積トナサザルコト

露出セル鐵類トノ接觸ヲ避クルコト

四　銃砲火藥類取締法施行細則ノ規定ニ依リ別棟ノ火藥類貯藏所ニ貯藏スベキモノハ之ヲ同一ノ火藥庫又ハ船艙ニ積藏スベカラズ

〔海軍〕

甲板ナキ船舶ニ在リテハ前項ノ火藥類ヲ同一船舶ニ積藏スベカラズ

五　船舶ノ常用火藥類ハ木製ノ箱ニ容レ且容易ニ取出シ得ベキ安全ナル場所ニ之ヲ貯藏スベシ

六　火工品中安全實包及安全空包ハ火藥類ヲ裝塡セザル雷管附又ハ爆音附藥莢ト同一ノ取扱ヲ爲スコトヲ得

七　塩素酸カリ、塩素酸ソーダ、ニトロ染料、黃燐、金屬ナトリウム、金屬カリウム、燐化カルシウム、硫化燐及過酸化バリウムハ易燃性又ハ可燃性物質トノ積合セヲ避クベシ

八　カーバイド、マグネシウム粉末、ニトロセルローズ其ノ他ノ製劑、セルロイド、硝石類、油紙油布類、酸類、石油類及可燃性液体類、壓縮ガス及液化ガス類ハ自然發火ヲ爲シ易キ物質トノ積合セヲ避クベシ

〔海軍〕

●銃砲火藥類所持者屆出ノ件

昭和七年四月四日
官房第一二三一號

海軍軍人及軍屬ニシテ銃砲、火藥類ヲ所持スル者ハ別紙樣式ニ依リ所轄長ヲ經テ所屬長官ニ屆出デ所屬長官ハ之ヲ海軍大臣ニ報告スベシ

銃砲、火藥類所持者ニシテ之ヲ所持セザルニ至リタルトキ又ハ前項ノ屆出事項中變更アリタルトキハ前項ノ規定ヲ準用ス

銃砲、火藥類所持者ニシテ所屬ヲ轉ジタルトキハ更ニ別紙樣式ニ依リ新所轄長ニ屆出デ所轄長ハ之ヲ所屬長官ニ報告スルモノトス

（樣式）

昭和　年　月　日

所屬長官（所轄長）宛

銃砲火藥類所持ノ件屆出

所持者　官職氏名㊞

銃砲ノ種類型式、番號	
銃砲ノ數量	
彈藥ノ種類、數量	
入手ノ經路、年月日、場所、販賣者、仲介者氏名等	
銃砲火藥類取締法、同施行規則ニ依ル手續履歷ノ有無、許可證ノ發行警察官廳、發行日附、番號等	
備考	（前記以外ノ事項ニシテ屆出ヅルヲ要スト認ムル事項ヲ記入ス）

〔海軍〕

第十八類　運輸通信　氣象

第十八類　運輸　通信　氣象

第一款　運　輸

●海上運輸規程

昭和二年六月二十二日
達第八十五號

改正　昭和四年第九號

海上運輸規程左ノ通定ム

大正三年達第九十三號海運取扱規程ハ之ヲ廢止ス

海上運輸規程

總　則

第一條　本規程中海軍運送艦船ト稱スルハ運送艦及特設運送船ヲ謂フ

第二條　軍港要港出征地其ノ他諸要地間ノ海軍運送艦船ヲ以テスル輸送ハ本規程ニ依リ取扱フモノトス

海軍各部ニテ臨時徵傭セル部外船舶ニ於ケル輸送ノ取扱ハ本規程ヲ準用ス

第三條　海軍大臣ハ每會計年度輸送計畫ヲ定メ之ニ從事スル運送艦船ノ行動ヲ概定シ軍務局長ヲシテ所屬鎭守府ニ通牒セシム

戰時事變又ハ臨時輸送ニ從事スル運送艦船ノ任務行動ハ其ノ都度軍務局長ヲシテ通牒セシム

第四條　鎭守府司令長官ハ前條ノ通牒ニ基キ所屬運送艦船ノ行動ヲ豫定スベシ

前條以外ノ輸送任務ニ就テハ特令ナキ限リ豫メ軍務局長ト協議スルモノトス

第五條　港務部軍需部及關係各部ハ輸送業務ヲ迅速確實且經濟的ニ實施スル爲互ニ氣脈ヲ通ジ又其ノ業務ニ關スル事項ニ就テハ港務部ニ於テ研究調査ヲ爲スモノトス

第六條　港務部長及軍需部長ハ輸送上必要アル場合ハ所在艦船部隊ノ長ト協議シ所屬長官ノ承認ヲ經テ所要ノ援助ヲ受クルコトヲ得

輸　送

第七條　海軍各部ニ於テ人員又ハ軍需品（燃料ヲ除ク）等ヲ輸送セントスルトキハ人員ニ在リテハ人員輸送請求票（第一號書式）ニ人名表ヲ附シ四通ヲ、軍需品（燃料ヲ除ク）等ニ在リテハ物品輸送請求票（第二號書式）四通ヲ調製シ所在若ハ最寄港

務部ニ請求スベシ

請求票ハ輸送先地受領者毎ニ別ニ調製スルモノトス

部外ノ物件ニシテ海軍大臣輸送方ヲ認許シタルモノノ取扱ハ右ニ準ズ

第八條　港務部ハ前條ノ請求ヲ受ケタルトキハ調査ノ上搭載表（前條ノ請求票ヲ以テ之ニ充ツ）ヲ調製シ所屬長官ノ承認ヲ經テ速ニ請求者、當該運送艦船及輸送先地ノ港務部若ハ防備隊等ニ送付スベシ

第九條　海軍各部ニ於テ燃料ヲ輸送セントスル時ハ燃料輸送請求票（第二號書式）一通ヲ調製シ軍務局長ニ請求スベシ

第十條　軍務局長ハ前條ノ請求ニ基キ輸送計畫ヲ定メ燃料輸送票（第四號書式）ニ依リ輸送ニ從事スベキ運送艦船ノ所屬長官ニ通牒スベシ

但シ第三條ニ依ル通牒ヲ以テ本條ノ通牒ニ代フルコトヲ得

第十一條　港務部ト遠隔ノ地ニ在ル艦船部隊等ニシテ人員又ハ軍需品（燃料ヲ除ク）等ヲ輸送スル必要アル場合ニ於テ豫メ港務部ニ請求スルノ遑ナキトキハ直接運送艦船ニ之ヲ請求スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ事後之ヲ港務部ニ通報スルヲ要ス

運送艦船前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ主要任務遂行上支障無キ限リ之ニ應ズベシ

第十二條　患者輸送ノ場合ニハ輸送請求者ハ傳染病、精神病、外傷、內科的疾病、外科的疾病及性病ニ分チ尙之ヲ重輕症ニ區別シ附添看護人ノ有無員數ト共ニ人員輸送請求票ニ附記スベシ

附添人ヲ要スル患者ニハ輸送請求者ニ於テ成ルベク之ヲ附スルモノトス囚人刑事被告人押送者ヲ輸送スル場合亦同ジ

第十三條　輸送物品ノ荷造等ニ關シ左記各號ヲ嚴守スベシ

一、包裝ヲ堅固ニス

二、重量及大サヲ適度ニシ取扱ニ便ナラシム

三、梱包ハ各品名、發送元、屆先ヲ明瞭ニ記シタル堅牢ナル標札二個以上ヲ緊著シ尙爲シ得レバ包裝表面ニ明記ス

四、保存法ヲ異ニスル物品ハ包裝ヲ別ニスルコト

五、軍機圖書類又ハ貴重品等ニ在リテハ特ニ包裝其ノ他取扱上注意スルヲ要ス

六、彈藥火工品其ノ他發火ノ虞アルモノハ特ニ明瞭ニ其ノ品名ヲ朱記ス

七、上下轉倒等ヲ許サザルモノニ在リテハ其ノ旨朱記ス

八、油紙油布等發火ノ虞アル物ヲ以テ內部ヲ包裝シタルモノニシテ其ノ內容品危險物ニ非ザルトキハ油紙包裝油布包裝等ト朱記ス

九、濕潤乾燥ノ虞アルモノ腐敗若ハ破壞シ易キモノ其ノ他積載上特ニ注意ヲ要スルモノニ在リテハ其ノ旨ヲ明瞭ニ標記ス

第十四條　港務部及運送艦船ハ輸送物品ノ包裝不完全ニシテ輸送中破損ノ虞アリト認メタルモノハ其ノ改裝若ハ補修ヲ輸送請求者ニ要求シ又ハ部外運送業者等ヲシテ之ヲナサシムルコトヲ得此ノ場合其ノ費用ハ輸送請求者若ハ受領者ヲシテ支辨セシムルモノトス

第十五條　人員又ハ軍需品等ノ積卸ハ港務部（燃料ニ在リテハ軍需部又ハ軍需支部）及運送艦船ノ監督ノ下ニ輸送請求者又ハ其ノ受領者之ヲ行フモノトス但シ港務部ハ運送艦船ト協議ノ上（燃料ヲ搭載セル場合ハ軍需（支）部ト協議ノ上）積卸ノ期日及順序ヲ指定シ要スレバ積卸ヲ擔任スベシ

第十六條　運送艦船輸送物件搭載ヲ了シタル時ハ輸送請求者ニ領收票（請求者ノ所持スル搭載表ニ裏書シテ領收票ト爲ス）ヲ交付シ右物件ヲ輸送先ニ引渡シタルトキ亦領收票（運送艦船ノ所持スル搭載表ニ裏書セシメテ領收票ト爲ス）ヲ徵シテ授受ヲ明カニスベシ

第十六條ノ二　物件ノ運輸中生ジタル損害ニ對シテハ運輸取扱者ノ故意ニ因ル場合ヲ除クノ外海軍ハ別段ノ意思表示ヲ爲サザル限リ其ノ責ニ任ゼザルモノトス

第十七條　左記各號ノ者ハ必要ニ應ジ許可ヲ得テ運送艦船ニ便乘スルコトヲ得

一、現役（未入營者及歸休中ノ者ヲ除ク）又ハ在職中ノ海軍軍人（召集ヲ命ゼラレタル豫備役後備役ノ者及簡閱點呼ニ參會ヲ令セラレタル者ヲ含ム）軍屬及其ノ家族

従者

二、海軍職工及其ノ家族

三、海軍所管官役人夫

四、右ノ外海軍大臣、司令長官、司令官ニ於テ特ニ認許シタル者

家族トハ民法ノ定ムル所ニ依ル

從者ハ一家族毎ニ二名以內之ヲ隨伴スルコトヲ得

老人及婦女子ニハ相當ノ保護者ヲ附スルヲ例トス

第十九條　便乘者ハ自ラ運搬シ得ル程度以上ノ手荷物ヲ携帶スルヲ許サズ但シ特別ノ理由アルモノハ港務部ノ許可ヲ受クベシ

第二十條　被輸送者（便乘者ヲ含ム）ハ艦船内ニ在リテハ諸規則ヲ遵守シ居室食卓其ノ他ニ關シ運送艦船指揮官又ハ船長ノ指示命令ニ從フベシ

第二十一條　運送艦船指揮官又ハ船長ハ被輸送者ニシテ規則ヲ遵守セズ又ハ命令ニ從ハザルモノアルトキハ要スレバ之ヲ下船セシメ又ハ上陸ヲ禁止シテ乘船地ニ送還スル等適宜ノ取締方法ヲ講ズルコトヲ得

但シ監督官乘船シアル場合ハ船長ハ取締方法ニツキ豫メ其ノ許可ヲ受クルヲ要ス

第二十二條　運送艦船指揮官又ハ船長ハ已ムヲ得ザル事情アルトキハ便乘券所持者ト雖乘船ヲ許可セザルコトヲ得

第二十三條　左記各號ノ私有荷物及之ニ宛テ追送スルモノハ運送艦船ニ託送スルコトヲ得

一、現役又ハ在職中ノ海軍軍人（召集ヲ令セラレタル豫備役後備役ノ者及補闕點呼ニ參會ヲ命ゼラレタル者ヲ含ム）軍屬

二、海軍職工及官役人夫

私有荷物託送請願者ハ願書（第二號書式）四通ヲ調製シ所在若ハ最寄港務部ニ出願スベシ但シ判任官二等以下ノ軍人軍屬及職工ニ在リテハ所轄長官役人夫ハ使役廳長　遠隔ノ地ニ在ル場合ノ外之ヲ經由スルヲ要ス

第二十四條　港務部ハ前條ノ私有荷物託送請願ヲ受ケタルトキハ調査ノ上運送艦船ノ任務上差支ナキ限リ之ニ應ズルモノトス

港務部及運送艦船ハ必要ト認ムルトキハ私有荷物ノ梱包ヲ解キ内容ヲ檢査スルコトヲ得

動植物等ノ託送ハ適當ノ保護者アルニ非ザレバ之ヲ許可セザルモノトス

第二十五條　給糧艦船給水艦船等艦船内ニ於テ特ニ衛生上ノ注意ヲ要スルモノニハ便乘者、私有荷物等ヲ搭載セザルヲ例トス

第二十六條　第十一條乃至第十六條ハ便乘者及私有荷物ノ輸送ニ適用ス

經　理

第二十七條　部外ヨリノ依託ニヨリ運送艦船ヲ以テ物件ヲ輸送スル場合ハ別ニ定ムル處ニ依リ積卸及輸送ニ要スル費用ヲ徴收スルモノトス

第二十八條　特設運送船ニ在リテハ船長ハ被輸送者ノ糧食供給ヲ擔任スルモノトス

第二十九條　第十五條但書ノ場合及便乘者又ハ私有荷物ノ積卸ノ爲特ニ港務部又ハ運送艦船ニ於テ費用ヲ要シタルトキハ之ヲ便乘者又ハ荷物託送者若ハ其ノ受領者ヲシテ支辨セシムベシ

第二十四條第二項ノ場合又ハ稅關檢査等ノ爲開包再包スル場合亦前項ニ同ジ

報告及通報

第三十條　海軍省各局艦政本部航空本部水路部各鎭守府要港部ハ毎年度輸送ヲ要スル人員及主要物件ヲ調査シ輸送見込調（第七號書式）ヲ調製シ（自四月至十一月）モノハ二月十五日迄ニ（自十月至五月）モノハ八月十五日迄ニ軍務局長ニ通報スベシ

輸送物件無キ向ハ其ノ旨通報スベシ

第三十一條　前條ノ海軍各部ハ毎月十日迄ニ翌月以降三ケ月間

ニ發送スベキ主要人員物件ヲ調査シ第八號書式ニヨリ軍務局長ニ通報シ軍務局長ハ之ヲ取纏メ所要ノ向ニ通報スルモノトス

第三十二條　運送艦船ノ行動豫定ハ海軍公報及鎭守府公報ニ掲載シ部内一般ニ公示ス

第三十三條　所屬長官ハ運送艦船ノ行動ヲ豫定シタルトキハ速ニ之ヲ海軍大臣ニ報告シ尙港務部長ヲシテ運送艦船ノ出入港日時、燃料以外ノ輸送請求締切日時、搭載日時ヲ關係各部ニ通報セシムベシ

運送艦船指揮官、監督官又ハ船長ハ運送艦船出港ノ際次ノ寄港地ニ陸揚スベキ搭載品ノ大別重量便乘者數出港日時等ヲ次ノ寄港地港務部長（燃料ヲ搭載セルモノハ軍需部長又ハ軍需支部ヘモ及患者ニアリテハ病院ヘモ）ニ電報スベシ

港務部長ハ必要ニ應ジ輸送物件及便乘者ノ概要ヲ搭載スベキ運送艦船ニ其ノ入港前電報スベシ

第三十四條　運送艦船指揮官、監督官又ハ船長ハ一輸送航海ヲ終ル毎ニ人員、軍需品搭載員數、數量軍需品供給ニ關スル狀況其ノ他輸送ニ關シ必要ナル事項ヲ所屬長官及海軍大臣ニ報告スベシ

附　則

本規程ハ港務部防備隊所在以外ノ運送艦船寄港地ニ於ケル海軍首席指揮官及監督官ノ輸送取扱手續ニ之ヲ準用ス

第一號書式（用紙美濃紙）

第　號　人員輸送請求票

年　月　日

某海軍港務部長宛

行先廠若ハ地名	希望乘艦名	將官	佐官	尉官	特務士官	候補生	准士官	下士官	兵	雇員傭人	職工官役人夫	計	摘要
合計													
備考													

請求廠長

【海軍】

（注意）

一、本票ハ輸送先地受領者毎ニ別ニ調製シ且人名表ヲ附スベシ

二、軍屬ハ等級ニ應シ相當欄ニ記入スルモノトス

三、患者傳染病、精神病、外傷、內科的疾病、外科的疾病、性病ニ分ツ之ヲ區別スベシ

四、本票（四通）用途

乘船地港務部　一通　搭載表トシテ所屬長官ノ承認ヲ經タル後港務部保管

運送艦船　一通　搭載表トシテ乘船地港務部ヨリ送付ス

輸送請求者　一通　同右

下船先港務部　一通　同右

第二號書式（用紙美濃紙）

第　號　物品輸送請求票（私有荷物託送願）

年　月　日

某海軍港務部長宛

行先廠若ハ地名（受取人及其所在）	希望搭載艦船名	品名	數量	梱包數	容積（立方米）	重量（瓲）	摘要

請求廠長

（出願者勤務廠　官職　氏名㊞）

合計			
備考			

右領收ス

（注意）

一、附添人ヲ附スルトキハ其官氏名ヲ備考欄内ニ附記スベシ
二、危險物及軍機圖書等ハ本票ニ記入スルニ當リ朱書スベシ
三、重量容積大ニシテ取扱困難ナルモノハ其旨記載シ又特種ノ形狀ヲ有スルモノニアリテハ簡單ナル略圖ヲ附スベシ
四、判任官二等以下ノ私有物託送ハ所轄長ニ於テ至當ト認ムル旨ヲ附記スベシ
五、第二十三條ニ依リ追送スル私有荷物ニ在リテハ出願者ハ住所竝ニ宛名人ノ官職氏名及之トノ續柄ヲ添記スベシ
六、本票(四通)用途

搭載地港務部	一通	搭載表トシテ所屬長官ノ承認ヲ經タル後港務部保管
運送艦船	一通	搭載表トシテ搭載地港務部ヨリ送付引渡ノ際領收票ニ利用ス
輸送請求者	一通	搭載表トシテ搭載地港務部ヨリ送付搭載ノ際領收票ニ利用ス
輸送先港務部	一通	搭載表トシテ搭載地港務部ヨリ送付ス

第三號書式（用紙美濃紙）

第　號　燃料輸送請求票

年　月　日

海軍省軍務局長宛

請求廳長

到着希望期日	搭載地	輸送先	種類	數量(噸)	記事
備考					

〔海軍〕

第四號書式（用紙美濃紙）

第　號　燃料輸送票

年　月　日

所屬鎭守府司令長官宛

海軍省軍務局長

輸送艦船名	搭載地	搭載概定期日	輸送先	輸送先到達概定期日	種類	數量(噸)	記事
備考							

通牒先　輸送艦船、輸送請求廳
　　　　關係鎭守府、要港部（搭載地又ハ輸送先軍港要港ノ場合ニ限ル）

第五號書式

年　月　日

某海軍港務部長宛

便乘願

一便乘者　　官　氏　名
　　右　妻　名　年齡
　　右　男　名　年齡
　　右從者　氏　名　年齡

二便乘地
三下船地
四便乘理由

（注意）

一、判任官二等以下ニアリテハ所轄長ヲ經由シ出願スベシ所轄長ハ之ヲ至當ト認ムルトキハ此ノ旨ヲ附記スルモノトス但シ所轄長遠隔ノ地ニ在ルトキハ之ヲ經由セザルコトヲ得

二、保護者ヲ附スル時ハ保護者タルコトヲ明記スルコト（第六號書式亦同ジ）

三、已ムヲ得ザル時ハ家族ヨリ出願スルコトヲ得此ノ場合ハ第十七條ニ該當スルモノトノ續柄及其ノ勤務廳官職氏名ヲ添記スベシ

四、本願（三通）用途

乘船地港務部　一通
運送艦船　一通　搭載表トシテ乘船地港務部ヨリ交付ス
下船地港務部　一通

［海軍］

1　海軍運送艦船便乘券

第　號

自乘船地（　）乘船時日　月
至下船地（　）

海軍運送艦船（　）ニ便乘ヲ許可ス

年　月　日

便乘者官廳
（所屬又ハ住所）
氏
名

年　月　日午前
後　時

某海軍港務部

［海軍］

2　海軍運送艦船便乘券

第　號

自乘船地（　）乘船時日　月
至下船地（　）

海軍運送艦船（　）ニ便乘ヲ許可ス

年　月　日

便乘者官廳
（所屬又ハ住所）
氏
名

年　月　日午前
後　時

某海軍港務部

（便乘券雛形裏面）

一、便乘者ハ船内ニ在リテハ船内禁令及船内ノ諸規則ヲ遵守シ指揮官又ハ船長ノ指示命令ニ從フベシ

二、便乘者ニシテ前項ニ違反スルモノアルトキハ指揮官又ハ船長ハ直ニ之ヲ下船セシメ又ハ上陸ヲ禁止シテ乘船地ニ送還スルコトアルベシ

三、船内ノ食料ハ實費ヲ下船ノ際本人ヨリ直接運送艦船主任者ニ支拂フベシ

四、便乘者ハ乘船スルトキ便乘券ヲ運送艦船ニ渡スベシ

1

一、此ノ一片ハ控トシテ便乘券ヲ附與シタル官憲ニ於テ之ヲ保存ス

二、便乘者ノ官職氏名（所屬又ノ住所等）ハ必ズ詳細ニ記載スルヲ要ス

三、便乘券ハ獨行者ニハ各個ニ之ヲ附與シ一團ヲ爲スモノニハ其ノ引率者ニ附與シ外何名ト記載スベシ但シ此ノ場合ニ在リテハ別ニ名簿ヲ添ヘ指揮官又ハ船長ニ送付スルモノトス

2

第七號書式（用紙美濃紙）

第　號

自　年　月　日
至　年　月　日　人員、主要軍需品其ノ他輸送見込調

年　月　日

海軍省軍務局長宛

請求廠長

輸送先	發送元	人員	物品 名數量	物品 噸數	到著希望期日	記事
備考						

（注意）

積出期日ニツキ特ニ希望アラバ附記スベシ

第八號書式（用紙美濃紙）

第　　號

自　年　月　日
至　年　月　日　人員物品輸送豫報（　月一日調）

年　月　日

海軍省軍務局長宛

請求廳長

輸送先	發送元	人員	物品 品名	物品 數量	物品 噸數	運送艦船等ニ搭載シ得ベキ豫定年月日	記事
備考							

（注意）

一、豫報ハ主トシテ最近三箇月分ヲ要スルモ爾後二、三箇月內ニ輸送豫定ノモノアラバ併記スルコト

二、本豫報ハ大要ヲ知ルニ供スルモノナルヲ以テ品名ハ輸送上參考ニ資スル必要アルモノノ外一々列擧ヲ要セズ概括的ノ名稱ヲ用ヒ差支ナシ

三、噸數奇零以下ノ記入ヲ要セズ

四、人員ハ士官、特務士官、下士官兵ニ區別スルモノトス

〔海軍〕

●港務部所在地外ニ於ケル運輸取扱ニ關スル件

昭和四年一月十一日
軍務二第一一號
（軍務局長ヨリ第一、二遣外艦隊司令官等宛）

海上運輸取扱手續ニ關スル件申進

上海及青島等港務部所在以外ノ運送艦船寄港地ニ於ケル運輸取扱方ニ關シ運送艦側ニ於テ取締上頗ル困難シ或ハ課稅品通關處理上迷惑ヲ感ジ居ル哉ニ聞及ビ候條海上運輸規程附則ニ規定セラレアル通所在首席指揮官ハ運輸ニ關シ軍港要港ニ於ケル港務部長ノ所掌ニ準ジテ之ヲ處理スベキ儀ニ付特ニ御留意相成樣致度

●南洋群島方面行動艦船ヘノ運輸ニ關スル件

昭和九年八月十六日
官房第三六二六號
（海軍省副官ヨリ各廳長宛）

南洋群島方面行動艦船ヘノ運輸ニ關スル件通牒

南洋方面ニ行動スル艦船ニ對スル運輸ノ爲定期船ヲ利用スル場合該定期船ノ行動豫定ノ變更ニハ南洋廳長官ノ認許ヲ要スルヲ以テ特ニ搭載場所、期日等ヲ希望スル向キハ豫メ南洋群島在勤武官宛通知セラレ度旨同武官ヨリ通牒アリタルニ付御了知相成度

〔海軍〕

●海軍ノ命令ヲ以テ往復スル軍人軍屬陸軍運送船ニ便乘方

明治三十七年二月二十日
官房第六一六號

海軍ノ命令ヲ以テ往復スル軍人軍屬ニシテ陸軍運送船ニ便乘ヲ請ハントスルモノハ便宜其ノ地ノ碇泊場司令部ニ就キ便乘券ノ附與ヲ請求シ若ハ所在陸軍首席將校ノ證明書ヲ以テ便乘券ニ代ヘ乘船スルコトヲ得

第二款　軍用通信

●軍用電氣通信法

昭和九年三月二十九日
法律第三十九號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル軍用電氣通信法ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム（總理、遞信、拓務、海軍、陸軍大臣副署）

軍用電氣通信法

第一條　本法ニ於テ軍用電氣通信トハ軍用ノ電信、電話、無線電信及無線電話竝ニ高周波電流ヲ使用シ通報信號ヲ爲スモノヲ謂フ

第二條　軍用電氣通信ハ陸軍大臣又ハ海軍大臣之ヲ管理ス

第三條　軍用電氣通信ハ要塞、軍港其ノ他軍事上特ニ必要ナル場所ニ之ヲ施設ス

第四條　軍用電氣通信ハ私設ノ電氣通信ニ之ヲ連接スルコトヲ得

軍用電氣通信ノ線路ノ電氣導體ハ私設ノ電氣通信又ハ電氣事業ノ線路ノ電氣導體ノ支持物ニ之ヲ添架スルコトヲ得

第五條　軍用電氣通信ノ線路ノ建設、保守又ハ測量ノ爲必要アルトキハ軍事官憲ハ他人ノ土地ニ立入リ又ハ之ニ測量標ヲ設置スルコトヲ得但シ日沒ヨリ日出迄ノ間ニ於テハ急迫ノ場合ニ非ザレバ占有者ノ意ニ反シテ邸宅又ハ構內ニ立入ルコトヲ得ズ

前項ノ規定ニ依リ邸宅又ハ構內ニ立入ル場合ニハ占有者ニ豫メ之ヲ通知スベシ

第六條　軍用電氣通信ノ線路ハ必要アルトキハ他人ノ土地又ハ建造物ニ之ヲ建設スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ土地又ハ建造物ノ所有者其ノ他ノ權利者ニ豫メ之ヲ通知スベシ

前項ノ規定ニ依リ他人ノ土地又ハ建造物ニ軍用電氣通信ノ線路ノ電氣導體ノ支持物ヲ建設シタルトキハ政府ハ命令ノ定ムル所ニ依リ土地又ハ建造物ノ使用料ヲ支拂フ

第七條　軍用電氣通信ノ線路ノ建設又ハ通信ニ障碍アル竹木其ノ他ノ植物ハ已ムヲ得ザルモノニ限リ軍事官憲ハ其ノ伐除若ハ移植ヲ所有者其ノ他ノ權利者ニ對シ請求シ又ハ自ラ之ヲ伐除スルコトヲ得

第八條　左ニ揭グルモノハ政府之ヲ補償ス

一　第四條第二項ノ規定ニ依ル添架ノ爲電氣導體ノ支持物ニ現ニ生ジタル損害

二　第五條第一項ノ規定ニ依ル立入又ハ測量標設置ノ爲現ニ生ジタル損害

三　第六條第一項ノ規定ニ依ル線路建設ノ爲土地又ハ建造物ニ現ニ生ジタル損害

四　前條ノ規定ニ依リ伐除シタル植物ノ價額又ハ同條ノ規定ニ依ル植物ノ移植ノ費用

前項ノ規定ニ依ル補償金額ハ陸軍大臣又ハ海軍大臣之ヲ決定ス

前項ノ規定ニ依ル決定ニ對シ不服アル者ハ其ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三月以内ニ通常裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九條　正當ノ事由ナクシテ第四條第一項ノ規定ニ依ル連接又ハ同條第二項ノ規定ニ依ル添架ヲ拒ミタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十條　軍用電氣通信ニ依ル通信ノ祕密ヲ侵シ又ハ通信ノ祕密ヲ漏泄シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

軍用電氣通信ノ事務ニ從事シ又ハ從事シタル者其ノ職務ニ關シ知得タル通信ノ祕密ヲ漏泄シタルトキハ二年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十一條　軍用電氣通信ノ事務ニ從事スル者軍用電氣通信ニ依ル電報ヲ正當ノ事由ナクシテ開披、毀損、隱匿若ハ放棄シ又ハ受取人ニ非ザル者ニ交付シタルトキハ三年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス但シ刑法第二百五十八條ニ該當スル場合ハ刑法ノ例ニ依ル

第十二條　軍用電氣通信ノ事務ニ從事スル者正當ノ事由ナクシテ通信ノ取扱ヲ爲サズ又ハ遲延セシメタルトキハ一年以下ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十三條　軍用電氣通信ノ事務ニ從事スル者濫ニ通信ヲ爲シタルトキハ一年以下ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十四條　軍用電氣通信ニ依ル通信ヲ妨害シ又ハ妨害スベキ行爲ヲ爲シタル者ハ七年以下ノ懲役又ハ二千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條　軍用電氣通信ノ線路ノ建設、保守、測量又ハ巡視ヲ妨害シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十六條　軍用電氣通信ノ線路ノ電氣導體又ハ其ノ支持物ニ物品ヲ懸ケ若ハ擲チ、動物若ハ舟筏ヲ繫ギ又ハ之ヲ汚穢シタル者ハ科料ニ處ス

軍用電氣通信ノ線路ノ測量標ヲ毀棄又ハ汚穢シタル者亦前項ニ同ジ

第十七條　陸軍大臣又ハ海軍大臣ノ指定シタル軍用ノ水底電氣通信線路ノ區域內ニ於テ船舶ヲ繫留シ、漁業採藻ヲ爲シ若ハ土砂ヲ掘鑿シ又ハ軍用ノ水底電氣通信線路ノ號標ニ舟筏ヲ繫ギ若ハ其ノ號標ヲ毀棄シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

軍用ノ水底電氣通信線路ノ布設若ハ修理ノ爲其ノ位置ヲ示ス浮標又ハ其ノ布設若ハ修理ニ從事スル船舶ヨリ陸軍大臣又ハ海軍大臣ノ指定シタル距離以內ニ於テ前項ノ行爲ヲ爲シ又ハ航行シタル者亦前項ニ同ジ

第十八條　第十條、第十一條、第十三條乃至第十五條及前條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第十九條　軍用電氣通信ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ公衆通信ノ用ニ供スルコトヲ得

妨害シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十六條　軍用電氣通信ノ線路ノ電氣導體又ハ其ノ支持物ニ物品ヲ懸ケ若ハ擲チ、動物若ハ舟筏ヲ繫ギ又ハ之ヲ汚穢シタル者ハ科料ニ處ス

軍用電氣通信ノ線路ノ測量標ヲ毀棄又ハ汚穢シタル者亦前項ニ同ジ

第十七條　陸軍大臣又ハ海軍大臣ノ指定シタル軍用ノ水底電氣通信線路ノ區域內ニ於テ船舶ヲ繫留シ、漁業採藻ヲ爲シ若ハ土砂ヲ掘鑿シ又ハ軍用ノ水底電氣通信線路ノ號標ニ舟筏ヲ繫ギ若ハ其ノ號標ヲ毀棄シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

軍用ノ水底電氣通信線路ノ布設若ハ修理ノ爲其ノ位置ヲ示ス浮標又ハ其ノ布設若ハ修理ニ從事スル船舶ヨリ陸軍大臣又ハ海軍大臣ノ指定シタル距離以內ニ於テ前項ノ行爲ヲ爲シ又ハ航行シタル者亦前項ニ同ジ

第十八條　第十條、第十一條、第十三條乃至第十五條及前條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第十九條　軍用電氣通信ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ公衆通信ノ用ニ供スルコトヲ得

附　則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム　〔海軍〕

（昭和九年勅令第三百九號ヲ以テ同年十一月一日ヨリ施行）

軍用電信法ハ之ヲ廢止ス

本法施行前ニ軍用電信法ノ罰則ヲ適用スベキ行爲アリタルトキハ本法施行ノ後ト雖モ仍其ノ罰則ヲ適用ス

●軍用電氣通信法ヲ朝鮮、臺灣及樺太ニ施行ノ件

昭和九年十月十九日
勅令第三百十號

朕軍用電氣通信法ヲ朝鮮、臺灣及樺太ニ施行スルノ件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム（總理、拓務、海軍、陸軍、遞信大臣副署）

軍用電氣通信法ハ朝鮮、臺灣及樺太ニ之ヲ施行ス

附　則

本令ハ軍用電氣通信法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●軍用電氣通信ノ線路ノ建設等ニ關スル件

昭和九年十月二十日
陸軍省令第一號
海軍

軍用電氣通信ノ線路ノ建設等ニ關スル件左ノ通定ム

第一條　軍用電氣通信法第五條第二項又ハ同法第六條第一項ノ規定ニ依ル通知ハ邸宅若ハ構内ニ立入リ又ハ線路ヲ建設スベキ日ノ三日前迄ニ之ヲ爲ス但シ已ムヲ得ザル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラズ

第二條　軍用電氣通信法第五條第二項ノ規定ニ依リ他人ノ邸宅又ハ構内ニ立入ルベキ者陸軍又ハ海軍ノ制服ヲ著用セザルトキハ其ノ氏名、身分等ヲ記載シタル部隊（艦船）長ノ證明書ヲ携帶スベシ

第三條　軍用電氣通信法第六條第二項ニ規定スル使用料ハ當該土地又ハ建造物ノ所有者ニ對シ其ノ請求ニ依リ之ヲ支拂フ

第四條　前條ノ規定ニ依リ支拂フベキ使用料ハ建設シタル支持物一箇ニ付一年四錢トス但シ二本以上ノ脚ヲ有スル支持物ヲ建設シタル場合ニ於テハ當該支持物一箇ニ付一年四錢以内ノ增額ヲ爲スコトアルベシ

附　則

本令ハ昭和九年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

●軍用電氣通信ヲ公衆通信ニ供用ノ件

昭和九年十月十九日
勅令第三百十二號

陸軍用電氣通信ヲ公衆通信ノ用ニ供スルノ件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム（總理、拓務、海軍、陸軍、遞信大臣副署）

公衆通信ノ用ニ供スル軍用電氣通信ハ遞信大臣之ヲ告示ス

軍用電氣通信ニ依ル公衆通信ノ取扱ニ關シ必要ナル事項ハ遞信大臣之ヲ定ム

本令中遞信大臣トアルハ朝鮮ニ在リテハ朝鮮總督、臺灣ニ在リテハ臺灣總督、樺太ニ在リテハ樺太廳長官トス

附　則

本令ハ軍用電氣通信法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十二年勅令第百八十七號ハ之ヲ廢止ス

【海軍】

●軍用電氣通信公衆通信取扱規則

昭和九年十月十九日
遞信省令第六十六號

軍用電氣通信公衆通信取扱規則左ノ通定ム

軍用電氣通信公衆通信取扱規則

第一條　軍用電氣通信ヲ以テ公衆通信ノ取扱ヲ爲ストキハ特ニ規定スルモノヲ除クノ外公衆通信ニ關スル一般ノ規定ヲ適用ス

第二條　軍用電氣通信ヲ以テ公衆通信ノ取扱ヲ爲ストキハ軍事ニ關スル通信ノ取扱ヲ先ニスベシ但シ特ニ時間ヲ定メテ之ガ取扱ヲ爲ストキハ此ノ限ニ在ラズ

第三條　軍用電氣通信ヲ以テ公衆通信ノ取扱ヲ爲ス電信取扱所ニ於テハ特ニ指定シタル場合ヲ除クノ外別使配達及艀船配達ヲ爲サズ

第四條　軍用電氣通信ヲ以テ公衆通信ノ取扱ヲ爲ス電信取扱所ニ於ケル電報直配達區域ハ別ニ之ヲ告示ス

附　則

本令ハ軍用電氣通信法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十二年五月遞信省令第十八號固定軍用電信公衆通信取扱規則ハ之ヲ廢止ス

【海軍】

●公衆通信取扱ニ關スル件

昭和八年五月三十日
軍務二第二〇八號
（遞務局長ヨリ關係各廳長宛）

公衆通信取扱ニ關スル件申進

陸上無線電信所ニ於ケル公衆通信ハ別表ニ依リ取扱フコトニ定メラレ候

（別表）

無線電信所 所名	通信電波 k.c	通信時間（中央標準時）	對手局 局名	通信電波 k.c	記事
東京	三九	正午ヨリ一時間			
		午前十時五十九分ヨリ五分間	時報	三〇	パラオ　日曜祭日午前時報ナシ
		午前九時、午後六時ヨリ各十五分間	新聞電報放送		無線時事新報社
		午後八時五十九分ヨリ	時報、氣象電報、水路告示、船局報、燈臺局報		
		毎金曜日午後九時（時報、氣象電報、水路告示、船局報、燈臺局報放送後）	極東衞生狀況放送		內務省衞生局
		必要アル時毎時ノ始メ	氣象電報		中央氣象臺
父島	八七	午前八時、午後四時ヨリ各一時間		一〇五	サイパン
		午前六時、午後二時ヨリ各一時間		五〇〇	小笠原方面及南洋群島方面就航本邦船舶
佐世保	五六	午前六時、午後六時ヨリ各一時間			
鳳山	五〇	午前四時、午後二時ヨリ各一時間		三〇	パラオ　那覇「ヤップ」間海底電線及東京「パラオ」間無線連絡故障ノ際ニ限ル
父島	八七	午前四時、十時、正午、午後六時、八時、十時ヨリ各一時間	東京無線局	九二	必要ニ應ジ兩局直接打合ノ上短波ヲ使用ス　東京小笠原間海底電線故障及通信輻輳ノ際ニ限ル
橫須賀 佐世保	——	軍用通信ニ支障ナキ範圍ニ於テ隨時	父島		前項ノ場合兩局無線連絡ヲ爲シ得ル迄
			鳳山		內地臺灣間海底電線故障ノ際ニ限ル

〔海軍〕

●無線電信法

大正四年六月二十一日　法律第二十六號

改正　大正一〇年第六二號、昭和四年第四五號

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル無線電信法ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム（總理、遞信大臣副署）

無線電信法

第一條　無線電信及無線電話ハ政府之ヲ管掌ス

第二條　左ニ揭クル無線電信又ハ無線電話ハ命令ノ定ムル所ニ依リ主務大臣ノ許可ヲ受ケ之ヲ私設スルコトヲ得

一　航行ノ安全ニ備フル目的ヲ以テ船舶ニ施設スルモノ

二　同一人ノ特定事業ニ用ウル船舶相互間ニ於テ其ノ事業ノ用ニ供スル目的ヲ以テ船舶ニ施設スルモノ

三　電報送受ノ爲電信官署トノ間ニ施設者ノ專用ニ供スル目的ヲ以テ電信、電話、無線電信又ハ無線電話ニ依ル公衆通信ノ連絡ナキ陸地又ハ船舶ニ施設スルモノ

四　電信、電話、無線電信又ハ無線電話ニ依ル公衆通信ノ連絡ナク前號ノ規定ニ依ルヲ不適當トスル陸地相互間又ハ陸地船舶間ニ於テ同一人ノ特定事業ニ用ウル目的ヲ以テ陸地又ハ船舶ニ施設スルモノ

五　無線電信又ハ無線電話ニ關スル實驗ニ專用スル目的ヲ以テ施設スルモノ

六　前各號ノ外主務大臣ニ於テ特ニ施設ノ必要アリト認メタルモノ

第三條　私設ノ無線電信又ハ無線電話ノ機器、其ノ裝置及運用ニ關スル制限竝私設ノ無線電信又ハ無線電話ノ通信ニ從事スル者ノ資格及配置定員ハ命令ノ定ムル所ニ依ル

第四條　私設ノ無線電信及無線電話ハ其ノ施設ノ目的以外ニ使用スルコトヲ得ス但シ命令ノ定ムル所ニ依リ船舶遭難通信、氣象通信、報時通信其ノ他主務大臣ニ於テ公益上必要ト認ムル通信ニ限リ之ヲ使用スルコトヲ妨ケス

第五條　外國船舶ニ裝置シタル無線電信又ハ無線電話ハ第二條ノ規定ニ依リ施設シタルモノヲ除クノ外之ヲ使用スルコトヲ得ス但シ船舶遭難通信及航行中電信官署又ハ電話官署トノ通信ニ使用スルコトヲ妨ケス

第六條　主務大臣ハ命令ノ定ムル所ニ依リ私設ノ無線電信又ハ無線電話ヲ公衆通信又ハ軍事上必要ナル通信ノ用ニ供セシムルコトヲ得

〔海軍〕

前項ノ場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ主務大臣ハ吏員ヲ派遣シテ其ノ取扱ヲ爲サシムルコトヲ得

第七條　主務大臣ハ公衆通信上又ハ軍事上必要ト認ムルトキハ私設ノ無線電信、無線電話ノ許可ヲ取消シ又ハ其ノ設備ノ變更、使用ノ制限若ハ使用ノ停止ヲ命スルコトヲ得無線電信、無線電話ノ混信防遏ノ爲必要ト認ムルトキ亦同シ

第八條　主務大臣ハ公安ノ爲必要ト認ムルトキハ私設ノ無線電信、無線電話又ハ外國船舶ニ裝置シタル無線電信、無線電話ノ使用ノ制限、停止又ハ其ノ機器附屬具ノ除却ヲ命スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ主務大臣ハ當該官吏ヲシテ機器附屬具ニ封印ヲ施シ又ハ之ヲ除却セシムルコトヲ得

第八條ノ二　無線電信又ハ無線電話ニ依ル通信公安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムルトキハ主務大臣ノ指定シタル電信官署又ハ電話官署ニ於テ之ヲ停止シ又ハ當該無線電信、無線電話ノ施設者若ハ當該通信ヲ發スル者ニ對シ其ノ通信ノ停止ヲ命スルコトヲ得

第九條　私設ノ無線電信又ハ無線電話ノ施設者本法、本法ニ基キテ發スル命令又ハ之ニ基キテ爲ス處分ニ違反シタルトキハ主務大臣ハ其ノ無線電信、無線電話ノ許可ヲ取消シ又ハ其ノ使用ノ停止ヲ命スルコトヲ得

第十條　私設ノ無線電信又ハ無線電話ノ施設者其ノ無線電信又ハ無線電話ノ許可ヲ取消サレタルトキハ主務大臣ノ命スル所ニ依リ其ノ機器工作物ヲ撤去スルコトヲ要ス私設ノ無線電信又ハ無線電話ヲ廢止シタルトキ亦同シ

第十一條　私設ノ無線電信、無線電話又ハ外國船舶ニ施設シタル無線電信、無線電話ハ船舶遭難通信ノ取扱ノ依賴ヲ受ケタルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十二條　無線電信又ハ無線電話ハ船舶遭難通信アリタル場合ニ於テハ直ニ應答シ救助上最便宜ノ位置ニ在ル無線電信又ハ無線電話ニ通報スヘシ

前項ノ場合ニ於テ特定ノ事項ノ通報ヲ求メラレタルトキハ前項ノ規定ニ依ラス直ニ其ノ通報ヲ爲スコトヲ要ス

第十三條　主務大臣ハ不法ニ無線電信又ハ無線電話ヲ施設スル者アリト認メタルトキハ當該官吏ヲシテ其ノ施設ノ場所ニ立入リ機器工作物ノ檢查、機器附屬具ノ除却其ノ他相當ノ措置

〔海軍〕

ヲ爲サシムルコトヲ得

第十三條ノ二　主務大臣ハ私設ノ無線電信又ハ無線電話ノ機器、其ノ裝置又ハ運用ニ關シ監督上必要ト認ムルトキハ當該官吏ヲシテ其ノ施設ノ場所ニ立入リ機器工作物及關係書類ノ檢查ヲ爲サシムルコトヲ得

第十三條ノ三　前二條ノ規定ニ依リ當該官吏無線電信又ハ無線電話ノ施設ノ場所ニ立入ル場合ニ於テハ其ノ身分ヲ證明スヘキ證票ヲ携帶スヘシ

第十四條　政府ハ公衆通信ノ用ニ供スル無線電信又ハ無線電話ノ施設ノ爲船舶ノ一部ヲ使用シ必要アルトキハ特殊ノ供給又ハ設備ヲ命スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ相當ノ使用料及特殊ノ供給、設備ノ實費ハ請求ニ因リ政府之ヲ支給ス

第十五條　公衆通信ノ用ニ供スル無線電信又ハ無線電話ニ依ル通信ニシテ無線電信、無線電話、電信、電話、郵便、郵便爲替、郵便貯金ノ事務又ハ船舶遭難、航行ノ安全、報時、氣象報告ニ關スルモノハ命令ノ定ムル所ニ依リ無料ト爲スコトヲ得

第十六條　許可ナクシテ無線電信、無線電話ヲ施設シ若ハ許可ナクシテ施設シタル無線電信、無線電話ヲ使用シタル者又ハ許可ヲ取消サレタル後私設ノ無線電信、無線電話ヲ使用シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ場合ニ於テ無線電信又ハ無線電話ヲ他人ノ用ニ供シ因テ金錢物品ヲ收得シタルトキハ之ヲ沒收ス既ニ消費又ハ讓渡シタルトキハ其ノ金額又ハ代價ヲ追徵ス

第十七條　私設ノ無線電信又ハ無線電話ヲ其ノ施設ノ目的以外ニ使用シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ場合ニ於テ無線電信又ハ無線電話ヲ他人ノ用ニ供シ因テ金錢物品ヲ收得シタルトキハ之ヲ沒收ス既ニ消費又ハ讓渡シタルトキハ其ノ金額又ハ代價ヲ追徵ス

私設ノ無線電信又ハ無線電話ニ依賴シ通信ヲ爲サシメタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十八條　第五條ノ規定ニ違反シタル者又ハ本法ニ依ル無線電信、無線電話ノ使用ノ制限停止、設備變更若ハ除却撤去ノ命令ニ從ハサル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス無線電信、無線電話ノ事務ニ從事スル者使用ノ制限又ハ停止ニ違反シテ使用シタ

〔海軍〕

ルトキハ其ノ従事者ニ付亦同シ

第十九條　第六條ノ場合ニ於テ正當ノ事由ナクシテ無線電信、無線電話ノ供用ヲ拒ミ又ハ第十四條ノ場合ニ於テ正當ノ事由ナクシテ船舶ノ使用ヲ拒ミ若ハ特殊ノ供給設備ヲ爲ササル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十條　電信官署又ハ電話官署ノ取扱中ニ係ル無線電信又ハ無線電話ノ通信ノ祕密ヲ侵シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

無線電信又ハ無線電話ノ事務ニ從事スル者前項ノ通信ノ祕密ヲ漏泄シタルトキハ二年以下ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

本條ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

第二十條ノ二　無線電信又ハ無線電話ニ依リ知得タル前條ニ該當セサル無線電信又ハ無線電話ノ通信ノ祕密ヲ漏泄シタル者ハ一年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

前項ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

第二十一條　不法ニ無線電信、無線電話ニ關スル料金ヲ免レ又ハ他人ヲシテ之ヲ免レシメタル者ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

無線電信又ハ無線電話ノ事務ニ從事スル者前項ノ行爲ヲ爲シタルトキハ五年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十三條　無線電信ノ事務ニ從事スル者電信官署ノ取扱中ニ係ル無線電信ニ依ル電報ヲ正當ノ事由ナクシテ開披、毀損、隱匿若ハ放棄シタルトキ又ハ受取人ニ非サル者ニ交付シタルトキハ三年以下ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス但シ刑法第二百五十八條又ハ第二百五十九條ニ該當スル場合ハ刑法ノ例ニ依ル

第二十四條　無線電信、無線電話ノ事務ニ從事スル者正當ノ事由ナクシテ公衆通信若ハ軍事上必要ナル通信ノ取扱ヲ爲ササルトキ又ハ之ヲ遲延セシメタルトキハ一年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

無線電信、無線電話ノ事務ニ從事スル者正當ノ事由ナクシテ第十一條若ハ第十二條ノ規定ニ依ル船舶遭難通信ノ取扱ヲ爲ササルトキ又ハ之ヲ遲延セシメタルトキハ一年以上ノ有期懲役ニ處ス

船舶遭難通信ノ取扱ヲ妨害シタル者ハ前項ニ同シ

第二十五條　無線電信、無線電話ニ依ル公衆通信若ハ軍事上必要ナル通信ノ障碍シ又ハ之ヲ障碍スヘキ行爲ヲ爲シタル者ハ七年以下ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條　第十六條乃至第二十五條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第二十七條　本法ニ基キテ爲ス當該吏員ノ職務ノ執行ヲ拒ミ、之ヲ妨ケ若ハ忌避シ又ハ第十三條若ハ第十三條ノ二ノ規定ニ依ル檢査ノ際當該官吏ノ尋問ニ對シ答辯ヲ爲サス若ハ虚僞ノ陳述ヲ爲シタル者ハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第二十八條　電信法第四條、第十一條乃至第二十一條、第二十三條、第二十四條及第四十五條ノ規定ハ公衆通信又ハ軍事上必要ナル通信ノ用ニ供スル無線電信又ハ無線電話ニ之ヲ準用ス

第二十八條ノ二　無線電信又ハ無線電話ニ非スト雖高周波電流ヲ使用シ通報信號ヲ爲スモノニ關シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ本法ノ規定ヲ準用ス

第二十八條ノ三　主務大臣ハ無線電信又ハ無線電話ニ依ル公衆通信又ハ軍事上必要ナル通信ニ及ホス障碍ヲ防止スル爲必要ト認ムルトキハ高周波電流ヲ發生スル設備ニシテ無線電信、無線電話又ハ前條ノ通報信號施設ニ非サルモノニ關シ其ノ施

設者ニ對シ設備ノ變更又ハ特殊ノ設備ヲ命スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ設備ノ變更又ハ特殊ノ設備ニ要シタル費用ハ命令ノ定ムル所ニ依リ政府之ヲ補償ス

前項ノ規定ニ依ル補償ニ關スル決定ニ對シ不服アル者ハ其ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三月內ニ民事訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十九條　本法ハ航空機ニ施設スル無線電信及無線電話ニ關シ之ヲ準用ス

第三十條　本法ノ適用ニ付テハ航空機ハ之ヲ船舶ト看做ス

附　則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

（大正四年勅令第百八十五號ヲ以テ同年十一月一日ヨリ施行）

附　則（大正十年法律第六十二號）

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

（昭和二年勅令第百二十六號ヲ以テ同年六月一日ヨリ施行）

附　則（昭和四年法律第四十五號）

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

（昭和四年勅令第三百四十五號ヲ以テ昭和五年一月一日ヨリ施行）

●無線電信法ヲ朝鮮、臺灣及樺太ニ施行ノ件

大正四年十月二十六日
勅令第百八十六號

朕無線電信法ヲ朝鮮、臺灣及樺太ニ施行スルノ件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム（總理、內務、遞信大臣副署）

無線電信法ハ之ヲ朝鮮、臺灣及樺太ニ施行ス

附　則

本令ハ大正四年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

【海軍】

●無線電信法第二十八條ノ三ニ依ル費用補償ノ件

昭和四年十二月五日
遞信省令第五十七號

無線電信法第二十八條ノ三ニ依ル費用補償ニ關スル件左ノ通定ム

第一條　無線電信法第二十八條ノ三ニ依ル政府ノ補償スヘキ費用ハ本令ノ定ムル所ニ依リ施設者ノ請求ヲ俟テ之ヲ支給ス

第二條　前條ノ費用ヲ請求セムトスル者ハ工事竣功ノ日ヨリ三月內ニ其ノ內譯ヲ明記シタル請求書ヲ所轄遞信局經由遞信大臣ニ提出スヘシ

第三條　遞信大臣前條ノ請求ヲ受ケタルトキハ其ノ當否及金額ヲ審査シ之カ決定ヲ請求者ニ通知ス

第四條　設備ノ變更又ハ特殊ノ設備左ノ各號ノ一ニ該當スル場合之ニ要シタル經費ハ第一條ノ費用中ニ包含セサルモノトス

一　命令スル所ニ反シ通信障碍ヲ除去スルコト能ハサルトキ

二　無線電信又ハ無線電話ニ依ル公衆通信、軍事通信開始ノ後又ハ當該無線電信、無線電話ノ機器裝置變更ノ後新ニ設備シ又ハ變更シタルニ因リ通信障碍ヲ生シ之ニ對シ命セラレタルモノナルトキ

三　修繕其ノ他當該設備保守上必要ナル處置ニ屬スルトキ

附　則

本令ハ昭和四年法律第四十五號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

（昭和四年勅令第三百四十五號ヲ以テ昭和五年一月一日ヨリ施行）

【海軍】

●海軍無線電報取扱規約

大正二年十月十日
達第百二十六號

改正　大正二年逓一三二號、第一四〇號、第一五〇號、第一五三號、三年第一一號、第六五號、第六八號、第九〇號、第一〇七號、第一一四號、第一二五號、第一三九號、第一四四號、第一四九號、第一五四號、第一六一號、第一六三號、第一六八號、第一八三號、第一八七號、四年第一號、第三號、第一六號、第二一號、第二九號、第三二號、第七〇號、第七一號、第七三號、第七八號、第七九號、第八二號、第八四號、第九六號、第一〇九號、第一一四號、第一一七號、第一三三號、第一三九號、第一四八號、第一四九號、第一五八號、第一六八號、五年第八號、第一一號、第一三號、第三六號、第六七號、第六八號、第七一號、第七二號、第一一〇號、第一三五號、第一四四號、第一五七號、第一六一號、第一九九號、第二〇〇號、六年第一五號、第一八號、第二七號、第三三號、第四五號、第四七號、第五八號、第六四號、第六五號、第七一號、第七三號、第八〇號、第八七號、第一〇七號、第一二四號、第一二九號、七年逓一號、逓一九號、第二五號、第四六號、第六二號、第七八號、第九一號、第九五號、第九七號、第一一五號、第一二七號、第一七一號、第一七二號、第一八四號、第二〇〇號、第二〇二號、八年第八號、第一一號、第一八號、第一九號、第八〇號、第一一六號、第一三五號、第一五一號、第一五八號、第一六一號、第一七〇號、第一八七號、第一九五號、第一九六號、第二〇一號、第二〇三號、九年第五號、第一九號、第四九號、第五九號、第七三號、第八二號、第九四號、第九八號、第一〇六號、第一五三號、第二一四號、第二四四號、第二四六號、第二四七號、一〇年第二二號、第四二號、第七七號、第七九號、第一一〇號、第一二六號、第一三〇號、第一三六號、第一三八號、第一六〇號、第一七九號、第一八二號、第一八六號、第一八七號、第二〇六號、一一年第六號、第七三號、第一〇六號、第一〇七號、第一二四號、第一七〇號、第一八二號、第一八五號、第二〇〇號、第二一三號

（海軍）

海軍無線電報取扱規約

第一章　總則

第一條　海軍艦船及海軍無線電信所（無線電信ヲ有スル海軍廠樣ヲ含ム以下倣之）ト遞信省所屬無線電信官署間ノ無線電信通信ハ本規約ニ依リ行フモノトス但シ海軍無線電信所ト遞信省所屬陸上無線電信官署トノ無線電信通信ハ兩局所間ニ有線電信ノ連絡ナキカ又ハ有線電信不通ナル場合ニ限リ行フコトヲ得

第一條ノ二　海軍艦船及海軍無線電信所ト遞信省所屬無線電信官署間ノ祕密無線電信通信ハ別ニ定ムル所ノモノニ依リ行フモノトス

第二條　無線電信通信ハ送受兩局所(艦船)カ確實ナル通信距離以内ニ在ルトキ之ヲ行フモノトス

送受兩局所(艦船)カ確實ナル通信距離以外ニ在ル場合ト雖媒介ヲ爲シ得ヘキ他ノ局所(艦船)在ルトキハ其ノ媒介ニ依リ通信スルモノトス但シ遞信省所屬無線電信官署ニ於ケル媒介ノ取扱ハ場合ニ從ヒ一般公衆電報ノ無線電信ニ依ル託送、無線電報又ハ無線電報ノ船舶中繼ニ關スル規定ニ依ルモノトス

第二條ノ二　遞信省所屬無線電信官署ニ於テ海軍艦船又ハ海軍無線電信所ニ發受スル電報ヲ他ノ海軍艦船又ハ海軍無線電信所ノ媒介ニ依リ通信シタルトキハ其ノ媒介海軍艦船又ハ海軍無線電信所發受ノモノトシテ處理ス媒介海軍艦船又ハ海軍無線電信所ヨリ其ノ通信ヲ完了スルコト能ハサリシ旨通知アルトキハ第十七條ニ準シ處理スルモノトス

第三條　無線電信ノ受信文(電報原書)ハ五箇月外國電報ハ發信ノ月ノ翌月ヨリ起算シ十箇月外國無線電報ハ同十五箇月間保存シ其ノ期滿ツレハ之ヲ燒却又ハ棄却スヘシ但シ演習其ノ他事變ニ際シテハ別ニ定ムル所ノ規約ニ從フ

第四條　總テ受信及傍受シタル海軍及遞信省所屬無線電信官署ノ通信ハ相互ニ於テ嚴ニ秘密ヲ保ツモノトス

第二章　符號

第五條　無線電信ニ使用スル通信符號ハ普通電信ニ用ウルモノニ同シ

第六條　無線電信傳送上ニ使用スル特殊ノ略符號ハ左ノ如シ

危急 ---- ---- ----
探呼 ---- ---- ----
警告(警戒) ---- ----
航行警報 ---- ----
停信 ---- ---- ----
復信 ---- ----
局名前置(DE) ---- -
可送 ---- -
始信 ---- ----
終信 ---- ----
解信(承諾) ---- ---- ----
問符 ---- ----
結了 ---- ----

〔海軍〕

萬國信號(PRB) ----- ----- -----

第七條　海軍艦船、海軍無線電信所及遞信省所屬無線電信官署ニハ附表第一ノ如ク局所(艦船)名略符號ヲ附シ通信ニ際シテハ之ニ依リ呼稱スルモノトス

第八條　前諸條ノ外必要ナル符號ハ附表第二ニ記載セルモノヲ用ウヘシ但シ外國電報ニ關シテハ外國電報ニ關スル規定ニ從フモノトス

第三章　通信法

第九條　通信ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ行フモノトス

一　呼出ヲナストキハ先ツ始信符(----)ヲ送リ對手局所(艦船)名略符號ヲ三回反覆シ次ニ局名前置符(----)ヲ送リ自局所(艦船)名略符號ヲ三回反覆スヘシ

二　被呼局所(艦船)ハ先ツ始信符ヲ送リ呼出局所(艦船)名略符號ヲ三回反覆シ次ニ局名前置符及自局所(艦船)名略符號ヲ送リ次テ可送符(----)ヲ送ルヘシ

三　被呼局所(艦船)ノ應信ヲ見ハ呼出局所(艦船)ハ左ノ順序ニヨリ所要ノ電報ヲ送ルモノトス

1　電報ノ種類　前置符號ヲ用ユ
2　發信局所名　普通名稱ヲ用キ國名等ヲ冠スヘキモノハ局所名ノ前ニ之ヲ送ルヘシ但シ海軍艦船及海軍無線電信所ヨリ發信ノトキハ之ヲ省略スヘシ
3　電報ノ番號
4　受付ノ月日　當日ナラハ省略スヘシ海軍艦船及海軍無線電信所ヨリ發信スルトキ亦同シ
5　受付ノ時分　海軍艦船及海軍無線電信所ヨリ發信スルトキハ之ヲ省略スヘシ
6　電報字數　居所氏名ノ字數記載アルモノハ先ツ之ヲ送リ次ニ歸除線(略符----)ヲ用ウ(ヘシ)次ニ本文ノ字數ヲ送ルヘシ
7　著信局所名　普通名稱ヲ用キ國名等ヲ冠スヘキモノハ局所名ノ前ニ之ヲ送ルヘシ但シ海軍艦船及海軍無線電信所ヨリ發信ノトキハ之ヲ省略スヘシ
8　受信人居所氏名
9　送達紙ノ外部ニ記載ヲ要スル發信人居所氏名アルトキハ此ノ處ニ傳送ス　添送符號(ホホ)ヲ前置ス
10　指定事項
11　電報ノ本文　添送符號(ホネ)ヲ前置ス
12　發信人居所氏名
13　注意事項　(海軍艦船及海軍無線電信所ノ發受ニ關シ海軍官憲ノ承認ヲ經タル無線電報ナルトキハ添送

〔海軍〕

符號「ヨヨ」ヲ前置シ次ニ「海軍艦船及海軍無線電信所ノ發受ニ關シ海軍官憲ノ承認ヲ經タル無線電報」(符號「タイ」ヲ用ウヘシ)ト傳送スヘシ

四、所要ノ通信ヲ終リタルトキハ終信符(－－－－－－)自局所(艦船)名略符號ヲ送リ次テ可送符(－－－－－－)ヲ送ルヘシ但シ二通以上ノ電報ヲ連續通信スル場合ニ於テハ自局所(艦船名略符號及可送符(－－－－－－)ハ其ノ最終ノ通信終了シタルトキニ於テ之ヲ送ルモノトス

五　被呼局所(艦船)其ノ通信ヲ了解セハ呼出局所(艦船)名略符號解信(承諾)符(－－－－－－　－－－－－)受信電報ノ番號又ハ通數及自局所(艦船)名略符號ヲ送リ受信ノ證トス

六　被呼局所(艦船)信文ヲ了解セス之ヲ再送ヲ乞フトキハ(イク)(－－　－－－－)ナル符號ヲ數回送リ呼出局所(艦船)ハ再送スルモノトス

第十條　前條ニ依リ最初呼出ヲナストキ對手局所(艦船)ノ應答ナキトキハ更ニ二分間ノ間隔ヲ以テ順次三回反覆スヘシ三回反覆スルモ尚應答ナキトキハ十五分間ヲ經タル後更ニ同一方法ニヨリ呼出ヲ爲スヘシ

第十條ノ二　遞信省所屬無線電信官署ハ海軍艦船及海軍無線電信所ヨリ發スル六百米ノ波長ノミニ對シ聽守スルモノトス但シ必要ニ應シ協議ノ上變更スルコトアルヘシ

第十一條　強力ノ通信ヲ行ハムトスル場合ニハ先ツ普通勢力ノ電波ヲ以テ警告(警戒)符(－－－－－－－－－－)ヲ三回反覆シテ附近局所(艦船)ニ警告スヘシ而シテ爾後三十秒ヲ經過スルニ非サレハ強力通信ヲ開始セサルモノトス

第十二條　萬國信號ヲ以テ通信セムトスルトキハ呼出ニ引續キ萬國信號(－－－－－　－－－－)ノ符號ヲ送ルヘシ

第十三條　海軍艦船及海軍無線電信所其ノ通信距離內ニアル遞信省所屬無線電信官署名ヲ知ラムトスルトキ又ハ遞信省所屬無線電信官署其ノ通信距離內ニアル海軍艦船及海軍無線電信所名ヲ知ラムトスルトキハ先ツ探呼符(－－－－－－－－)ヲ送リ次テ第九條ニ準スル通信ヲ行フヘシ

第十四條　前條ノ探呼符ヲ感シタル局所(艦船)ハ第九條第二號ニ準シ應答ヲナスヘシ

第十五條　送信局所(艦船)ニ於テ無線電報ノ字(語)數和文百字歐文四十語以上ナルトキハ和文凡ソ五十字歐文凡ソ二十語毎ニ送信ヲ中止シ問符(－－－－－－－)ヲ送リ對手局所(艦船)ヨリ受信シタル最後ノ語辭及問符ノ返送又ハ可送符(－－－－－－)ヲ受クルニ非サレハ其ノ送信ヲ繼續スヘカラス

【海軍】

第十六條　兩局所(艦船)ノ間ノ通信完了シタルトキハ五ニ結了符號(－－－－－－－－－)及自局所(艦船)名略符號ヲ交換スヘシ

第十七條　遞信省所屬無線電信官署ニテ海軍艦船及海軍無線電信所ト交信ヲ開始シタル後距離遠サカリ又ハ空電等ノタメ通信ヲ完了スルコト能ハサリシトキハ其ノ旨發信者ヘ通知スルモノトス

第十七條ノ二　船舶遭難通信ヲ傳送セントスルトキハ先ツ船舶危急符號(－－－　－－－－－　－－－)ヲ短少ナル間隔ヲ以テ適宜反覆シ之ニ引續キ該通信ヲ送信スヘシ但シ對手局所(艦船)ノ指定ヲ要スルトキハ船舶危急符號ノ一連續ノ終リニ其ノ對手局所(艦船)名略符號ヲ附スヘシ

船舶遭難通信ハ必要ニ應シ適宜ノ通信法ニ依ルコトヲ得

第十七條ノ三　船舶危急符號ヲ認識シタルトキハ總テノ通信ヲ中止シ直ニ之ニ應答(對手局所(艦船)ノ指定アルトキハ其ノ應答ナキトキニ限ル)シ船舶遭難通信ヲ開始スヘシ

第四章　通信ノ順序

第十八條　船舶遭難通信又ハ航行上ノ危險警戒ニ必要ナル警報ハ最先順位ヲ以テ傳送シ其ノ通信ノ終結シタル後ニ非サレハ他ノ通信ヲ行ハサルモノトス

第十九條　無線電報ニ依ル傳送順序ヲ左ノ如ク定ム

一　軍事官報
二　官　報
三　公衆電報
四　試驗通信

【海軍】

但シ試驗通信ニ關シ相互ノ規約ヲ要スルモノハ別ニ之ヲ定メテ實施スルモノトス

第二十條　遞信省所屬無線電信官署ニ於テ二個以上ノ海軍艦船及海軍無線電信所ヨリ同時ニ呼出ヲ受ケタルトキハ其ノ通信スヘキ順位ヲ指示スルコトアルヘシ

第五章　電報尋問及位置通知

第二十一條　海軍艦船ハ己ニ宛テラレタル電報ノ有無ヲ確メ且ツ遞信省所屬海岸局ニ自己ノ所在ヲ告知シ置カムカ爲遞信省所屬海岸局トノ確實通信距離内ニ入リタルトキハ送信スヘキ電報ノ有無ニ拘ハラス遞信省所屬海岸局ヲ呼出シ遞信省所屬海岸局ヨリノ概略方位、距離及進行方位ヲ通知スルモノトス例ヘハ海軍艦船遞信省所屬海岸局ノ西方百浬ノ距離ニ在リテ南ニ航スルトキハ

「西一〇〇南ニ進ム」ト通知スルカ如シ

海軍艦船遞信省所屬海岸局ノ通信距離外ニ出テムトスルトキ亦其ノ旨ヲ通知スルモノトス例ヘハ海軍艦船遞信省所屬海岸局ノ南西方向ニ航シ去ルトキハ

「今南西ニ去ル」ト通知スルカ如シ

第二十二條　前條ノ方位及方向ヲ示スニハ北（キタ）、北東（キタヒガシ）、東（ヒガシ）、南東（ミナミヒガシ）、南（ミナミ）、南西（ミナミニシ）、西（ニシ）、北西（キタニシ）ノ八方位ヲ以テスルモノトス

第二十三條　遞信省所屬海岸局第二十一條ノ通知ヲ得タルトキハ次ノ如ク返信スルモノトス

一　該艦ニ宛テタル電報アルトキハ其ノ電報ノ數ヲ示ス

卽チ「デン四」トスルカ如シ

二　該艦ニ宛テタル電報ナキトキハ其ノ電報ナキコトヲ示ス

卽チ「デンナシ」トスルカ如シ

第六章　料金ノ支拂

第二十四條　遞信省所屬銚子、潮岬、角島、長崎、落石、下津井、帆筵、那覇、鹿兒島、函館、若狹、大分ノ各海岸局ヲ介シ發受スル海軍用電報ニ對シテハ電報託送料ヲ課セサルモノトス

第二十五條　削除

第二十六條　海軍艦船及海軍無線電信所ヨリ通信ヲ開始シ遂ニ其ノ目的ヲ達セサリシトキハ料金ヲ支拂ハス

第二十七條　海軍艦船及海軍無線電信所ヨリ遞信省所屬無線電信官署ヲ介シテ發信セル海軍用電報ニ關スル料金ハ總テ海軍省經理局ニ於テ之ヲ支拂フモノトス又海軍艦船及海軍無線電信所ノ遞信省所屬無線電信官署ヲ介シテ受信シタル海軍用電報ニ關シ電報託送料金又ハ不足料金アリタル場合亦同シ

第二十八條　遞信省所屬無線電信官署ヲ介シテ無線電報（料金ヲ要スルモノニ限ル）ヲ發信セル海軍艦船及海軍無線電信所ハ每月五日迄ニ其ノ前月中ノ發信ニ係ル電報ノ發信月日、番號、受信者名、電報字數（第九條第三號ノ六記載ノモノ）ヲ記載セル調書ヲ作製シ海軍省經理局ニ送付スヘシ

附　則

本達ハ大正二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

附　則　（大正十一年達第百八十二號）

本規約ハ公衆通信ノ取扱ニ關シテハ公衆通信ヲ取扱フ海軍艦船若ハ海軍無線電信所又ハ託送電報ヲ取扱ハサル遞信省所屬無線電信官署ニ之ヲ適用セス

本規約ハ海軍艦船又ハ海軍無線電信所ト船舶ニ施設シタル公衆通信ヲ取扱ハサル官廳用無線電信又ハ私設無線電信トノ間ニ軍事上必要ナル交信ヲ行フ場合ニ之ヲ準用ス

前項ノ通信ハ戰時事變ノ場合及船舶遭難通信又ハ航行警報通信ノ場合ヲ除キ中央標準時ニ依ル左記時間内ニ限リ之ヲ行フモノトス

午前八時、正午及午後八時ヨリ各三十分間

〔海軍〕

附表第一

海軍艦(船)名及海軍無線電信所名略符號

戰艦

JGAA	扶桑
JGBA	山城
JGCA	伊勢
JGDA	日向
JGEA	長門
JGFA	陸奥

巡洋戰艦

JGGA	金剛
JGHA	比叡
JGIA	榛名
JGJA	霧島

一等巡洋艦

JGKA	妙高
JGLA	那智
JGMA	足柄
JGNA	羽黒
JGOA	高雄
JGPA	愛宕
JGQA	鳥海
JGRA	古鷹
JGSA	加古
JGTA	青葉
JGUA	衣笠
JGVA	摩耶

二等巡洋艦

JJCA	平戸
JJDA	矢矧
IJEA	天龍
JJFA	龍田
JJGA	球磨

遞信省船舶局名略符號

大阪商船

JACD	亞米利加丸
JTND	臺南丸
JTCD	臺中丸
JHND	香港丸
JHBD	はるびん丸

日本郵船

JSHD	春洋丸
JBRD	さいべりあ丸
JKRD	香取丸
JSUD	諏訪丸
JKXD	鹿島丸
JFMD	伏見丸
JQQB	朝日丸
JAHA	大洋丸
JGE	新潟
JHK	函館
JWA	若狭
JIT	大分

遞信省海岸局名略符號

JCS	銚子
JOS	大瀬崎
JSM	潮岬
JTS	角島
JOC	落石
JSX	下津井
JJC	東京
JHJ	幌筵
JAA	磐城
JCX	那覇
JKB	鹿兒島
JES	大阪
JNY	石狩
JJG	父島
JMG	佐世保
JGB	稚内

〔海軍〕

〔海軍〕

遞信省

JOND	沖繩丸
JOGD	小笠原丸
JCFD	南洋丸

燈臺局

JERD	羅州丸

JJHA	參摩
JJIA	北上
JJJA	大井
JJKA	木曾
JJLA	長良
JJMA	五十鈴
JJNA	名取
JJOA	由良
JJPA	鬼怒
JJQA	阿武隈
JJRA	川内
JJSA	神通
JJTA	那珂
JJUA	夕張
JJVA	最上
JJWA	三隈
JJXA	鈴谷
JJYA	熊野

JJZA	利根
JLAA	蒼龍
JLBA	鳳翔
JLCA	赤城
JLDA	加賀
JLEA	龍驤
JWTA	能登呂
JWUA	神威
JWVA	千歲
JLFA	迅鯨

長鯨	JLGA	
韓崎	JLHA	
駒橋	JLIA	
大鯨	JLJA	
敷設艦		
勝力	JLLA	
常磐	JLMA	
厳島	JLNA	
白鷹	JLTA	
八重山	JLOA	
沖島	JLPA	
一等海防艦		
浅間	JLWA	
八雲	JLXA	
吾妻	JLYA	
磐手	JLZA	

出雲	JQAA	
春日、進日	JQBA	
日進	JQCA	
二等海防艦		
対馬	JQHA	
一等砲艦		
淀安宅	JQMA	
安宅	JQNA	
二等砲艦		
二見、熱海、宇治、隅田、伏見、鳥羽	JQPA;JQQA;JQRA;JQSA;JQTA;JQUA	

一等駆逐艦

JRJA	峯	風
JRJI	谷、	風、
JRJH	江	風
JRJG	時	風、
JRJF	濱、	風、
JRJE	磯、	風、
JRJD	天	風、
JRJC	浦	風
JRJB	山	風
JRJA	海	風

津

JQZA	保	津
JQYA	比	良
JQXA	堅	田
JQWA	勢	多
JQVA	嵯	峨

JRKA	澤	風
JRLA	沖	風
JRMA	島	風
JRNA	灘	風
JROA	矢	風
JRPA	羽	風
JRQA	汐	風
JRRA	秋	風
JRSA	夕	風
JRTA	太	風
JRUA	帆	風
JRVA	野	風
JRWA	波	風
JRXA	沼	風
JRYA	神	風
JRZA	朝	風
JUAA	春	風
JUBA	松	風

刀

JVXA	JVWA	JVTA	JVSA	JVRA	JVQA	JVNA	JVMA	JVLA	JVKA	JVJA	JVIA	JVHA	JVGA	JVFA	JVEA	JVCA	JVBA	JUCA	JUDA	JUEA	JUFA
時	白	敷	綾	浦	磯	夕	有	初	若	子	初	白	薄	東	裏	初	白	旗	追	疾	朝
雨	露	波	波	波	波	暮	明	霜	葉	日	春	雲	雲	雲	雲	雪	雪	風	風	風	风

JVAA	JUWA	JUVA	JUUA	JUTA	JUSA	JURA	JUQA	JUPA	JUOA	JUNA	JUMA	JULA	JUGA	JUFA	JUEA	JUDA	JUCA	JVAA	JUWA	JUVA	JUUA
吹	夕	望	三	菊	長	文	水	阜	卯	彌	如	蹄	夕	朝	疾	追	旗	雪	月	月	月
			日				無			生			风	风	風	風	風				日

JWNA	電
JWMA	雷
JWLA	響
JWKA	聴
JWJA	連
JWIA	潮
JWHA	曙
JWGA	朧
JWFA	夕
JWEA	狭
JWDA	朝
JWCA	天
JWBA	五月雨
JWAA	春雨
JVZA	夕立雨
JVYA	村雨

JXMA	桃
JXNA	樫
JXOA	檜
JXPA	柳
JXSA	椿、
JXXA	榧
JXYA	楡
JXZA	栗
JZAA	梨
JZBA	竹
JZCA	柿
JZDA	楓
JZEA	菊
JZFA	葵
JZGA	萩
JZHA	薄

一等潜水艦

JZIA	藤	竹
JZJA	萬	竹
JZKA	葦	苗
JZLA	菱	早
JZMA	蓮	朝
JZNA	蕙	顏
JZOA	蓬	夕
JZPA	蓼	顏
JZQA	若	春
JZRA	呉	萱
JZSA	早	苗
JZUA	朝	顏
JZVA	夕	顏
JZWA	芙	春
JZXA	刈	萱

JGAD	伊號第一潜水艦
JGBD	伊號第二潜水艦
JGCD	伊號第三潜水艦
JGDD	伊號第四潜水艦
JGED	伊號第五潜水艦
JGFD	伊號第六潜水艦
JGGD	伊號第七潜水艦
JGHD	伊號第八潜水艦
JGUD	伊號第二十一潜水艦
JGVD	伊號第二十二潜水艦
JGWD	伊號第二十三潜水艦
JGXD	伊號第二十四潜水艦
JJZD	伊號第五十二潜水艦
JJYD	伊號第五十一潜水艦
JLAD	伊號第五十三潜水艦
JLBD	伊號第五十四潜水艦
JLCD	伊號第五十五潜水艦
JLDD	伊號第五十六潜水艦

JLED	伊號第五十七潛水艦
JLFD	伊號第五十八潛水艦
JLGD	伊號第五十九潛水艦
JLHD	伊號第六十潛水艦
JLID	伊號第六十一潛水艦
JLJD	伊號第六十二潛水艦
JLKD	伊號第六十三潛水艦
JLLD	伊號第六十四潛水艦
JLMD	伊號第六十五潛水艦
JLND	伊號第六十六潛水艦
JLOD	伊號第六十七潛水艦
JLPD	伊號第六十八潛水艦
JLQD	伊號第六十九潛水艦
JLRD	伊號第七十潛水艦
JLSD	伊號第七十一潛水艦
JLTD	伊號第七十二潛水艦
JLUD	伊號第七十三潛水艦
JLVD	伊號第七十四潛水艦

JLWD	伊號第七十五潛水艦

二等潛水艦

JQQD	呂號第十七潛水艦
JQRD	呂號第十八潛水艦
JQSD	呂號第十九潛水艦
JQWD	呂號第二十三潛水艦
JQXD	呂號第二十四潛水艦
JQYD	呂號第二十五潛水艦
JQZD	呂號第二十六潛水艦
JRAD	呂號第二十七潛水艦
JRBD	呂號第二十八潛水艦
JRCD	呂號第二十九潛水艦
JRDD	呂號第三十潛水艦
JRED	呂號第三十一潛水艦
JRFD	呂號第三十二潛水艦

JRGD	呂號第三十三潛水艦
JRHD	呂號第三十四潛水艦
JRYD	呂號第五十一潛水艦
JUAD	呂號第五十三潛水艦
JUBD	呂號第五十四潛水艦
JUCD	呂號第五十五潛水艦
JUDD	呂號第五十六潛水艦
JUED	呂號第五十七潛水艦
JUFD	呂號第五十八潛水艦
JUGD	呂號第五十九潛水艦
JUHD	呂號第六十潛水艦
JUID	呂號第六十一潛水艦
JUJD	呂號第六十二潛水艦
JUKD	呂號第六十三潛水艦
JULD	呂號第六十四潛水艦
JUMD	呂號第六十五潛水艦
JUND	呂號第六十六潛水艦
JUOD	呂號第六十七潛水艦

JUPD	呂號第六十八潛水艦

特務艦

JWAD	知床
JWCD	襟裳
JWDD	佐多
JWED	鶴見
JWFD	尻矢
JWGD	石廊
JWHD	隠戸
JWID	早鞆
JWJD	鳴戸
JWKD	室戸
JWLD	野島
JWMD	崎高
JWND	青島

JWOD	劍埼
JWPD	洲埼
JWRD	間宮
JWSD	大泊
JWTD	大、和
JWVD	膠州
JWWD	揷津
JWXD	富士
JWYD	敷島
JWZD	朝日

掃海艇

JXAD	第一號掃海艇
JXBD	第二號掃海艇
JXCD	第三號掃海艇
JXDD	第四號掃海艇
JXED	第五號掃海艇
JXFD	第六號掃海艇
JXGD	第七號掃海艇
JXHD	第八號掃海艇
JXID	第九號掃海艇
JXJD	第十號掃海艇
JXMD	第十三號掃海艇
JXND	第十四號掃海艇
JXOD	第十五號掃海艇
JXPD	第十六號掃海艇
JXQD	第十七號掃海艇
JXRD	第十八號掃海艇

水雷艇

JXSD	千鳥
JXTD	眞鶴

JXUD	友鶴	
JXVD	初雁	
JXWD	鴻	
JXXD	鶴	
JXAA	隼	
JXBA	鵠	
JXYD	鵯	
JXZD	燕	
JZAD	江之島	
JZBD	黒神	
JZCD	黒島	
JZDD	片島	
JZED	戸島	
JZFD	葦埼	

特務艇

JZGD	黒埼	
JZHD	加徳	
JZID	圖島	
JZJD	似島	
JZKD	見島	
JZLD	鷲埼	
JZMD	夏島	
JZND	猿島	
JZOD	那沙美	
JZPD	測天	
JURD	第一號驅潛艇	
JUSD	第二號驅潛艇	

其ノ他ノ船舶

JZQD	公務第七五六號	
JZRD	公務第七五八號	

JZSD	小	鹿
JZTD	千	早
JZUD	第五	吳
JZXD	栗	橋
JZYD	猿	橋
JZZD	淀	橋
JUVD	由良	川
JUWD	山	東
JUXD	初	加勢
JUYD	第一橫須賀	
JUZD	第三橫須賀	
JVAD	第四橫須賀	
JVBD	第五橫須賀	
JVCD	第六橫須賀	
JVDD	第七橫須賀	
JVED	葛	島
JVFD	第一	吳
JVGD	第三	吳

JVHD	第四	吳
JVID	第六	吳
JVJD	第一	舞鶴
JVKD	第二	舞鶴
JVLD	第三	舞鶴
JVMD	九	重
JVND	第一	大湊
JVOD	黃	金
JVPD	第一	回天
JVQD	名	島
JVRD	光	濟
JVSD	第二佐世保	
JVTD	第三佐世保	
JVUD	第四佐世保	
JVVD	第五佐世保	

海軍無線電信所

J J A	大湊	
J J B	馬公	
J J C	東京	
J J D	鎭海	
J J E	德山	
J J F	旅順	
J J G	父島	
J J H	宗谷	
J M D	鳳山	
J M E	横須賀	
J M F	呉	
J M G	佐世保	
J M Z	舞鶴	

附表第二

一　歐文電報ニ用ウル記號

終點	. ‥‥‥
讀點	, ‥‥‥
小讀點	; ‥‥‥
重點	: ‥‥‥
問標	? ‥‥‥
感符	! ‥‥‥
略符	′ ‥‥‥
新章	// ‥‥‥
連續點	— ‥‥‥
括弧	( ) ‥‥‥
轉倒句讀	“” ‥‥‥
字下線	—— ‥‥‥
歸除線	/ ‥‥‥

二　電報ニ用ウル指定事項ノ略符號

指定事項	和文略符號	歐文略符號
至急	ウナ	UR
至急親展	ウニ	UC
無線電報	ナイ	RA
船舶中繼	ナラ	RS
返信料前納	ナツ	RP
返信至急	ナウ	RU
返信照校	ナム	RT
照校	ムニ	TC
電報受信報知	ツニ	PC
郵便受信報知	ツツ	PP
再送	ナチ	RF
同文	ムヨ	TM
同文（遞信省無線電報規則第十條ノ二ニ依ルモノ）	ラヨ	SM
同文連名	ヨイ	MA
留置	ムナ	TR
別使配達	マツ	XP
艀船配達	ハホ	BD
書留郵便配達	ツナ	PR
無緘配達	ナレ	RO

局待　ヤム　WT
親展　ニカ　CL

三　傳送上ニ用ウル電報ノ前置符

官報	G	―‖―
至急官報	AG	―‖―‖―
海軍軍事官報	KG	―‖―‖―‖―
陸軍軍事官報	RG	―‖―‖―‖―

●海軍艦船ト朝鮮總督府、臺灣總督府、關東廳、樺太廳及南洋廳所屬無線電信局間ノ無線電報通信取扱方

大正十年九月十七日
達第百八十號

改正　大正一一年第五〇號、一二年第一二四號、一四年第一一號、第八三號、一五年第一三五號、昭和二年第一三二號、四年第一八號、第九三號、五年第二〇號、第九〇號、第一七〇號

海軍艦船ト朝鮮總督府、臺灣總督府、關東廳、樺太廳及南洋廳所屬無線電信局間ノ無線電報通信取扱ハ大正二年達第百二十六號海軍無線電報取扱規約ヲ準用シ該無線電信局ヲ介シ海軍ヨリ發送スル電報ハ其ノ無線電信ニ係ル部分ノ料金ヲ無料トス

朝鮮總督府、臺灣總督府、關東廳、樺太廳及南洋廳所屬無線電信局局名竝略符號別表ノ如シ

明治四十三年達第百三十二號ハ之ヲ廢止ス

【海軍】

（別表）

朝鮮總督府無線電信局略符號	臺灣總督府無線電信局略符號	關東廳無線局略符號	樺太廳無線電信局略符號	南洋廳無線電信局略符號
海岸局	海岸局	海岸局	海岸局	海岸局
JBB 京城	JFK 基隆	JDA 大連無線電信局	JTW 大泊	JRT トラック
JBH 木浦	JFG 鼻巒			JRU ポナペ
JBI 濟州	JFE 臺東	船舶局		JRV サイパン
JBJ 濟津	JFF 花蓮港	JGAB 大連丸		JRW パラオ
JBM 蔚山		JPJC 奉天丸		JRX ヤルート
JBL 鎭南浦		JPLC 長春丸		JRY アンガウル
JBT 釜山				JRZ ヤップ
JKM 港門島（燈臺）				
JSS 小淸島（燈臺）				
船舶局				
JMCA 南鵬丸				

【海軍】

●憲兵警察務通信ニ關スル件

昭和三年一月十日
軍務二第七號

（陸軍省軍務局長ヨリ關係各部長宛）

憲兵警察務通信ニ關スル件

憲兵警察務ノ執行上急速ヲ要スル無線通信ノ依頼ヲ受ケタル場合ハ特ニ軍事通信ニ支障ナキ限リ之ニ應ジ可然便宜ヲ與ヘラレ度

右申進ス

●海軍艦船ニ於ケル無線電信ニ依リ部外通信取扱ニ關スル件

明治四十五年七月四日
官房第一七七六號ノ四
（海軍大臣ヨリ各鎮守府、艦隊司令長官、練習艦隊、要港部司令官宛）

過般清國動亂ニ當リ長江方面有線電信故障等ノ際陸軍省ヨリ彼地ニ派遣ノ武官及外務省ヨリ彼地ニ派遣又ハ駐劄ノ外交官、領事官等ノ間ニ發著スル緊急通信ヲ海軍艦船ノ無線電信ヲ以テ發受信爲致候處右等ノ場合ニ於ケル料金ノ支拂等ニ關スル取扱方明瞭ヲ缺ク點有之候爲今般遞信省令第三十四號ヲ以テ明治四十一年遞信省令第四十六號及達第七十二號ヲ以テ海軍無線電報取扱規約ヲ改正セラレ候ニ付テハ左記ノ事項御承知相成度

右申進ス

一、艦船ヨリ發スル海軍用以外ノ電報ハ今般達第七十二號ヲ以テ海軍無線電報取扱規約第十一條第三號ニ追加セラレタル注意事項ニ依リ海軍官憲ノ承認ヲ經タルモノナルコトヲ認メラレ且ツ此ノ注意事項ハ著信局所ニ於ケル料金徴收上ニ關シテ緊要ノモノナルニ付必ス遺漏ナカラシムル樣注意スヘキ旨麾下艦船ヘ通達相成度

二、艦船ニ著スル海軍用以外ノ電報ハ賴信紙ニ記セル相當ノ表示ニ依リ海軍官憲ノ承認ヲ經タルモノナルコトヲ認ムヘク且ツ此場合ニ於テハ海軍省又ハ鎭守府ノ名ヲ以テ承認シタルモノニ限ル旨遞信省ヨリ遞信部內ニ通達スル筈ニ付各鎭守府ニ於テハ右承認ヲ求メ來リタルトキ實際必要不得已緊急ナル電報ニシテ且ツ海軍部內ノ通信ニ支障ヲ及ホササル範圍ニ於テ承認ヲ與ヘラルルコト

●艦船乘員ノ身上等ニ關スル電報取扱ノ件

昭和四年五月一日
官房第一五四九號
（海軍省關官ヨリ關係各廳宛）

艦船乘員ノ身上等ニ關スル電報取扱ノ件申進

艦船乘員ニ宛テ又ハ之レヨリ發スル身上等ニ關スル電報ノ海軍無線通信系ニヨル取扱振ニ就テハ各部寬嚴區々ニ亙リ居候處海軍艦船ト海岸局トノ間ニ常時交信ヲ行ヒ乘員ノ私信電報ヲ取扱フコトハ官紀上ハ勿論我海軍現在ノ通信施設及定員ヲ以テシテハ實行困難ナル事情アルニ鑑ミ當分ノ間軍事通信ニ支障ナキ限リ概ネ左記ニ依リ此ノ種電報ヲ海軍通信系ニテ取扱フコトニ一定セラレ候

記

一　取扱電報ノ範圍

（一）航海中又ハ陸上トノ交通不便ナル場所ニ碇泊中ノ艦船ノ乘員ニ宛テタルモノ

（二）前號艦船乘員ヨリ發スルモノ

二　電報ノ內容

（一）皇室關係ノ通信ニシテ急報ヲ要スルモノ

（二）父母妻子及特ニ通報ノ必要ヲ認ムル親族ノ死亡、病氣其ノ他一身上或ハ家事上ノ重要事項ニ關シ急報ヲ要スルモノ

（三）前二號ノ電報ハ何レモ官報トシテ取扱ヒ得ルモノニシテ艦船ニ在リテハ所轄長、東京ニ在リテハ海軍省副官、各軍港要港ニ在リテハ鎭守府又ハ要港部副官ノ裁量ニ依リ發電ノ要否ヲ決スルモノトス

（四）暗號ノ取扱ヲ行ハズ

三　電報ノ形式

發著信人ヲ官憲トスル簡潔ナル軍事官報トスルコト

（例）

宛　金剛艦長　　發　海軍省副官

（本文）貴艦乘組……ニ傳ヘ……

宛　橫須賀鎭守府副官　　發　山城艦長

（本文）橫須賀市…町…番地……ニ傳ヘ……

四　其ノ他

本件電報ノ中海軍省副官及各鎭守府要港部副官ヨリ更ニ有線電信ニヨリテ受信人ニ轉送ヲ要スベキモノハ艦船ニ於テ發電スルニ當リ所轄長ハ官報トスルニ支障ナキヤ否ヤニ關シ特ニ愼重ノ考慮ヲ拂フコト

●無線電報規則

大正十四年八月二十二日
遞信省令第五十一號

改正　大正一五年逓一九號、昭和二年第一八號、第五四號、三年第六二號、六年第三五號、七年第三二號、八年第五九號

無線電報規則左ノ通改正ス

無線電報規則

目次

第一章　總則
第二章　艦船又ハ航空機發著無線電報
第三章　陸地間無線電報
第四章　放送無線電報
第五章　料金
附則

無線電報規則

第一章　總則

第一條　無線電報トハ無線電信又ハ無線電話ニ依リ送受スヘキ電報ヲ謂フ

第二條　本令ニ於テ海岸局トハ艦船トノ間ニ、航空局トハ航空機トノ間ニ無線電信又ハ無線電話ニ依リ通信ヲ爲ス陸上電信官署、船舶局トハ船舶内電信官署、航空機局トハ航空機内電信官署、固定局トハ陸地間ニ於テ無線電信又ハ無線電話ニ依リ通信ヲ爲ス電信官署、託送發受所トハ電信官署トノ間ニ無線電報ヲ送受スル目的ヲ以テ施設シタル官廳用若ハ私設ノ無線電信又ハ無線電話及軍用無線電報若ハ海軍官憲ノ承認ヲ經タル無線電報ヲ電信官署トノ間ニ送受スルコトヲ遞信大臣ニ於テ承認シタル軍用ノ無線電信又ハ無線電話ヲ謂フ

本令ニ於テ陸上局トハ海岸局及航空局、移動局トハ船舶局及航空機局、無線局トハ陸上局、移動局及固定局ヲ謂フ

無線局及託送發受所ノ名稱及呼出符號ハ之ヲ告示ス

第三條　艦船又ハ航空機發著無線電報ハ電報取扱時間ニ拘ラス之ヲ取扱フ但シ電報取扱時間外ニ於テ全ク電報ノ取扱ヲ爲ササル電信官署ニ在リテハ此ノ限ニ在ラス

第四條　船舶局ニ於テハ其ノ船舶休航中又ハ碇泊中、航空機局ニ於テハ其ノ航空機休航中又ハ著陸若ハ著水中無線電報ノ取扱ヲ爲ササルコトアルヘシ

第五條　船舶又ハ航空機ノ遭難ニ際シ其ノ船舶又ハ航空機ノ名

稱航空機ニ在リテハ登錄記號トス登錄記號ノ外・遭難ノ位置・狀況其ノ他救助ニ必要ナル事項ヲ通報スル無線電報ハ無線局ニ於テ他ノ通信ヲ中止シ最先順位ヲ以テ之ヲ取扱フ

第六條　前條ノ規定ニ依ル無線電報ハ之ヲ局報ト爲スコトヲ得但シ有線電信系上傳送ヲ要スルモノハ此ノ限ニ在ラス

第七條　船舶又ハ航空機ノ航行上ノ危險警戒其ノ他海上又ハ空中ニ於ル生命財產ノ保全ニ必要ナル事項ヲ通報スル無線電報ニシテ無線局ニ於テ緊急ノ性質ヲ有スルモノト認ムルモノハ前二條ノ規定ニ準シ之ヲ取扱フ

第八條　無線局ト海軍託送發受所トノ間ノ通信方法ハ別ニ告示スル海軍無線電報取扱規約ニ依ル

前項ノ規約ハ無線局ト海軍託送發受所以外ノ託送發受所トノ間ノ通信方法ニ關シ之ヲ準用ス

第八條ノ二　削除

第九條　本令ニ規定ナキ事項ハ內閣電報ニ關スル規定ニ依ル

第二章　艦船又ハ航空機發著無線電報

第十條　艦船又ハ航空機著無線電報ニシテ陸上局ヲ經由スヘキモノノ宛所中ニハ該局名ヲ記載シ括弧ヲ以テ之ヲ區劃スヘシ

此ノ場合ニ於テ其ノ陸上局名ハ歐文電報ニ於テモ之ヲ語數ニ算入セス

前項ノ陸上局ニ於テ送信シ得サル場合他ノ陸上局ヲ經由シテ送信シ得ルトキハ該局ヲ經由セシメ無線電信又ハ無線電話ニ依ラサルモ陸上電信官署ヨリ配達シ得ルトキハ該官署ヨリ配達スルコトアルヘシ

前項ノ無線電報送達上必要アルトキハ無線電報料ヲ配達料ニ充當シテ別使配達若ハ艀船配達ヲ爲シ又ハ有線電報料ニ充當スルコトアルヘシ

第十條ノ二　航空機著無線電報ノ宛所中ニハ該航空機ノ發著地名（場合ニ依リ發著日、時ヲ附記スヘシ）所有者名及名稱等該電報送達上必要ナル事項ヲ記載スヘシ

第十一條　船舶局ノ中繼ヲ要スル無線電報ニハ指定事項トシテ左ノ略號ヲ記入スヘシ

和文略號	ナヨ
歐文略號	RM

前項ノ中繼ハ一回ニ限ル

第一項ノ指定事項ハ同文無線電報ニ付テハ原信ニノミ之ヲ記

【海軍】

入スヘシ

第十二條　艦船又ハ航空機著無線電報ノ發信人陸上局ニ於ル該電報ノ保管期間ヲ指定セムトスルトキハ指定事項トシテ其ノ日數ヲ記入スヘシ

前項ノ指定ナキ無線電報ハ發信ノ日ヨリ五日間陸上局ニ之ヲ保管ス但シ艦船又ハ航空機カ既ニ通信距離外ニ去リタル等ノ爲メ送信不能ナル場合陸上局ニ於テ必要ナシト認ムルトキハ保管ヲ爲ササルコトアルヘシ

第十三條　發信人前條ノ規定ニ依ル保管期間ヲ延長セムトスルトキハ該期間滿了前其ノ旨ヲ發信電信官署ニ請求スヘシ順次更ニ保管期間ヲ延長セムトスルトキ亦同シ此ノ場合ニ於テ日數ヲ指定セサルトキハ延長期間ヲ五日トス

前項ノ請求ヲ爲ストキハ陸上局ニ對スル通知ニ要スル電報ノ料金（原信官報ナルトキハ官報ノ料金ト、一般私報又ハ新聞電報ナルトキハ一般私報ノ料金ト同額ノ料金）ヲ納付スヘシ

第十三條ノ二　前二條ノ規定ニ依ル艦船又ハ航空機著無線電報ノ保管期間滿了後ト雖陸上局ニ於テ該無線電報ヲ近ク著信艦船又ハ航空機ニ送信シ得ヘシト認ムルトキハ仍之ヲ保管スルコトアルヘシ

第十四條　返信料ヲ前納スル艦船又ハ航空機發著無線電報ノ指定略號ニハ前納料金額ヲ附記スヘシ但シ其ノ前納料金額カ八十錢ナルトキハ之カ附記ヲ要セス

艦船又ハ航空機託送發受所著返信料前納無線電報ニ對シ陸上局又ハ移動局ニ於テ返信料前納證書ヲ發行シタルトキハ該無線電報送信ノ際證書發行月日、番號及前納料金額ヲ該託送發受所ニ通知ス

前項ノ通知ヲ受ケタル託送發受所ハ無線電報發信ノ際證書發行局ニ證書番號ヲ通知シテ該證書ヲ使用スルコトヲ得但シ前項ノ通知ノ日ヨリ三日以內ニ其ノ使用ナキトキハ該證書ハ當該託送發受所ノ施設者ニ之ヲ送付ス

第十五條　艦船又ハ航空機發著無線電報ニ關スル尋問又ハ改正若ハ停止ニシテ返信ヲ要スルモノハ陸上電信官署間ニ限リ其ノ取扱ヲ爲ス

第十六條　艦船又ハ航空機發著無線電報ハ陸上電信官署間ニ限リ至急、再送及受信報知ノ取扱ヲ爲ス

受信報知ヲ要スル艦船又ハ航空機著無線電報ノ發信人ニハ陸

【海軍】

上局ニ於テ該電報ヲ送信シタル日時ヲ通知ス

第十七條　艦船又ハ航空機發著無線電報ニ付テハ追尾、翌朝配達及配達日時指定ノ取扱ヲ爲サス

第十八條　航行中ノ船舶内ニ公示ノ目的ヲ以テ發スル船舶局著無線電報ニシテ發信人ニ於テ所轄遞信局長ノ認可ヲ受ケ一定ノ電信官署ニ差出スモノハ別ニ規定アルモノヲ除クノ外新聞電報トシテ之ヲ取扱フ但シ發信又ハ受信ノ際發信證票又ハ受信證票ノ提示ヲ要セス且該電報ノ豫約及料金後納ノ取扱ヲ爲サス

第十九條　前條ノ規定ニ依ル新聞無線電報ニシテ同一海岸局ヲ經由シ二箇以上ノ船舶局ニ著スルモノハ陸上電信官署間ニ限リ同文電報ト爲スコトヲ得但シ同文ノ略號ニ代フルニ左ノ略號ヲ以テスヘシ

和文略號	ラヨ
歐文略號	SM

前項ノ同文電報ニ付テハ第十條第二項及第三項ノ規定ヲ適用セス但シ該電報ノ全部カ同一海岸局ヲ經由シテ傳送シ得ル場合又ハ同一陸上電信官署ヨリ配達シ得ル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第二十條　艦船又ハ航空機發著無線電報ノ送受ハ對手局所カ確實ナル通信距離内ニ在ルトキノミ之ヲ行フ

第二十一條　船舶又ハ航空機託送發受所ノ施設者ニ於テ第四十七條ニ規定スル料金又ハ私設無線電信無線電話規則第四條ニ規定スル料金ヲ納付セサルトキハ電信官署ニ於テ當該託送發受所トノ間ノ無線電報送受ヲ停止スルコトアルヘシ

第三章　陸地間無線電報

第二十二條　固定局間傳送ヲ要スル無線電報ニシテ同一海岸局ヲ經由シ二箇以上ノ船舶局ニ著スルモノハ陸上電信官署間ニ限リ同文電報ト爲スコトヲ得但シ同文ノ略號ニ代フルニ左ノ略號ヲ以テスヘシ

和文略號	ナイ
歐文略號	RA

前項ノ指定事項ハ同文無線電報ニ付テハ原信ニノミ之ヲ記入スヘシ

第二十三條　固定局間傳送ヲ要スル無線電報ノ傳送上必要アルトキハ所定ノ固定局間傳送ニ代フルニ他ノ固定局間傳送ヲ以テシ又ハ有線電信系ニ依リ之ヲ傳送スルコトアルヘシ

〔海軍〕

第二十四條　固定局間傳送ヲ要スル無線電報ノ種類、取扱期間其ノ他ノ事項ニ付特ニ制限スル場合ハ別ニ之ヲ告示ス

第二十五條　第二十一條ノ規定ハ陸上託送發受所發著無線電報ニ之ヲ準用ス

第四章　放送無線電報

第二十六條　航行中ノ船舶（外國船舶ヲ含ム）内ニ公示ノ目的又ハ別ニ告示スル地域ニ在ル受信人ヲシテ共ノ所屬團體ニ公示セシメ若ハ新聞紙ニ掲載セシムル目的ヲ以テ一年ヲ通シ毎日發スル無線電報ハ之ヲ放送無線電報（以下放送電ト稱ス）ト爲スコトヲ得

第二十七條　放送電報ヲ發信セムトスル者ハ左ノ事項ヲ記載シタル申請書ヲ所轄遞信局ヲ經テ遞信大臣ニ差出シ放送電報取扱ノ認可ヲ受クヘシ認可後第九號ヲ除ク左ノ各號ノ一ニ該當スル事項ヲ變更セムトスルトキ其ノ事項ニ付亦同シ

一　發信ノ目的及通報事項ノ種類
二　和文電報歐文電報ノ別（歐文電報ノ場合ハ使用國語ヲ附記スヘシ）
三　一通放送字語數
四　發信電信官署
五　放送電信官署
六　電報差出時刻
七　放送時刻
八　放送周波數
九　受信人居所氏名（名宛船舶ノ名稱、航路及船主名、公示スヘキ所屬團體名及其ノ所在地、揭載スヘキ新聞紙名及其ノ發行地ヲ附記スヘシ）
十　受信人名宛略號（各受信人ニ共通トス）

前項第九號ノ事項ヲ變更シタルトキハ直ニ其ノ旨ヲ發信電信官署ヲ經テ遞信大臣ニ屆出ツヘシ

一日二通以上ノ放送電報取扱認可ヲ受ケムトスル者ハ各別ニ之ヲ申請スヘシ

第二十八條　放送電報ノ受信人及其ノ名宛略號ハ之ヲ告示ス

第二十九條　遞信大臣ニ於テ必要アリト認ムルトキハ第二十七條第三號乃至第八號及第十號ノ事項ヲ變更セシムルコトアルヘシ

第三十條　放送字語數ヲ變更セムトスルトキハ少クトモ一月以前ニ之ヲ申請スルコトヲ要ス

放送字語數ハ發信人ノ都合ニ依リ月ノ中途ニ於テ之ヲ變更スルコトヲ得ス

〔海軍〕

第三十一條　放送電報ノ放送内容ハ受信人、名宛略號及本文トス

第三十二條　放送電報ハ和文又ハ歐文ノ普通辭ヲ以テ之ヲ記載スヘシ

第三十三條　電報差出時刻ヲ經過シタル後ニ差出シタル放送電報ハ之カ取扱ヲ爲ササルコトアルヘシ

第三十四條　廣告又ハ私信ト認ムル事項ヲ記載シタル電報ニ付テハ放送電報ノ取扱ヲ爲サス

第三十五條　放送電報ニ付テハ電報規則第七章ノ規定ニ依ル特殊取扱ヲ爲サス

第三十六條　放送電報ハ切手ヲ貼付スヘキ場所ニ「無線放送」ト朱書シタル電報賴信紙ヲ使用シテ一通ニ之ヲ記載シ受信人名宛ハ受信人名宛略號ヲ以テ之ヲ表示スヘシ

第三十七條　放送電報ノ實際字語數ハ認可字語數ヲ超過スルコトヲ得ス

第三十八條　電信官署ノ設置アル船舶宛放送電報ハ該電信官署ニ於テ之ヲ受信人ニ交付ス

放送電報ノ受信人ニシテ第二十六條ニ規定スル地域ニ在ル者ハ別ニ告示スル電信官署ニ豫メ請求シテ該電信官署ニ於テ放送電報ノ交付ヲ受クヘシ

放送電報ノ受信人ニシテ其ノ施設シタル無線電信ヲ有スルモノハ前二項ノ規定ニ拘ラス放送電報ヲ受信スルコトヲ得

第三十九條　發信人第五十四條第二項ノ期日迄ニ料金ヲ納付セサルトキハ其ノ滯納ノ期間放送電報ノ取扱ヲ停止ス

前項ノ取扱停止期間三十日以上ニ及ヒ又ハ其ノ停止度數一年三回以上ニ及ヒタルトキハ放送電報取扱ノ認可ヲ取消スコトアルヘシ

第四十條　放送電報ノ發信ヲ罷メムトスルトキハ十五日前迄ニ其ノ旨ヲ所轄遞信局ヲ經テ遞信大臣ニ屆出ツヘシ

第四十一條　遞信大臣ニ於テ公益上必要アリト認ムルトキ又ハ業務上支障アルトキハ放送電報取扱ノ認可ヲ取消スコトアルヘシ

第四十一條ノ二　艦船又ハ航空機ニ對シ無線電信ニ依リ傳染病情報ヲ放送スル目的ヲ以テ官廳ヨリ毎月定期ニ發信スル電報ニ關シテハ本章ノ規定ヲ準用ス

第五章　料金

〔海軍〕

第四十二條　無線電報ニハ無線局ニ於ケル無線電信又ハ無線電話ニ依ル送信、受信又ハ中繼ノ各取扱ニ付左ノ無線電報料ヲ課ス但シ固定局間傳送上ノ料金ハ第四十六條ノ二ノ規定ニ依ル場合及其ノ特定料金ヲ告示シタル場合ヲ除クノ外之ヲ課セス

官報及私報	和文	通常料金	十五字以内二十五錢	第二通以下各通ニ付十五錢
			十五字ヲ超ユルトキハ五字以内ヲ增ス每ニ五錢	
	歐文		五語以内二十五錢	同
			五語ヲ超ユルトキハ一語ヲ增ス每ニ五錢	
新聞電報	和文		五十字以内二十五錢	第二通以下各通ニ付五十字以内十五錢
			五十字ヲ超ユルトキハ五十字以内ヲ增ス每ニ二十錢	五十字ヲ超ユルトキハ五十字以内ヲ增ス每ニ十錢
	歐文		十語以内二十五錢	第二通以下各通ニ付十語以内十五錢
			十語ヲ超ユルトキハ十語以内ヲ增ス每ニ二十錢	十語ヲ超ユルトキハ十語以内ヲ增ス每ニ十錢

原信本文ノ字數ニ依リ

原信本文ノ語數ニ依リ

和文電報ニ連記シタル第二以下ノ受信人名又ハ逐書シタル追尾電報若ハ再送電報ノ第二以下ノ居所ニ付テハ一名宛每ニ五錢ヲ附課ス

第四十三條　有線電信系上傳送ヲ要スル無線電報ニハ前條ニ規定スル料金ノ外有線電報料ヲ課ス但シ艦船又ハ航空機發著無線電報ニ付テハ有線電信系上ノ傳送地域ニ拘ラス內地間（同一市町村內及內地小笠原島間ヲ除ク）ニ發著スル電報ノ料金ト同額ノ有線電報料ヲ課ス

第四十四條　固定局ヲ兼ヌル陸上局ニ於テ該固定局ヲ對手局トス固定局間傳送上ノ料金ニ付告示シタル特定料金ヲ課スル無線電報ヲ艦船又ハ航空機トノ間ニ送受スル場合ハ該陸上局ニ於ケル其ノ送受ニ關シ無線電報料ヲ課セス

第四十五條　別ニ告示スル電信官署ト海軍託送發受所トノ間ニ送受スル海軍用無線電報ニ限リ其ノ送受ニ關シ無線電報料ヲ課セス

第四十六條　無線電報ニ付無線電報料ヲ課セサル場合ニ於テ有線電信系上傳送ヲ要セサルモノニ付テハ其ノ無線局ニ於ケル取扱ヲ有線電信系上ノ取扱ト看做シ第四十三條ニ規定スル有

〔海軍〕

線電報料ヲ課ス

第四十六條ノ二　內地ト南洋群島（ヤツプ島ヲ除ク）トノ間ニ發著スル無線電報ニ付テハ內地ト南洋群島トノ間ノ固定局間傳送ハ之ヲ有線電信系上ノ取扱ト看做シ內地ト南洋ヤツプ島トノ間ニ發著スル電報ノ料金ト同額ノ有線電報料ヲ課ス

內地ト南洋群島トノ間ノ固定局間傳送ヲ要スル艦船又ハ航空機發著無線電報ニ付テハ該固定局間傳送ハ之ヲ有線電信系上ノ取扱ト看做シ第四十三條但書ノ規定ニ依ル有線電報料ヲ課ス

第四十七條　託送發受所ヨリ發スル無線電報ノ料金ハ左ノ區別ニ依リ之ヲ徵收ス

一　海軍託送發受所ヨリ發スルモノ

イ　海軍用無線電報ノ料金ハ別ニ定ムル所ニ依リ海軍省ヨリ之ヲ徵收ス

ロ　海軍官憲ノ承認ヲ經タル無線電報ノ料金ハ追徵ノ例ニ依リ郵便切手ヲ以テ受信人ヨリ之ヲ徵收ス但シ他ノ海軍託送發受所ニ著スルモノニ付テハ發信人ヨリ徵收ス

二　其ノ他ノ託送發受所ヨリ發スルモノ主務官廳ニ於テ料金額ヲ調定シテ託送發受所ノ施設者ニ通知シ該施設者ヨリ一般歲入徵收ノ例ニ依リ通貨ヲ以テ徵收ス但シ料金徵收上必要アルトキハ郵便切手ヲ以テ納付セシメ又ハ主務官廳ノ指定スル場所ニ於テ料金納付代理人ヲ定メ屆出テシムルコトアルヘシ

託送發受所ノ施設者ニ於テ前項ノ料金ヲ納付スヘキ日ハ主務官廳ヨリ該施設者又ハ料金納付代理人ニ調定料金額ノ通知ヲ發シタル日トス

第四十八條　託送發受所著無線電報ニ付受信人ヨリ追徵ヲ要スル料金ハ前條ノ例ニ依リ託送發受所ノ施設者ヨリ之ヲ徵收ス但シ海軍託送發受所著海軍官憲ノ承認ヲ經タル無線電報ニ付受信人ヨリ追徵ヲ要スル料金ハ發信人ヨリ之ヲ追徵ス

第四十九條　第十條第二項及第三項ノ規定ニ依リ料金ニ不足ヲ生シタルトキハ受信人ヨリ之ヲ追徵ス同文電報ナルトキハ之ヲ各通ニ平分ス

有線電信系ノ障碍又ハ通信輻輳ニ際シ無線局ニ於テ一般電報ヲ臨機傳送シタル場合ニ於テハ其ノ傳送ヲ有線電信系上ノ傳送ト看做シ無線電報料ハ之ヲ還付セス

第五十一條　移動局ニ納付シタル無線電報ニ關スル料金還付ノ請求ハ何レノ電信官署ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得

第五十二條　第十二條乃至第十三條ノ二ノ規定ニ依ル保管期間並第十四條ノ規定ニ依リ返信料前納證書ノ送付ニ要シタル日數ハ料金還付ノ請求期間ニ之ヲ算入セス

第五十三條　放送電報ノ料金ハ左ノ區別ニ依ル金額及一名宛毎ニ月額一圓トス但シ第四十一條ノ二ノ規定ニ依ル放送電報ニ

送ト看做シ無線電報料ハ之ヲ追徵セス

第五十條　左ノ料金ハ之ヲ還付ス但シ他ノ料金ニ充當シタル金額ハ此ノ限ニ在ラス

一　無線電信又ハ無線電話ニ依ル送受ヲ爲ササリシトキハ其ノ部分ノ無線電報料

二　有線電信系上傳送ヲ爲ササリシトキハ其ノ部分ノ有線電報料

第二十三條ノ規定ニ依リ所定ノ固定局間傳送ニ代フルニ他ノ固定局間又ハ有線電信系上ノ傳送ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ傳送ハ之ヲ所定ノ固定局間傳送ト看做シ無線電報料ハ之ヲ還付セス

第五十一條　移動局ニ納付シタル無線電報ニ關スル料金還付ノ請求ハ何レノ電信官署ニ於テモ之ヲ爲スコトヲ得

第五十二條　第十二條乃至第十三條ノ二ノ規定ニ依ル保管期間並第十四條ノ規定ニ依リ返信料前納證書ノ送付ニ要シタル日數ハ料金還付ノ請求期間ニ之ヲ算入セス

第五十三條　放送電報ノ料金ハ左ノ區別ニ依ル金額及一名宛毎ニ月額一圓トス但シ第四十一條ノ二ノ規定ニ依ル放送電報ニ

對シテハ名宛數ニ依ル料金ヲ課セス

〔海軍〕

和文		歐文	
一通放送字數	月額	一通放送語數	月額
百字以內	二十圓	二十語以內	二十圓
二百五十字以內	四十圓	五十語以內	四十圓
五百字以內	八十圓	百語以內	八十圓
一千字以內	百四十圓	二百語以內	百四十圓
一千五百字以內	二百圓	三百語以內	二百圓
二千字以內	二百六十圓	四百語以內	二百六十圓

第五十四條　放送電報料ハ一月分毎ニ之ヲ計算シ發信電信官署ヨリ翌月十日迄ニ之ヲ發信人ニ通知ス

發信人前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ其ノ月二十五日迄ニ其ノ料金ヲ發信電信官署ニ通貨ヲ以テ納付スヘシ

第五十五條　放送電報取扱ノ開始又ハ廢止カ月ノ中途ナルトキハ其ノ月分ノ放送電報料ハ日割ヲ以テ之ヲ計算ス

第五十六條　放送電報ノ實際字語數認可字語數ニ達セサル場合ニ於テモ之カ爲第五十三條ニ規定スル料金ハ之ヲ減額セス

第五十七條　電信官署業務上ノ支障ニ依リ放送電報ヲ交付スル

コトヲ得サリシ場合ニ於テモ之カ爲第五十三條ノ料金ハ之ヲ減額又ハ還付セス

第五十八條　放送電報料ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノニ限リ日割ヲ以テ之ヲ減額ス

一　月ノ中途ニ於テ第四十一條ノ規定ニ依リ認可ヲ取消シ又ハ第二十九條ノ規定ニ依リ放送字語數ヲ減少セシメタル場合其ノ當日以後ノ日數ニ相當スル料金

二　設備ノ故障其ノ他業務上已ムヲ得サル事由ニ依リ放送電報ノ放送ヲ爲ササルコト引續キ三日以上ニ及ヒタル場合其ノ日數ニ相當スル料金

第五十九條　第三十九條第二項ノ規定ニ依リ認可ヲ取消シ又ハ第四十條ノ規定ニ依リ發信ヲ罷メタル場合ニ於テ認可後一年ニ滿タサルトキハ其ノ一年ニ滿ツル迄ノ期間ノ放送字語數ニ對スル料金ヲ一時ニ徵收ス

附　則

本令ハ大正十四年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

放送無線電報規則及大正六年三遞信省令第七號ハ之ヲ廢止ス

本令施行前ニ差出シタル無線電報ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ルモノハ本令ニ依リ之カ發信ノ認可ヲ受ケタルモノト看做ス

附　則（昭和六年遞信省令第三十五號）

本令ハ昭和六年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行前ニ差出シタル無線電報ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル

附　則（昭和八年遞信省令第五十九號）

本令ハ昭和九年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行前ニ差出シタル無線電報ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル

●日滿無線電報規則

昭和八年八月三十一日
遞信省令第三十六號

改正　昭和八年第四八號、九年第三八號、第七三號

日滿無線電報規則左ノ通定ム

日滿無線電報規則

第一條　日滿無線電報トハ左ニ揭グル無線電報ヲ謂フ但シ線上傳送ニ付テハ帝國政府ノ電信系又ハ滿洲電信電話株式會社ノ電信系ニ依ルモノニ限ル

一　本邦內地、朝鮮、臺灣、樺太又ハ南洋群島ニ在ル海岸局（以下帝國政府ノ海岸局ト稱ス）ノ媒介ニ依リ帝國又ハ滿洲國ニ屬スル船舶局若ハ託送發受所ト關東州、南滿洲鐵道附屬地、滿洲國又ハ芝罘トノ間ニ發著スルモノ

一ノ二　帝國政府海岸局ノ媒介ニ依リ關東州、南滿洲鐵道附屬地又ハ滿洲國ニ屬スル船舶局若ハ託送發受所ト帝國（關東州及南滿洲鐵道附屬地ヲ除ク）トノ間ニ發著スルモノ

二　關東州、南滿洲鐵道附屬地又ハ滿洲國ニ在ル海岸局（以下滿洲會社海岸局ト稱ス）ノ媒介ニ依リ帝國又ハ滿洲國ニ屬スル船舶局若ハ託送發受所ト帝國（關東州及南滿洲鐵道附屬地ヲ除ク）又ハ芝罘トノ間ニ發著スルモノ

三　滿洲會社海岸局ノ媒介ニ依リ帝國（關東州及南滿洲鐵道附屬地ヲ除ク）ニ屬スル船舶局若ハ託送發受所ト關東州、南滿洲鐵道附屬地又ハ滿洲國トノ間ニ發著スルモノ

四　滿洲會社海岸局及場合ニ依リ帝國政府海岸局ノ媒介ニ依リ帝國（關東州及南滿洲鐵道附屬地ヲ除ク）ニ屬スル船舶局若ハ託送發受所相互間ニ發著スルモノ

五　帝國政府海岸局及場合ニ依リ滿洲會社海岸局ノ媒介ニ依リ關東州、南滿洲鐵道附屬地又ハ滿洲國ニ屬スル船舶局若ハ託送發受所相互間ニ發著スルモノ

六　帝國政府海岸局及滿洲會社海岸局ノ雙方若ハ一方ノ媒介ニ依リ又ハ其ノ媒介ナク帝國（關東州及南滿洲鐵道附屬地ヲ除ク）ニ屬スル船舶局若ハ託送發受所ト關東州、南滿洲鐵道附屬地又ハ滿洲國ニ屬スル船舶局若ハ託送發受所トノ間ニ發著スルモノ

七　南洋群島（ヤップ島ヲ除ク）ト關東州、南滿洲鐵道附屬地、滿洲國又ハ芝罘トノ間ニ發著スルモノ

第二條　日滿無線電報ニ關シテハ特ニ規定アル場合ヲ除クノ外

內國無線電報及日滿電報ニ關スル規定（年賀電報ニ關スル規定ヲ除ク）ヲ準用ス

第三條　無線電報料ハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外左ノ如シ

通常料	官報及私報	和文	一語ニ付　五錢
		歐文	一語ニ付　七錢
	新聞電報	和文	一語ニ付　二錢
		歐文	一語ニ付　三錢
官報及私報		和文	一語ニ付　六錢
		歐文	一語ニ付　八錢
新聞電報		和文	一語ニ付　二錢
		歐文	一語ニ付　三錢

第四條　艦船發著日滿無線電報ノ有線電信系上ノ傳送ニ對シテハ其ノ傳送地域ニ拘ラズ左ノ有線電報料ヲ課ス

官報及私報	和文	一語ニ付　六錢
	歐文	一語ニ付　八錢
新聞電報	和文	一語ニ付　二錢
	歐文	一語ニ付　三錢

第五條　同文無線電報ニ付テハ原信以外ノ各通ニ對シ一通毎ニ左ノ同文謄寫料ヲ課ス

官報及私報　十錢

新聞電報　原信本文ノ語數ニ依リ十語迄毎ニ十錢

第六條　艦船著日滿無線電報ヲ帝國政府海岸局ヨリ滿洲會社海岸局ニ轉送シ又ハ滿洲會社海岸局ヨリ帝國政府海岸局ニ轉送スル場合ハ別ニ料金ヲ課セズ

第七條　艦船著內國無線電報又ハ滿洲會社海岸局ノ媒介ニ依リ關東州、南滿洲鐵道附屬地若ハ滿洲國發關東州、南滿洲鐵道附屬地若ハ滿洲國ニ屬スル艦船著無線電報ハ料金ニ變更ナク日滿無線電報トシテ帝國政府海岸局及滿洲會社海岸局相互間ニ於テ轉送スルコトヲ得

附　則

本令ハ昭和八年九月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治四十三年十一遞信省令第百二號日華無線電報規則ハ之ヲ廢止ス

本令施行前ニ差出シタル無線電報ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル

〔海軍〕

●無線方位測定規則

昭和八年十二月二十九日
遞信省令第六十一號

無線方位測定規則左ノ通定ム

無線方位測定規則

目　次

第一章　總　則
第二章　無線羅針業務
第三章　無線標識業務
附　則

無線方位測定規則

第一章　總　則

第一條　電波ノ發射ニ依リ行フ方位測定業務ニ關シテハ本令ノ定ムル所ニ依ル

第二條　方位測定業務ヲ分チテ左ノ二種トス

一　無線羅針業務　船舶無線電信ト無線方位測定機ノ裝置ヲ有スル陸上無線電信（以下無線羅針局ト稱ス）トノ間ノ方位測定ニ關スル通信

二　無線標識業務　標識符號ヲ發射スル目的ヲ以テ施設シタル無線標識施設（以下無線標識ト稱ス）ノ業務及無線方位測定機ノ裝置ヲ有スル船舶無線電信ト無線電信ノ裝置ヲ有スル無線標識（以下無線標識局ト稱ス）又ハ船舶無線電信ト交信ノ目的ヲ以テ施設シタル陸上無線電信ニシテ無線羅針局若ハ無線標識局ニ非ザルモノ（以下陸上無線電信ト稱ス）トノ間ノ方位測定ニ關スル通信

第三條　方位測定業務ニ使用スベキ電波ノ型式及周波數ハ特ニ指定シタル場合ヲ除クノ外原則トシテ左ノ區別ニ依ルベシ

一　無線羅針業務

（イ）船舶無線電信ヨリ無線羅針局ニ對スル呼出及方位測定ノ請求　當該無線羅針局ノ聽守電波

（ロ）船舶無線電信ニ於テ方位測定ニ供スル符號ノ送信其ノ他　A二又ハB電波三七五KC（三七五KCノ周波數ヲ發射シ得ザルモノハ五〇〇KCノ周波數ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得）

(ハ)無線羅針局ニ於テ船舶無線電信ヨリノ呼出又ハ方位測定ノ請求ニ對スル應答其ノ他方位測定ノ結果ノ傳送

當該無線羅針局ニ割當テタル電波

二　無線標識業務

(イ)無線標識ヨリ標識符號ノ發射

A一又ハA二電波二八五KC乃至三一五KCノ周波數帶ニ於テ當該無線標識ニ割當テタル周波數

(ロ)船舶無線電信ヨリ無線標識局又ハ陸上無線電信ニ對スル呼出及標識符號送信ノ請求

當該無線標識局又ハ陸上無線電信ノ聽守電波

(ハ)無線標識局又ハ陸上無線電信ニ於テ船舶無線電信ヨリノ呼出又ハ標識符號送信ノ請求ニ對スル應答

無線標識局ニ在リテハA一又ハA二電波二八五KC乃至三一五KCノ周波數帶ニ於テ當該無線標識局ニ割當テタル周波數、陸上無線電信ニ在リテハ當該陸上無線電信ニ使用スル電波

第四條　無線羅針局ニ關スル左ノ事項ハ別ニ之ヲ告示ス

一　名稱

二　呼出符號

三　位置　受信空中線及發射空中線（場合ニ依リ第四號ノ主無線羅針局ノ發射空中線ノ地理的位置ヲ經緯度ヲ以テ表ハス

四　船舶無線電信ト交信ヲ爲サザル無線羅針局（以下副無線羅針局ト稱ス）ナルトキハ副無線羅針局ニ於ケル方位測定ニ關シ船舶無線電信ト交信ヲ爲ス無線羅針局（以下主無線羅針局ト稱ス）ノ名稱及呼出符號

五　聽守電波ノ型式及周波數

六　測定電波ノ型式及周波數　船舶無線電信ニ於テ方位測定ニ供スル符號ノ送信ニ使用スベキ電波ノ型式及周波數以下同ジ

七　方位通知電波ノ型式及周波數　無線羅針局ニ於テ船舶無

〔海軍〕

線電信ニ對シ方位測定ノ結果ノ傳送ニ使用スベキ電波ノ型式及周波數以下同ジ

八　通常方位測定區域　通常方位ノ測定ヲ爲シ得ベキ海上ニ於ケル區域ヲ方位及距離ヲ以テ表ハス以下同ジ

九　其ノ他必要ナル事項

第五條　無線標識、無線標識局及無線標識業務ヲ取扱フ陸上無線電信ニ關スル左ノ事項ハ別ニ之ヲ告示ス

一　名稱

二　呼出符號

三　位置　發射空中線ノ地理的位置ヲ經緯度ヲ以テ表ハス

四　發射電波ノ型式及周波數

五　聽守電波ノ型式及周波數

六　標識符號

七　無線標識ニ於ケル標識符號ノ發射ニ關シ船舶無線電信ト交信ヲ爲ス連絡無線電信アルトキハ其ノ名稱及呼出符號

八　通常方位測定區域

九　其ノ他必要ナル事項

第六條　無線羅針局又ハ無線方位測定機ノ裝置ヲ有スル船舶無線電信ニ於テ私設無線電信無線電話規則第六十條ニ依ル發信ヲ認メタルトキハ直ニ方位測定ヲ爲シタル上其ノ結果ヲ船長及救助上最便宜ノ位置ニ在ル他ノ無線電信ニ通知（船舶無線電信ニ在リテハ自己ノ位置ヲ添送スベシ）

第七條　本令中船舶無線電信ニ關スル規定ハ航空機無線電信ニ付之ヲ準用ス但シ使用電波ノ型式及周波數ニ付テハ原則トシテ左ノ區別ニ依ルベシ

一　無線羅針業務

(イ)航空機無線電信ヨリ無線羅針局ニ對スル呼出及方位測定ノ請求

當該無線羅針局ノ聽守電波

(ロ)航空機無線電信ニ於テ方位測定ニ供スル符號ノ送信其ノ他

A一又ハA二電波二三三KC

(ハ)無線羅針局ニ於テ航空機無線電信ヨリノ呼出又ハ

當該無線羅針局ニ割當テタル電波

〔海軍〕

方位測定ノ請求ニ對スル應答其ノ他方位測定ノ結果ノ傳送

二　無線標識業務

(イ)無線標識ヨリ標識符號ノ發射　A一又ハA二電波一九四KC乃至三六五KCノ周波數帶ニ於テ當該無線標識ニ割當テタル周波數

(ロ)航空機無線電信ヨリ無線標識局又ハ陸上無線電信ニ對スル呼出及標識符號送信ノ請求　當該無線標識局又ハ陸上無線電信ノ聽守電波

(ハ)無線標識局又ハ陸上無線電信ニ於テ航空機無線電信ヨリノ呼出又ハ方位測定ノ請求ニ對スル應答其ノ他標識符號ノ送信　無線標識局ニ在リテハA一又ハA二電波一九四KC乃至三六五KCノ周波數帶ニ於テ當該無線標識局ニ割當テタル周波數、陸上無線電信ニ在リテハ當該陸上無線電信ニ於テ通常通信ニ使用スル電波

第八條　本令ニ規定ナキ事項ハ一般ノ無線電信通信方法ニ關スル規定ニ依ルベシ

第二章　無線羅針業務

第九條　船舶無線電信ニ於テ無線羅針局ニ對シ方位測定ノ請求ヲ爲サントスルトキハ該無線羅針局ノ通常方位測定區域内ニ入リタルトキ之ヲ爲スベシ

第十條　船舶無線電信ニ於テ無線羅針局ニ對シ方位測定ノ請求ヲ爲サントスルトキハ該無線羅針局ヲ呼出シ其ノ呼出ニ引續キ左ノ區別ニ從ヒ之ニ該當スル事項ヲ略符號ヲ以テ送信スベシ此ノ場合船舶無線電信ニ於テ該無線羅針局ノ測定電波ニ非ザル電波ヲ以テ方位測定ニ供スル符號ヲ送信セントスルトキハ該略符號ノ次ニ使用電波ノ型式及周波數ヲ送信スベシ

區別	事項	略符號
一	當該無線羅針局ニ對シ直接方位測定ノ請求ヲ爲ス	當船ノ眞方位如何

〔海軍〕

二　主無線羅針局及副無線羅針局ニ依ル方位測定ノ請求ヲ爲ストキ　貴局ノ宰領スル無線羅針局ヨリノ當船ノ眞方位如何

三　主無線羅針局又ハ副無線羅針局ノミニ依ル方位測定ノ請求ヲ爲ストキ　、、、(呼出符號)ヨリノ當船ノ眞方位如何

四　主無線羅針局及副無線羅針局ニ依ル位置ノ測定ノ請求ヲ爲ストキ　貴局ノ宰領スル無線羅針局ノ爲シタル測定ニ基ク當船ノ位置ヲ示サレタシ

QTE?

QTF?

第十一條　船舶無線電信ニ於テ主無線羅針局又ハ副無線羅針局ノミニ對シ方位測定ノ請求ヲ爲サントスルトキハ其ノ主無線羅針局ヲ呼出シ之ニ前條ノ方法ニ依リ必要ノ事項ヲ送信スベシ此ノ場合ニ於テハ略符號「QTE?」ノ次ニ該無線羅針局ノ呼出符號ヲ添送スベシ

第十二條　船舶無線電信ニ於テ二以上ノ無線羅針局(主無線羅針局ヲ除ク)ニ對シ方位測定ノ請求ヲ爲サントスル場合各無線羅針局ノ聽守電波同一ナルトキハ事情ノ許ス限リ各局ヲ一括呼出シタル上同時ニ方位測定ヲ爲サシムベシ

第十三條　主無線羅針局ニ於テ船舶無線電信ヨリ方位測定ノ請求ヲ受ケタルトキハ自局限リ測定ヲ爲スベキ場合ヲ除クノ外副無線羅針局ニ對シ方位測定ノ準備ヲ爲スベキ旨ヲ通知スベシ

副無線羅針局ニ於テ主無線羅針局ヨリ前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ直ニ方位測定ノ準備ヲ完了シ其ノ旨ヲ主無線羅針局ニ通知スベシ

第十四條　無線羅針局ニ於テ船舶無線電信ヨリ方位測定ノ請求ヲ受ケタル場合ニ於テ測定ノ準備ヲ完了シタルトキハ該船舶無線電信ニ對スル應答ニ際シ方位測定ニ供スル符號ヲ送信スベキ旨(可設符號K)ヲ通知スベシ

第十二條ニ依リ一括呼出ヲ受ケタル無線羅針局ハ其ノ呼出符號ノ「アルファベット」順ニ從ヒ前項ノ方法ニ依リ通知スベシ

第十五條　船舶無線電信ニ於テ無線羅針局ニ對シ方位測定ニ供スル符號ノ送信ヲ爲サントスルトキハ所定ノ電波ニ依リ該無

〔海軍〕

線羅針局ニ於ケル方位測定上必要ナル最少限度ノ電力ヲ以テ自己ノ呼出符號ヲ其ノ長點ヲ稍長クシテ五十秒間反覆送信スベシ

第十六條　副無線羅針局ニ於テ方位測定ヲ爲シタルトキハ其ノ結果ヲ直ニ主無線羅針局ニ通知スベシ

第十七條　無線羅針局ニ於テ方位測定ノ結果ヲ船舶無線電信ニ通知セントスルトキハ當該無線羅針局（方位測定ヲ爲シタル無線羅針局）所在地ノ地方標準時ニ依リ「〇〇〇一（午前〇時一分）」ヨリ「二四〇〇（午後十二時）」ニ至ル四位ノ數字ヲ以テ表ハス方位測定時刻ヲ送信シ之ニ引續キ左ノ區別ニ從ヒ之ニ該當スル事項ノ略符號及「〇〇〇」ヨリ「三五九」ニ至ル三位ノ數字ヲ以テ表ハス當該無線羅針局（方位測定ヲ爲シタル無線羅針局）ヨリノ眞方位又ハ經緯度ヲ以テ表ハシタル地理的位置ヲ送信スベシ

區別	事項	略符號
一	無線羅針局ニ於テ貴船ノ眞方位ハ當局ヨリノ貴船ノ眞方位ハ、、、、、、度ナリ	QTE
二	主無線羅針局ニ於テ自局及副無線羅針局ニ於ケル方位測定ノ結果ヲ通知スルトキ	貴船ノ眞方位ハ、、、、、（呼出符號）ヨリ、、、、、、度、、、、、（呼出符號）ヨリ、、、、、度ナリ
三	主無線羅針局ニ於テ自局及副無線羅針局ニ於ケル方位測定ノ結果ヲ通知スルトキ	貴船ノ眞方位ハ、、、、、（呼出符號）ヨリ、、、、、、度、、、、、（呼出符號）ヨリ、、、、、度ナリ
四	主無線羅針局ニ於テ自局及副無線羅針局ニ於ケル方位測定ノ結果ヲ通知スルトキ	當局ノ宰領スル無線羅針局ノ爲シタル測定ニ基ク貴船ノ位置ハ緯度、、、、經度、、、、ナリ	QTF

第十八條　主無線羅針局ニ於テ自局若ハ副無線羅針局ニ於ケル方位測定ノ結果ノミヲ又ハ之ヲ取纏メ船舶無線電信ニ通知セントスルトキハ前條ノ方法ニ依ルノ外眞方位ヲ表ハス數字ノ前ニ之ヲ測定シタル無線羅針局ノ呼出符號ヲ送信スベシ

第十九條　船舶無線電信ニ於テ無線羅針局ヨリ方位測定ノ結果ノ通知ヲ受ケタルトキハ照校ノ爲該無線羅針局ニ對シ方位測定時刻及方位又ハ位置ヲ表ハス數字ヲ受信シタル順序ニ依リ送信スベシ

第二十條　無線羅針局ニ於テ前條ノ送信ニ誤リナキコトヲ認メタルトキハ解信符號ヲ送信スベシ

第二十一條　主無線羅針局ト副無線羅針局トノ間ノ連絡ハ電信電話ノ連絡アル場合ハ之ニ依リ其ノ連絡ナキ場合ハ無線電信無線電話ニ依リ之ヲ爲スベシ

第三章　無線標識業務

第二十二條　無線方位測定機ノ裝置ヲ有スル船舶無線電信ニ於テ無線標識局ニ對シ標識符號ノ送信ヲ請求セントスルトキハ該無線標識局ノ通常方位測定區域ニ入リタルトキ之ヲ呼出シ其ノ呼出ニ引續キ左ノ事項ニ該當スル略符號ヲ送信スベシ

事項	略符號
標識符號ノ送信ヲ乞フ	QTG?

第二十三條　無線標識局ニ於テ船舶無線電信ヨリノ請求ニ依リ標識符號ノ送信ヲ爲サントスルトキハ一分間ノ間隔ヲ以テ前條ノ送信ヲ反覆スベシ

第二十四條　無線標識局又ハ無線標識ニ於テ濃霧等ニ際シ其ノ附近ニ在ル船舶無線電信ニ對シ繼續シテ標識符號ノ送信ヲ爲サントスルトキハ一分間ノ間隔ヲ以テ前條ノ送信ヲ反覆スベシ

第二十五條　無線方位測定機ノ裝置ヲ有スル船舶無線電信ニ於テ陸上無線電信ニ對シ標識符號ノ送信ヲ請求セントスルトキハ第二十二條ノ方法ニ準ジ其ノ請求ヲ爲スベシ

第二十六條　前條ノ請求ヲ受ケタル陸上無線電信ニ於テ標識符號ノ送信ヲ爲サントスルトキハ第二十三條ノ方法ニ準ジ船舶無線電信ニ於ケル方位測定上必要ナル最少限度ノ電力ヲ以テ之ヲ送信スベシ

第二十七條　船舶無線電信ニ於テ濃霧等ニ際シ衝突ヲ豫防スル目的ヲ以テ其ノ附近ニ在ル船舶無線電信ニ對シ自己ノ所在ヲ知ラシメントスルトキハ附近船舶無線電信ニ於ケル方位測定上必要ナル最少限度ノ電力ヲ以テ自己ノ呼出符號、位置、針路、速力其ノ他必要ト認ムル事項ヲ其ノ前後ニ「QTM」ノ略

〔海軍〕

符號ヲ附シ且各送信符號ノ長點ヲ稍長クシテ送信スルコトヲ得

附　則

本令ハ昭和九年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

昭和二年五月遞信省令第十四號無線方位測定通信規則ハ之ヲ廢止ス

●私設無線電信規則ニ關スル件

大正四年十一月三十日
官房第三六八二號
（海軍次官ヨリ各鎭守府、第一、第二艦隊司令長官、各要港部、第三、練習艦隊、臨時南洋群島防備隊司令官、海軍教育本部長宛）

私設無線電信規則ニ關スル件

本年十一月一日ヨリ施行ノ大正四年遞信省令第四十六號私設無線電信規則第二十六條中ノ電信官署ヨリ發信スル無線電信ニ依ル私設停信符號及私設復信符號ハ海軍用無線電信ニ於テモ軍事通信上必要ト認ムル場合ハ之ヲ使用シ私設無線電信ノ停信及復信ヲ爲サシムルコトヲ得ル儀ニ有之候條御承知置相成度

右申進ス

參照　大正四年十月二十六日遞信省令第四十六號抄錄

第二十六條　電信官署ヨリ無線電信ニ依リ私設停信符號――――ヲ發信シタルトキハ更ニ私設復信符號――――ヲ發信スル迄其ノ通達距離內ニ於ケル總テノ私設無線電信ニ依ル通信ヲ停止スヘシ

●旅順港境域內ニ於テ無線電信電話發信ニ關スル件

昭和三年一月二十四日
軍務二第二四號ノ二
（海軍省軍務局長ヨリ佐世保鎭守府參謀長宛）

今般改正セラレタル旅順港規則第八條ノ二ニ依ル處理ニ關シ左記ノ通リ夫々協定セラレ候條可然御取計相成度

右依命申進ス

記

一、旅順港境域內ニ於テ關東廳ノ無線電信電話發信ヲ行フ場合ニハ遭難通信ヲ除クノ外當該官憲ヨリ豫メ所在海軍部隊長ニ協議スルコト

一、旅順港境域內又ハ其ノ附近ニ陸軍無線電信所アル場合ニハ海軍部隊長ハ無線電信電話發信ノ許可方針ニ關シ豫メ當該陸軍電信所々屬部隊長ト協議スルコト

〔海軍〕

●帝國領海內ニ在ル外國軍艦ノ無線電信無線電話ニ依ル通信ニ關スル件

昭和二年七月十一日
勅令第二百二十六號

朕帝國領海內ニ在ル外國軍艦ノ無線電信無線電話ニ依ル通信ニ關スル件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム（總理、海軍、陸軍、遞信大臣副署）

第一條　軍港若ハ要港ノ境域內又ハ軍港若ハ要港ノ境域ヨリ外方二十キロメートル以內ノ領域內ニ於テ外國軍艦（碇泊中ノモノ）又ハ外國軍用航空機ガ無線電信又ハ無線電話ヲ送信セントスルトキハ豫メ其ノ使用セントスル送信機ノ型式、送信電力、電波長及通信時間ヲ具シテ當該鎭守府司令長官又ハ要港部司令官ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス但シ遭難通信ハ此ノ限ニ在ラズ

第二條　前條ニ規定スル區域以外ノ領域內ニ於テ外國軍艦（碇泊中ノモノ）又ハ外國軍用航空機ガ無線電信又ハ無線電話ヲ送信スル場合ニハ左ノ各號ノ定ムル所ニ依ル

一　遭難通信ヲ爲ス場合ヲ除クノ外六百メートル及二千四百メートルノ電波長ヲ使用スルコトヲ得ス

二　純粹ナル不衰滅電波ヲ使用スル場合ヲ除クノ外長時間ニ亙リ連續送信ヲ爲スコトヲ得ス

三　無線電信官署又ハ軍用無線電信所ヨリ送信停止ノ要求ヲ受ケタルトキハ直ニ送信ヲ停止スルコトヲ要ス

四　附近ニ帝國軍艦碇泊スルトキハ送信ニ付指揮官ト協議スベシ

附　則

本令ハ昭和二年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

〔海軍〕

●無線電信電話發信許可方針ニ關シ陸軍官憲ト協議ヲ要スル件

昭和二年七月十一日
軍務二第二一九號
（軍務局長ヨリ各鎭守府、各要港部參謀長宛）

無線電信電話發信許可方針ニ關シ陸軍官憲ト協議ヲ要スル件

昭和二年勅令第二百二十六號（外國軍艦及軍用航空機ノ無線取締ノ件）第一條及昭和二年海軍省令第十號第十九條ノ二（軍港要港境域内無線取締ノ件）ニ關シ海軍省陸軍省間ニ左記ノ通協定セラレ候條御了知相成度

右申進ス

記

當該條ノ區域内ニ陸軍所屬ノ無線電信所アル場合ニハ鎮守府司令長官又ハ要港部司令官ハ許可方針ニ關シ豫メ當該無線電信所所屬部隊長ト協議スルコト

●國際電信上ニ於ケル官報傳送上ノ先順位拋棄ニ關スル件

大正十五年十一月三日
官房第三四〇九號ノ二
（海軍會計官ヨリ各鎮長官）

國際電信上ニ於ケル官報傳送上ノ先順位拋棄ニ關スル件

本件ニ關シ左記ノ通遞信次官ヨリ本省次官宛申進有之候條御承知相成度

右通牒ス

記

大正十五年十月二十七日外信第一三八二號（通信次官ヨリ海軍次官宛）

國際電信上ニ於ケル官報傳送上ノ先順位拋棄ニ關スル件

國際電信上ニ於テ官報ハ萬國電信條約第五條ニ依リ他ノ種類ノ電報ニ優先シテ傳送セラルルコトト相成居候處近來ノ如ク官報ノ往復多數ナル狀況ニ於テハ總テノ官報ヲ其ノ内容ノ急不急ヲ問ハス常ニ優先ニ傳送スルコトハ當ニ實際至急ノ性質ヲ有スル官報ノ遲達ヲ釀スコトトナルノミナラス一般公衆ノ電報ニ對シテモ之カ速達ヲ妨ケ大ナル不便ヲ與フルモノナルニ鑑ミ客秋佛國巴里ニ開催ノ萬國電信會議ハ別紙甲號譯文ノ如キ希望ヲ決議スルト共ニ來ル十一月一日ヨリ施行ノ國際電信業務規則中ニ別紙乙號ノ如キ規定ヲ設ケ官報ノ先順位傳送ノ利益ハ之ヲ拋棄シ得ルモノトシ此ノ場合該官報ハ通常私報ト同順位ニテ傳送スルコトトシテ右ノ不便ヲ救濟スルコトトナリタルニ就テハ委曲別紙ニ依リ御了知ノ上貴廳發著ノ官報ニシテ實際至急ノ取扱ヲ要セサルモノハ其ノ先順位ヲ拋棄シ當該電報ニハ「Sans Priorité」「先順位拋棄」又ハ之ニ相當スル語辭ヲ記載シテ賴信相成樣致度

〔海軍〕

此段申進候也

追テ右先順位ノ拋棄シタル官報ハ傳送順位上通常私報ト同一ノ取扱ヲ爲スモ其ノ他ノ點ニ付テハ總テ官報タルノ利益ヲ有スル次第ニ有之候

（甲號）

官報ノ傳送順位ニ關シ巴里萬國電信會議ノ決議シタル希望

巴里萬國電信會議ハ左ノ希望ヲ表示ス

「各電信主管廳ハ其ノ所屬政府ノ各部ニ對シ官報ノ先順位ハ實際至急ノ性質ヲ有スルモノノミニ對シ之ヲ求ムルコトカ各部自身竝一般公衆ニ對シ利益トナルヘキモノナルコトニ付政府各部ノ注意ヲ求ムヘキモノトス」

（乙號）

國際電信業務規則第五章官報第十六條抄錄

七　官報ノ發信人ハ條約第五條ニ定メタル傳送ノ先順位ヲ拋棄スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ電報ノ賴信紙ハ發信人ノ記載スル「Sans Priorité」ナル記事ヲ有スルコトヲ要ス又此ノ電報ハ傳送ノ順序ニ於テハ通常私報トシテ之ヲ取扱フ

（參照）萬國電信條約第五條

電信ヲ區分シテ左ノ三種トス

第一　官　報

即チ同盟國首長大臣陸海軍將帥公使又ハ領事ノ通信及此等通信ニ對スル返信ヲ云フ

第二　局　報

即チ同盟國各電信局ヨリ出セル報信ニシテ萬國電信ノ處務ニ關シ或ハ各國協議ノ上國益トナルヘキ事件ニ關スル者ヲ云フ

第三　私報傳送ハ總テ官報ヲ先ニシ他ノ報信ヲ後ニス

〔海軍〕

●英國及海外諸港ニ於ケル外國軍艦無線電信電話通信規則

大正十四年六月二十日
官房第二一八八號

客年七月官房第二三一一號ヲ以テ申進置候英國及北方愛蘭諸港ニ於ケル外國軍艦ノ無線電信電話使用管理規則ハ今般別紙ノ通改正シ其ノ適用地域ヲ英帝國内各港ニ擴張セシ旨在本邦英國大

使ヨリ通報アリタル趣外務省ヨリ通牒ニ接セリ此ノ旨心得ヘシ

（別紙）

英國及海外諸港ニ於ケル外國軍艦無線電信電話通信規則

一、軍港又ハ軍港ニ接近セル港灣ニ碇泊中ノ外國軍艦及隨伴軍用航空機無線電信又ハ無線電話ヲ使用セント欲スルトキハ其ノ型式、使用波長及ヒ行ハントスル通信時刻ヲ具シテ軍港所在海軍先任將校ノ許可ヲ受クルヲ要ス

二、軍港ニ接近セサル港灣ニ碇泊中ノ外國軍艦及隨伴航空機ハ左記ニ依ルヘシ

(イ)　遭難通信ノ發信又ハ受答ノ外六〇〇米ノ波長ヲ使用スヘカラス

(ロ)　海軍、陸軍、空軍或ハ陸上無線電信所ノ通信ヲ妨害スヘカラス

(ハ)　(1)海軍官憲　(2)港務官憲　(3)陸上無線電信所ヨリ要求アリタルトキハ通信ヲ停止スヘシ

(ニ)　不衰滅以外ノ電波ヲ使用スル長時間ノ通信ヲ避クヘシ

(ホ)　所在港灣ニ英國又ハ屬領ノ艦隊若クハ軍艦碇泊スルトキハ其ノ海軍先任將校ニ協議スヘシ

●香港碇泊中ノ外國軍艦無線電信使用ノ件

昭和二年八月十一日　官房第二六七一號ノ二

（海軍有關官ヨリ部内一般宛）

香港碇泊中ノ外國軍艦無線電信使用ノ件

首題ノ件ニ關シ今般在香港野々村總領事官事務代理ヨリ別紙ノ通報告アリタル旨外務省ヨリ通牒有之候

右通牒ス

追テ明治四十四年官房第一四二六號及大正十三年官房第二五六四號ハ自然消滅ノコトト御承知相成度

（別紙）

一九二七年五月一日附英國支那艦隊司令官「テイルウイツト」中將制定同六月三十日官報告示

香港ニ寄港スル英國以外ノ外國軍艦ノ無線電信裝置使用ニ關シテハ左記各號ノ定ムル所ニ依ルベシ

一、遭難通信、緊急通信又ハ D、Aguilar（VPS）ト直接交信スル場合ノ外六百メートルノ波長ヲ以テ送信スルコトヲ得ズ

二、左記波長ノ使用ヲ禁ズ

二十五メートル、三十三メートル乃至三十六メートル、二百五十メートル、三百メートル、六百メートル、八百メートル、千二百メートル、二千二百メートル、二千四百メートル

三、出來得ル限リ純粹ナル持續電波ヲ使用スルコトヲ要ス

四、D' Aguilar（VPS）Kowloon 測候所（GOW）又ハ Stonecutters（BXY）ヨリ「待テ（S）」ノ要求ヲ受ケタル時ハ之ニ應ジ「繼續（K）」ヲ受クル迄送信ヲ再開スベカラズ

連續送信中ハ十分間毎ニ間隔ヲ置キ六百メートルノ波長ヲ待受ケ前項「待テ」ヲ注意スベシ

●香港殖民地領海内商船無線電信使用規則　明治四十五年一月十二日　官房第六三號

香港殖民地領海内ニ於ケル商船据付無線電信使用規則變更ノ件ニ關シ在同地船津總領事代理ヨリ別紙ノ通報告有之候趣外務大臣ノ通牒ニ接シ候條此旨心得ヘシ

（別紙）

明治四十四年十一月二十九日公信第三八號（總領事代理ヨリ外務大臣宛）

香港殖民地領海内ニ於ケル商船据付無線電信使用規則變更ノ件

當地ニテハ今尚ホ一般公衆ニ對スル無線電信局ナク又碇泊中ノ商船ニテ無線電信器機ヲ有スルモノモ使用スルコトヲ得サリシカ客年四月三十日ニ至リ海難ノ場合及ヒ特ニ當地郵便局總長ノ許可ヲ受クルトキハ商船内ノ無線電信ヲ使用スルコトヲ許スニ至リ又本年三月ニ至リ當殖民地領水内ニ在ル各國軍艦ハ午前六時ヨリ同八時迄午後五時ヨリ同七時迄ノ間其ノ艦上ノ無線電信使用ヲ許スコトトナリタルモ公衆殊ニ船舶業者ノ不便ハ依然トシテ甚タシカリシカ這回當地殖民政府ハ當該汽船會社ノ願出ニ依リ其領水内碇泊中ノ各商船備付無線電信使用方許可スヘキ旨本月二十七日官報ヲ以テ發布セリ尤モ英國海軍ヨリ中止信號（―・―・―・―・―）アリタル場合直チニ其ノ命令ニ應セサル時ハ右許可ハ取消サルヘシ而シテ該中止信號ハ英國軍艦カ自己ノ通信ヲ妨碍サルルコトナクシテ使用セムトスル緊要

（海軍）

ノ場合ニ發セラルルモノニシテ其使用濟ミノ信號（■■■■■■■）アリタルトキハ商用通信ハ再ヒ繼續サレ得ルモノナリ之ニ因リテ今後ハ幾分カ公衆ノ殊ニ船舶業者ノ不便ヲ減スルコトヲ得ヘシ

右御參考迄原文寫相添及報告候敬具　（原文寫省略）

●南阿聯邦港灣ニ於ケル外國軍艦及其ノ搭載軍用航空機ノ無線電信電話使用ニ關スル規程

大正十三年十二月十九日
官房第三八二六號

南阿聯邦領海內ニ於ケル外國軍艦及其附屬飛行機ニ對スル無線電信及電話使用制限令ニ關シ南阿聯邦總督府ヨリ在「ケープタウン」今井領事宛別紙ノ通通報アリタル旨外務省ヨリ通牒ニ接セリ此旨心得ヘシ

（別紙）

一九二四年九月二十四日（ケープタウン總督府運輸局ヨリ在同日本領事宛）

拜啓三月三十一日附當府一三八一ノ一號通牒ニ關キ聯邦港灣ニ於ケル外國軍艦及其搭載軍用航空機ノ無線電信電話使用ニ關スル規程別紙寫一通御送付申上候

本規程ハ前通牒ニ於ケル各國軍艦及運送船ノ聯邦港灣訪問ニ關スル手續ノ一端ニ有之候

貴國關係諸方ニ御通報被爲下候ハハ幸甚ニ御座候　敬具

聯邦港灣ニ於ケル外國軍艦及其搭載軍用航空機ノ無線電信電話使用ニ關スル規程

（イ）軍港又ハ軍港ニ近接セル港灣ニ碇泊中ノ外國軍艦及其ノ搭載軍用航空機ニシテ其ノ無線電信又ハ無線電話ヲ使用セムトスルトキハ使用無線電信機ノ型式使用波長及通信セムトスル時刻ヲ具シテ軍港所在海軍先任將校ノ許可ヲ受クルヲ要ス

（ロ）軍港ニ近接セサル港灣ニ碇泊中ノ外國軍艦及其ノ搭載軍用航空機ハ左記各號ノ規程ニ遵フヘシ

（一）遭難電信ノ發信又ハ受信ヲ爲ス場合ノ外六〇〇米ノ波長ヲ使用スヘカラス

（二）海軍陸軍空軍其ノ他一般陸上無線電信所ノ通信ヲ妨害スルコトヲ避クヘシ

（三）海軍官憲、港務官憲、陸上無線電信所ヨリノ要求アリタルトキハ通信ヲ停止スヘシ

（四）純粹ナル不衰滅電波ヲ使用セサル送信機ヲ以テスル長時間ノ通信ヲ避クヘシ

（五）所在港灣ニ英國又ハ屬領ノ艦隊軍艦在泊スルトキハ其ノ先任將校ト協議スヘシ

●伊國及伊國殖民地港灣內ニ於テ外國軍艦ノ遵守スヘキ無線電信及無線電話使用規則ニ關スル件

大正十三年十一月六日
官房第三三五五號

伊國及伊國殖民地港灣內ニ於テ外國軍艦カ遵守スヘキ無線電信及無線電話使用規則ニ關スル一九二四年七月十日ノ同國勅令今般在本邦伊國大使ヨリ本國政府ノ訓令ニ基キ別紙ノ通送付越タル旨外務省ヨリ通牒ニ接セリ此ノ旨心得ヘシ

（別紙）

伊國及伊國殖民地港灣內ニ於テ外國軍艦ノ遵守スヘキ無線電信及無線電話使用規則

第一條

外國軍艦及之ニ隨伴スル航空機ハ王國及殖民地ノ要塞水域及港灣ニ在リテハ一九二三年三月二十九日勅令第八九九號ヲ以テ修正セル一九二二年五月二十八日勅令第八六〇號ノ規定ノ外尙左ノ無線電信及無線電話使用規定ヲ遵守スヘシ

伊國及伊國殖民地港灣內ニ於テ外國軍艦ノ遵守スヘキ無線電信及無線電話使用規則ニ關スル勅令

天祐ヲ保有シ國民ノ輿望ヲ負フテ伊國ノ王位ヲ踐メル朕「ヰツトリヨ、エマヌエーレ」第三世ハ

伊國及伊國殖民地港灣ニ於ケル外國軍艦ノ碇泊許可ニ關スル一九二二年五月二十八日勅令第八六〇號及前記勅令ヲ修正スル一九二三年三月二十九日勅令第八九九號ニ依リ

王國及殖民地港灣ニ於ケル外國軍艦ノ無線電信及無線電話使用ヲ規定スルノ適當ナルヲ認メ

海軍高等會議ノ諮詢ヲ經テ

外務大臣、陸軍大臣、殖民大臣及交通大臣ノ同意ヲ得タル海軍大臣ノ奏請ニ基キ

玆ニ左ノ如ク公布ス

第一條

外國軍艦及之ニ隨伴スル航空機ハ王國及殖民地ノ要塞水域及港灣ニ在リテハ一九二三年三月二十九日勅令第八九九號ヲ以テ修正セル一九二二年五月二十八日勅令第八六〇號ノ規定ノ外尙左ノ無線電信及無線電話使用規定ヲ遵守スヘシ

第二條

外國軍艦及之ニ隨伴スル航空機ハ王國及殖民地ノ海岸要塞及海軍根據地又ハ之ニ接近セル錨地（一九二三年三月二十九日勅令第八九號ヲ以テ修正セル一九二二年五月二十八日勅令第八六〇號第八條）ノ水域ニ在リテハ豫メ要塞又ハ港灣ノ司令部ニ通信ニ使用スル電波ノ種類及長サ、取扱時刻表ヲ提示シテ之カ許可ヲ受クヘシ

第三條

外國軍艦及之ニ隨伴スル航空機ハ海岸要塞又ハ海軍根據地ニ接近セサル王國及殖民地ノ他ノ港灣ニ在リテハ左ノ規定ヲ遵守スヘシ

(a) 波長六〇〇米ノ通信ヲ禁ス但シ救助信號又ハ之ニ應答スル場合ヲ除ク

(b) 移動又ハ固定王國無線局ノ通信ニ對スル干渉ヲ避クヘシ

(c) 通信ハ海軍官憲、港務官憲又ハ固定王國無線局ノ要求ニ應シテ之ヲ中止スヘシ

(d) 持續純粹電波ニ依ラサル裝置ヲ以テ長時間ノ通信ヲ行フコトヲ避クヘシ

(e) 王國軍艦在泊ノ場合ニハ豫メ其ノ高級指揮官ノ意見ヲ徵スヘシ

本令ハ公布ノ日ヨリ效力ヲ生ス

一九二四年七月十日

●瑞典領海內ニ於ケル外國船ノ無線電信設備使用ニ關スル一九二四年勅令

大正十四年二月十三日
官房第四七三號

瑞典領海內ニ於ケル外國船ノ無電設備使用ニ關スル千九百二十四年七月二十五日附勅令今般在瑞典岡田臨時代理公使ヨリ別紙ノ通送付越タル旨外務省ヨリ通牒ニ接セリ此旨心得ヘシ

（別紙）

瑞典領海內ニ於ケル外國船ノ無電設備使用ニ關スル千九百二十四年七月二十五日附勅令

無線電信無線電話等ノ電氣裝置ノ施設及使用ニ關スル千九百二十四年五月十六日附法律第九條（N121）ニ依リ瑞典皇帝ハ本令ヲ裁可ス

【海軍】

第一條　瑞典國領海內ヲ航行スル外國船上ニ施設セラレタル無電裝置ハ本令ニ於テハ之ヲ外國船ノ無電裝置ト稱ス

第二條

一、外國船ノ無電設備ハ瑞典國港區內ニ於テハ海軍軍令部長ノ同意ヲ得中央電信局ニ依リ特ニ許可セラレタルニ非サレハ之ヲ使用スルコトヲ得ス此ノ場合ニ於テハ中央電信局ノ發セル細則ヲ嚴守スヘシ

二、外國船ノ無電裝置ハ瑞典海岸局ヨリ十浬未滿ノ瑞典國領海上ニ於テハ遭難ノ際又ハ最近海岸局ト通信スル場合ノ外之カ使用ヲ許サス

三、中央電信局ハ海軍軍令部長ノ同意ヲ得テ第二號規定以外ノ瑞典國領海上ヨリノ通信ト雖外國船ノ無電裝置ノ使用ヲ禁止シ又ハ制限スルコトヲ得但シ遭難ノ場合ヲ除ク

第三條　瑞典國中央電信局ハ第二條ノ規定ニ從ヒ無電裝置ノ使用ヲ禁止セラレタル近海航行中ノ外國船ニ對シ其ノ無電裝置ノ使用停止ニ關シ必要ナル事項ニ關スル命令ヲ發スルノ權限ヲ有ス

第四條　中央電信局ハ全期間若ハ一定ノ期間又ハ特別ノ場合ニ於テ本令第二條第三號及第三條ヲ適用スルニ當リテハ關係法令ヲ適當ト認ムル方法ヲ以テ航海者ニ通知シ又水路鑑道管理局、中央稅關局及地方官憲ニ對シ其ノ管掌事務ニ從ヒ前記法令ノ嚴守ヲ監視セシメムコトヲ要求スルコトヲ得

第五條　瑞典國領海內ニ於テ外國船ノ無電裝置ヲ使用スルニ當リテハ當該關係者ハ反對ノ規定ノ存セサル限リハ現行無線電信條約ノ條項及同條約附屬施行細則ヲ遵守スヘシ

第六條　本令及本令ニ則リ中央電信局ノ發スル規定ニ違反シタル場合ニハ二十五乃至一千「クロナ」ノ罰金ニ處ス

第七條　第六條ノ犯罪ハ檢察官ニ依リテ訴追セラルヘシ

犯罪ニ關スル管轄裁判權ニ關シテハ海上法第三百二十八條ノ規定ヲ準用ス

前記違反者ニ課スヘキ罰金ハ「クロナ」ヲ以テ徵收ス違反者無資力ニシテ科料金額ノ支拂不能ナルトキハ刑法ノ規定ニ依リ換刑セラルヘシ

第八條　第六條及第七條ノ規定ハ軍艦ニ對シテハ之ヲ適用セス

本令ハ千九百二十四年八月一日ヨリ施行ス

【海軍】

千九百二十四年七月二十五日於「サーレー」島
瑞典皇帝「グスターブ」署名
遞信大臣「スフエン、リユーベツク」副署

●西班牙ニ於ケル外國艦船ノ無線電信電話局使用ノ件

昭和二年八月十一日
官房第二六七二號ノ二
（海軍省調査ヨリ部内一般宛）

西班牙ニ於ケル外國艦船ノ無線電信電話局使用ノ件
首題ノ件ニ關シ今般在西國太田公使ヨリ別紙ノ通報告アリタル旨外務省ヨリ通牒有之候
右通牒ス

（別紙）

外國船舶ノ無線電信電話局使用規則制定ニ關スル
西國政府通牒譯文

一九二七年六月四日C第六號馬德里（西班牙國外務大臣ヨリ日本國公使宛）
以書翰致啓上候陳者陛下ノ政府ハ今般外國艦船ガ西班牙國ノ港灣ニ滯在中無線電信電話局ヲ使用スル場合ニ關スル現行法規ヲ統一スルノ目的ヲ以テ今後是等通信ハ左記規則ニ依ルベキコトニ相定メ候

西國錨地港灣內ニ滯在中ノ外國艦船ハ其ノ種類ノ如何ヲ問ハズ豫メ許可ヲ得ルコトナクシテ西國無線電信局及無線電話局ヲ使用スルコトヲ得ズ

但シ難船又ハ不可抗力又ハ航海上止ムヲ得ザル場合ハ此ノ限リニ非ラズ

外交機關ニヨリ豫メ成規ノ認承ヲ得テ西班牙國ノ港灣ヲ訪問スル外國軍艦ニ付テハ無線局使用ノ許可ハ豫定航路ニ關シテ西國政府ノ同意ヲ得ル際同時ニ之ヲ請求スベシ

已ムヲ得ザル事情ノ下ニ寄港ヲ餘儀ナクセラレタル外國軍艦ノ場合ニハ當該港務長官ハ入港ノ事情ニ鑑ミ無電使用ノ許否ヲ決スベシ

右御通知申上候間貴國政府ヘ移牒方可然御取計相成度此段御依頼申進候

本大臣ハ此ノ機會ニ於テ重ネテ閣下ニ敬意ヲ表シ候　敬具

〔海軍〕

●希臘國領海內ニ於ケル外國軍艦ニ依ル無線電信使用ニ關スル同國大統領令

大正十四年四月二十日
官房第一四一二號

希國領海內ニ於ケル外國軍艦ニ依ル無線電信ノ使用ニ關シ在希臘國奧山公使ヨリ別紙同大統領令送付越タル旨外務省ヨリ通牒ニ接セリ此ノ旨心得ヘシ

（別紙）

希國領海內ニ於ケル外國軍艦ニ依ル無線電信使用ニ關スル同國大統領令

希國大統領ハ海軍大臣ノ申請ニ基キ本令ヲ裁可公布ス

第一條　希國軍港若ハ希國海軍基地境域內又ハ其ノ附近泊地ニ碇泊中ノ外國軍艦ハ其ノ無線電信又ハ無線電話ノ使用ニ當リテハ海軍基地又ハ軍港ノ長官ニ對シ豫メ使用スヘキ電波ノ種類及波長竝所要送信時間ヲ申告シ其ノ許可ヲ請求スルヲ要ス

第二條　軍港ニ近接セサル一切ノ希國海地ニ在ル外國軍艦ハ左記規定ヲ遵守スルヲ要ス

一　遭難信號ノ送信又ハ右信號ニ對スル返信ノ場合ヲ除クノ外六百米以上ノ波長ヲ使用スヘカラス

二　政府ノ常設又ハ假設ノ無線電信局ノ送信中ハ送信スルコトヲ得ス

三　左記ノモノヨリ要求アル場合ハ送信ヲ中止スルヲ要ス

A　一切ノ海上官憲

B　一切ノ港灣官憲

C　一切ノ常設海岸無線電信局

四　信文カ全然連續セサル場合ニ於テハ引續キ呼出ヲ行フコトハ之ヲ避クルヲ要ス

五　希國軍艦カ同一泊地ニ在ル場合ハ指揮官ノ許可ヲ受クルヲ要ス

海軍大臣ハ本令ノ公布施行ニ任ス

千九百二十四年十月二十五日　於「アテネ」
大統領　Paul Goundouriotis 署名
海軍大臣　G. Roussos 副署

〔海軍〕

●軍事郵便物ニ關スル件

明治三十七年二月六日
勅令第十九號

（國務各大臣副署）

戰役ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條ニ依リ軍事郵便物ニ關スル件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

第一條　軍事郵便ノ取扱ヲ開始シタル場合ニ於テハ左ニ揭クルモノヲ軍事郵便物ト爲スコトヲ得

一　戰時又ハ事變ニ際シ戰地若ハ之ニ準スヘキ地ニ在リ又ハ該地ニ派遣スル軍隊、軍艦、水雷艇、軍衙、軍人又ハ軍屬ヨリ發スル郵便物

二　戰時又ハ事變ニ際シ戰地又ハ之ニ準スヘキ地ニ在ル者ニシテ當該軍衙ノ許可ヲ得タル者ヨリ發スル郵便物

三　前二號ニ揭クル者ニ宛テ發スル郵便物

第二條　前條第一號及第二號ニ依ル軍事郵便物ハ其ノ料金ヲ免除ス

第三條　第一條第三號ニ依ル軍事郵便物ハ料金完納ノモノニ限ル（海軍）其ノ料金未納又ハ不足ノモノハ差出人ニ還付シ不納額ノ二倍ヲ徵收ス

第四條　軍事郵便物ニ關シテハ命令ヲ以テ制限ヲ設クルコトヲ得

第五條　軍事郵便物取扱ニ關スル損害賠償ハ命令ヲ以テ之ヲ制限スルコトヲ得

第六條　條約ニ依リテ取扱フ郵便物ニハ第二條乃至第五條ヲ適用セス

附　則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十七年勅令第六十七號ハ之ヲ廢止ス

（明治三十七年三月帝國議會承諾）

●軍事郵便物取扱開始

明治三十七年二月十三日
官房第五九八號ノ二

本年勅令第十九號ニヨリ遞信省ニ於テ軍事郵便ノ取扱ヲ開始ス

●軍事郵便取扱心得

明治三十七年二月十三日
官房第五三八號

軍事郵便取扱心得左ノ通定ム

軍事郵便取扱心得

第一條　戰地若ハ之ニ準スヘキ地ニ在ル軍人軍屬以外ノ者ヨリ發スル郵便物ニシテ該地ニ在ル左記官衙ノ一ヨリ許可ヲ得タルモノハ軍事郵便物トシテ取扱フモノトス

一　大本營
二　艦長、艇長、戰時特設船舶監督官
三　海軍港務部

前項郵便物ハ其表面ニ許可ヲ與ヘタル官衙ノ證印ヲ受ケ差出スヘシ

第二條　戰地若ハ之ニ準スヘキ地ニ於テ軍事郵便物ヲ差出ストキハ艦船又ハ部隊毎ニ責任者ヲ定メ之ヲ取纏メ公用ト私用トニ分チ尙戰地ニ宛テタルモノト戰地外ニ宛テタルモノトヲ各別把束スヘシ但シ野戰郵便局ニ差出ストキハ此ノ手續ニ依ラス各自之ヲ差出スコトヲ得

第三條　戰地外艦船郵便所ナキ地ニ於テ戰地ニ派遣スルモノヨリ差出ス軍事郵便物ハ各艦船又ハ各部隊ノ長ニ於テ軍事郵便物タルコトヲ證明シ責任者ヲ定メテ之ヲ取纏メシメタル上當該地ノ普通郵便局ニ差出スヘシ

第四條　野戰郵便局ヨリ郵便物ヲ配達スルトキハ各艦船ニ於テ定メタル責任者ニ交付スルモノトス但シ時宜ニ依リ郵便物受領者ノ派遣ヲ各艦船ニ請求スルコトアルヘシ

第五條　艦船郵便所若ハ第四條但書ニ依リ野戰郵便局ニ於テ艦船又ハ陸上ニアル海軍官衙若ハ部隊ニ對シ郵便物交付ノ信號ヲナシタルトキハ各艦船等ハ直ニ其受領者ヲ派遣スヘシ

第六條　書留及小包郵便物ハ艦船、官衙又ハ部隊ニ於ケル郵便物受領者ヲシテ本人ニ代リ受領セシムルモノトス

●軍事郵便規則

明治三十七年二月六日
遞信省令第六號

改正　大正六年第二號、第三五號、昭和六年第三一號

軍事郵便規則左ノ通相定ム

軍事郵便規則

第一條　軍事郵便物ニ關シ本規則ニ定メタルモノノ外ハ普通郵便ノ取扱ニ關スル規定ヲ準用ス

〔海軍〕

第二條　軍事郵便物ハ差出人ニ於テ其ノ表面ニ軍事郵便ノ四字ヲ記載シ尙ホ公用ニ屬スルモノハ公用ノ二字ヲ朱記スヘシ

第三條　戰地若ハ之ニ準スヘキ地ニ在リ又ハ該地ニ派遣スル軍隊、軍艦、水雷艇、軍衙、軍人、軍屬ニ宛テ又ハ該地ニ在ル者ニシテ當該軍衙ノ許可ヲ得タル者ニ宛テ發スル軍事郵便物ハ左ノ種類ニ限ル

一　通常郵便物
第一種　書狀
第二種　郵便葉書
第三種　每月一回以上刊行スル定期刊行物
第四種　書籍、印刷物、寫眞
二　小包郵便物

第四條　戰地若ハ之ニ準スヘキ地ニ在リ又ハ該地ニ派遣スル軍隊、軍艦、水雷艇、軍衙、軍人、軍屬竝ニ該地ニ在ル者ニシテ當該軍衙ノ許可ヲ得タル者ヨリ發スル軍事郵便物ハ左ノ種類ニ限ル

一　通常郵便物

第一種　書狀　一通ノ重量公用ハ五百五十グラム私用ハ十五グラムヲ超過セサルモノ但シ從軍記者等ノ軍事通信ニ關スル書狀ハ一通ノ重量ヲ二百グラム迄トナスコトヲ得

第二種　軍事郵便葉書、私製葉書　明治三十三年遞信省令第四十二號郵便規則第十八條ノ二乃至第十八條ノ六ニヨルモノ

二　小包郵便物　公用ニ限ル

第五條　第三條及第四條ニ定ムル軍事郵便物ノ種類ハ時宜ニ依リ之ヲ增減スルコトアルヘシ

第六條　公用軍事郵便物ハ書留、別配達、配達證明、留置及約束郵便トナスノ外特殊取扱トナスコトヲ得ス

第七條　私用軍事郵便物ニシテ第三條ニ依ルモノハ書留、留置及約束郵便又ハ第四條ニ依ルモノハ留置トナスノ外特殊取扱トナスコトヲ得ス但シ野戰郵便局又ハ海軍軍用郵便所ニ留メ置クヘキ郵便物ニ對シテハ留置通知ヲ請求スルコトヲ得ス

第八條　軍事郵便物ノ差出人ハ其ノ郵便物ノ差立前ニ限リ名宛變更又ハ取戻ヲ其ノ引受局所ニ請求スルコトヲ得但シ之カ爲メ事務ニ差支アルトキハ拒絶スルコトアルヘシ

第九條　軍事郵便物ノ別配達竝ニ軍事小包郵便物ノ轉送及還附ニ關シテハ別ニ料金ヲ徵收セス

第十條　第三條ニ依ル軍事郵便物ハ普通郵便局ノ取扱中ニ亡失又ハ毀損シタル場合ニ限リ普通郵便ニ關スル規定ニ依リ其ノ損害ヲ賠償ス

第四條ニ依ル軍事郵便物ニ對シテハ總テ其ノ損害ヲ賠償セス

●軍事郵便物差出方制限

明治四十三年十一月十日
遞信省令第百八號

改正　大正二年第一〇五號、一二年第三〇號、昭和六年第三二號

明治三十七年二月勅令第十九號ニ依ル軍事郵便物ハ自今朝鮮、南洋群島又ハ中華民國ニ在リテ現ニ陸海軍ノ勤務ニ服スル下士兵卒ノ差出スモノニ限リ左記各號ニ依リ之ヲ取扱フ

一　軍事郵便物ハ重量十五グラム以內ノ第一種通常郵便物ニ限ル

二　軍事郵便物ハ一人ニ付一月二通ヲ限リ差出スコトヲ得

三　軍事郵便物ニハ其ノ表面ニ軍事郵便證票ヲ貼付スヘシ

四　軍事郵便證票ハ三錢郵便切手ニ「軍事」ノ文字ヲ印刷シタルモノトシ別ニ定ムル所ニ依リ之ヲ交付ス

本令ハ明治四十三年十二月一日ヨリ之ヲ施行ス

●軍事郵便證票

明治四十三年十一月二十二日
官房第四〇一〇號

改正　明治四五年第一四七三號

明治四十三年十一月遞信省令第百八號ニ依リ朝鮮及清國ニ於テ軍務ニ服スル海軍下士兵卒ニ交付スヘキ軍事郵便證票ノ受取方ハ左記ニ依リ取扱フ義ト心得ヘシ

一　朝鮮ニ在ル各防備隊ハ其ノ部隊長朝鮮總督府通信局長官ト協議ノ上受取ルコト

二　旅順鎭守府管下ノ各部隊ハ同鎭守府參謀長關東都督府通信管理局長ト協議ノ上受取ルコト

三　支那派遣ノ艦船ハ同艦船ノ屬スル艦隊ノ參謀長（參謀長ナキトキハ首席參謀）、艦隊旗艦現在セサルトキハ首席艦船長若クハ驅逐隊艇隊司令可成之ヲ取纏メ北支那ニ於テハ關東都督府通信管理局長、南支那ニ於テハ在上海帝國郵便局長ト協議ノ上當該局長ヨリ受取ルコト

〔海軍〕

●軍艦閉嚢郵便ノ件

明治四十年九月二十三日
官房第三八四〇號

（逓信次官ヨリ各所管局官宛）

軍艦閉嚢郵便ノ件

別紙ノ通遞信次官ヨリ通牒ニ接シ候條御廳下一般ヘ通達方可然取計相成度此段申進候也

（別紙）

明治四十年九月十九日通第四三七一號（逓信次官ヨリ逓信次官宛）

萬國郵便條約ニ依ル軍艦閉嚢ノ方法ハ這般練習艦隊及巡洋艦隊ニ對シ其都度御照會ニ應シ實施致來候處今十一般ノ規定トシテ之ヲ實施スル方利便ト認メ候ニ付來十月一日ヨリ施行セラルヘキ改正外國郵便規則中別紙之通規定ヲ設クルコトニ相成候此段及通牒候也

外國郵便規則

第四十八條　軍艦閉嚢ハ遞信大臣ノ指定スル帝國郵便局ト帝國郵便局ノ設備ナキ郵便聯合國ニ在ル帝國ノ艦隊又ハ軍艦トノ間ニ之ヲ交換ス

第四十九條　軍艦閉嚢ニ納ムル郵便物ハ特殊取扱ト爲ササル料金完納ノ通常郵便物ニ限ル此ノ郵便物ニハ名宛面ニ「軍艦郵便」ノ文字ヲ記載スヘシ

前項ノ郵便物ニハ料金其ノ他ニ關シ內國郵便ノ規定ヲ準用ス

〔海軍〕

●桑港ニ於ケル軍艦閉嚢郵便受領方ノ件

昭和三年四月二十七日
官房第一五一〇號

（海軍省副官ヨリ關係各廳宛）

桑港ニ於ケル軍艦閉嚢郵便受領方ニ關スル件

閉嚢郵便交換ヲ行フ艦船桑港ニ寄港ノ際ハ郵便物ノ速達ヲ計ル爲在泊中毎日左記ノ場所ニ受領者ヲ派遣相成度

右申進ス

記

The Ferry Station of the San Francisco Post Office

第四款　従軍通信其ノ他

●海軍従軍新聞通信者心得

明治三十七年二月十二日
海軍省告示第八號

海軍従軍新聞通信者心得左ノ通定ム

海軍従軍新聞通信者心得

第一條　海軍ニ従軍セントスル新聞通信者ハ大本營海軍幕僚ニ出願シ其ノ許可ヲ受クヘシ

第二條　従軍新聞通信者ハ其ノ所屬艦隊軍隊ノ指揮官ノ命令ニ従フヘシ

第三條　従軍新聞通信者ハ艦隊軍隊ノ指揮官ノ指名セル將校ノ檢閲ヲ經ルニアラサレハ軍事ニ關スル一切ノ文書ヲ發送スルコトヲ得ス

第四條　艦隊軍隊ノ指揮官ハ従軍新聞通信者ノ従軍許可ヲ取消スコトアルヘシ

第五條　従軍新聞通信者ノ取扱ニ關スル必要ナル規程ハ艦隊軍隊ノ指揮官ノ定ムル所トス

第六條　従軍新聞通信者ハ洋服ヲ著シ低圓形ニシテ庇附ノ帽ヲ用ヒ其ノ左臂ニ幅一寸ノ白色羅紗ヲ纏ヒ何新聞通信者ト記スヘシ

第七條　従軍新聞通信者ハ常ニ第一條ノ許可書ヲ携帶シ陸海軍官憲ヨリ請求アルトキハ之ヲ開示スヘシ

●従軍外國通信員海上通信規定

明治三十七年三月二十八日
官房第一一四一號ノ三

従軍外國通信員海上通信規定當分ノ間左ノ通定ム

従軍外國通信員海上通信規定

一　本規定ハ従軍外國通信員ニ於テ帝國政府ノ許諾ヲ得通信船ヲ使用シ戰地若ハ其ノ附近ニ在テ通信ヲ爲サシムルトキ遵守スヘキコトヲ規定スルモノトス

二　左ニ列記スル事項ハ豫メ大本營ニ届出テ其ノ認可ヲ受クルヲ要ス

船名國籍及其ソ總噸數

船長以下乘員ノ名簿（通信員若ハ技師等乘船スル場合ニハ其ノ目的竝氏名ヲモ記載スルヲ要ス）

出入スヘキ港灣名

豫定航路
通信裝置

三　通信船ノ發著竝其ノ到達目的地ハ通信員若クハ船長ヨリ成ルヘク速ニ之ヲ所在帝國陸海軍ノ首席指揮官ニ報告スヘシ

四　戰地又ハ其ノ附近所在ノ帝國陸海軍指揮官ハ軍事上必要ト認ムルトキハ通信船ノ行動ヲ制限スルコトアルヘシ

五　我軍ノ行動ニ關スル通信ハ總テ其ノ地所在ノ帝國陸軍若ハ海軍首席指揮官若ハ其ノ指定スル官憲ノ檢閱ヲ受クヘキモノニシテ又帝國艦船ノ所在竝其ノ未來ノ行動ニ關スル一切ノ事項ハ之ヲ通信スルコトヲ得サルモノトス
前項ノ指揮官ハ軍事上必要ト認ムルトキハ一時通信ノ中止ヲ命スルコトアルヘシ

六　通信船ニ無線電信機ヲ裝置スルトキハ左ノ諸條項ヲ遵守スヘキモノトス

(a)　通信船ト無線電信ヲ交換スヘキ對手方ノ名ヲ豫メ大本營ニ屆出テ其ノ通信番號ヲ承合スヘキコト

(b)　通信ニハ必ス祕密暗號ヲ用ヒ決シテ平文ヲ用ユヘカラサルコト而シテ其ノ暗號書ハ豫メ大本營ヘ提出スヘキコト

(c)　帝國艦船ニ於テ現ニ無線電信ノ通信ヲ爲シツツアルトキハ決シテ通信ヲ試ミサルコト

(d)　帝國艦船ヨリ「送信ヲ中止セヨ」ナル合圖（——·——·）アルトキハ送信中タリトモ直ニ之ヲ中止スヘキコト

(e)　所在帝國海軍ノ首席指揮官軍事上必要ト認ムルトキハ通信時間ヲ毎日何時ヨリ何時迄ト指定スルコトアルヘキコト

七　以上ノ條件ニ違反スル行爲アリト認ムルトキハ所在帝國陸軍若ハ海軍首席指揮官ハ直ニ通信船ノ使用ヲ禁止スルコトアルヘシ

●日本船舶國際通信書使用ノ件

昭和八年八月十一日
遞信省令第三十四號

日本船舶ハ左ノ國際通信書（國際通信書若ハ英和對譯國際通信書）ヲ使用スヘシ

國際通信書　電信篇
英和對譯國際通信書　信號篇
英和對譯國際通信書　電信篇

附則

本令ハ昭和九年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十四年十月遞信省令第四十四號ハ之ヲ廢止ス

●英領喜望峯殖民地信號所變更ノ件

明治四十二年三月六日
官房第六九一號

英領喜望峯殖民地ニ於ケル信號所變更ノ件ニ付別紙ノ通外務大臣ヨリ移牒有之候條此旨心得ヘシ

（別紙）

英領喜望峯殖民地ニ於ケル信號臺變更ノ件

英領喜望峯殖民地ニ於ケル信號臺變更ノ件ニ關シ今般在本邦英國大使ヨリ別紙寫ノ通申越有之候ニ付右竝ニ及御移牒候間御査閱相成度此段申進候也

（別紙譯文）

第十八類　從軍通信其ノ他

拜啓喜望峯殖民地シモンスタウンクインスバッテリーノ信號所ハ今般メーン、バラックニ移轉致候就テハ「キングス、レギレーション」附錄第七ノ信號所表ハ不日陸軍令達ヲ以テ相當ノ改正ヲ加ヘラルル筈ニ有之候
右外務大臣ノ訓令ニ依リ申進候條關係官廳ニ御移牒有之度此段得貴意候敬具

一千九百九年二月十六日

英國大使　クロード、マクドナルド

外務大臣　伯爵　小村壽太郎殿

〔海軍〕

●英領「バーミユーダ」群島信號所變更ノ件

明治四十二年五月十九日
官房第一七七六號

英領「バーミユーダ」（Bermuda）群島ニ於ケル「フオールト、ハミルトン」（Fort Hamilton）信號所ハ自今同島「フオールト、カンニンガム」（Fort Cunningham）ニ變更セラレタル旨在本邦英國大使ヨリ通知アリタル趣外務大臣ヨリ通牒ニ接セリ此旨心得ヘシ